

地域日本語教室における 外国人支援者の存在意義と、 かれらの「語り」に関する研究

平成 20 年度～平成 21 年度科学研究費補助金 [若手研究(B)]

(課題番号 : 20720139)

研究成果報告書

平成 22 年 3 月

研究代表者 : 御館 久里恵

(鳥取大学国際交流センター講師)

目 次

0.	はじめに	1
1.	研究の背景と目的	
1.1.	地域日本語教室における外国人支援者の存在	3
1.2.	外国にルーツを持つ子どもに対する支援活動と外国人支援者	4
1.3.	「当事者だった人」の語りの重要性 －「ライフコース」という視点	5
1.4.	研究の目的	6
2.	調査の概要と分析の方法	
2.1.	調査協力者と活動内容	9
2.2.	調査手順	10
2.3.	分析の方法	12
3.	外国人支援者のライフストーリー	
3.1.	Aさんのストーリー	13
3.2.	Bさんのストーリー	18
3.3.	Cさんのストーリー	26
3.4.	Dさんのストーリー	32
3.5.	Eさんのストーリー	38
3.6.	Fさんのストーリー	45
3.7.	Gさんのストーリー	49
3.8.	Hさんのストーリー	53
3.9.	考察	58
4.	外国人支援者が語る支援活動の意義	
4.1.	支援活動の目的と意義	64
4.2.	自分が支援活動をおこなうことの意義	65
4.3.	自分にとっての意義	67
4.4.	まとめ	68

5.	外国人支援者による支援活動の実際	
5.1.	Aさんの活動	70
5.2.	Bさんの活動	79
5.3.	外国人支援者が支援することの意義	87
6.	おわりに	89

【資料】

A.	調査依頼書および承諾書	91
B.	インタビューシート	95
C.	文字化の方法および用いた記号	97

0. はじめに

地域の日本語教室¹等で活動するボランティアの数は、年々増加しているが、その中には、日本語を母語としない外国出身者もいる。かれら²が新しく来日した外国人住民にとってのモデルとなり、母語を介して相談にのったり、自らの学習経験を生かして日本語学習を支援したりと、その存在意義が大きいことは想像に難くない。しかし、実際にかれらが来日後どのように地域社会で生活してきたのか、どのような思いをもって現在の支援活動に携わり、具体的にどのような活動をおこなっているのかは、いまだ明らかにされていない。

本研究は、地域日本語教室等において支援者として活動している外国出身者（以下、「外国人支援者³」）を対象に聞き取り調査と実際の学習支援活動の記録をおこない、かれらのライフストーリーとかれらが考える活動の意義、そして支援活動の実際を明らかにする。それによって、地域日本語教室等に外国人支援者が参加することの意義を明らかにするとともに、かれらの視点から支援のあり方を捉えなおすことを目的としたものである。調査研究は、2008（平成20）年度から2009（平成21）年度にかけて、科学研究費補助金の交付を受けておこなった。

この報告書では、まず第1章で本研究の背景および目的について述べる。第2章では、調査の概要と分析の方法を述べる。第3章では、8人の外国人支援者のライフストーリーを紹介し、社会的関係の構築と学び、アイデンティティや将来像といった視点から考察を加える。第4章では、外国人支援者が考える支援活動の意義を、かれらの語りから明らかにする。第5章では、2人の外国人支援者の実際の活動を分析し、その特徴と意義を明らかにする。第6章では、得られた知見をまとめて総括する。

本研究を実施するにあたり、多くの方々のご協力をいただいた。まず、日本語教室等での活動を録音・録画あるいは観察させていただき、その後のインタビューにおいて自らのライフストーリーを語ってくださった8人の外国人支援者のみなさんに、心からお礼を申し上げたい。また、かれらを紹介してくださったみなさん、かれらの活動する各団体の代表者・担当者の方々に、各団体に参加している学習者や他のボランティアのみなさんにも厚くお礼を申し上げる。そして、複雑な文字化・翻訳作業を丁寧におこなってくれたクラビオト・グラシエラさんをはじめ、文字化作業を手伝ってくださったみなさんにも、この場を借りて感謝の意を表したいと思う。

¹ いわゆる「教室」形態をとっておらず、マンツーマンや小グループで活動しているところもあるが、本研究では合わせて「地域日本語教室」と呼ぶ。

² 本報告書では、「彼ら」「彼女ら」を併せて「かれら」と表記することとする。

³ かれらの中には、日本国籍を持つ人もいるが、本研究では併せて「外国人支援者」と呼ぶ。

【研究組織】

研究代表者：御館 久里恵（鳥取大学国際交流センター講師）

【交付決定額】

（単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
2008（平成20）年度	700	210	910
2009（平成21）年度	500	150	650
合計	1,200	360	1,560

【研究発表】

御館久里恵（2009）「地域日本語教室における外国出身支援者の背景と、活動への参画のあり方」2009年度日本語教育学会研究集会第7回，日本学生支援機構大阪日本語教育センター，2009年9月26日

御館久里恵（2009）「地域日本語教室における外国出身者による支援活動の意義と役割」2009年度日本語教育学会研究集会第9回，愛媛大学，2009年11月28日

御館久里恵（2010）「外国にルーツを持つ子どもを支援する，学齢期に来日した大学生たちの語り－経験とアイデンティティの(再)構築－」2009年度日本語教育学会研究集会第11回，甲南大学，2010年3月13日

1. 研究の背景と目的

1.1. 地域日本語教室における外国人支援者の存在

日本社会における在住外国人の増加・定住化に伴い、国内各地域で日本語教室が開設されており、「生活者としての外国人」の貴重な学びの場となっている。地域における日本語教育のあり方として、社会参加のための言語保障と、社会変革（コミュニティ形成）のための相互の学びがあり、前者は公的機関が担うべきものであるとの議論もなされている（山田 2002 他）が、現状としては、主にボランティアベースである地域の日本語教室が、双方の機能を果たしているのが実態である。

そのような現状の中で、文化庁は平成 19 年度の新規事業として、「生活者としての外国人」のための日本語教育事業を立ち上げた（文化庁 2007）。事業内容はいくつかに分類されるが、その中に「日系人等を活用した日本語教室」「退職教員や日本語能力を有する外国人を対象とした日本語指導者養成」の項目がある⁴。滞在歴が長く、日本語能力も身につけた外国人住民を、指導者（支援者）として養成し、新しく来日した外国人住民の円滑な社会参加を図ろうとするものであろう。

また、AJALT（国際日本語普及協会）は同年、都道府県等の国際交流協会や地域日本語教室に対して外国人スタッフに関するアンケート調査を行い、その人数や活動内容等について明らかにしている（国際日本語普及協会、2007）。それによると、外国出身ボランティアが現在いる、あるいは過去にいたと答えた団体は合計 43.4%で、半数弱となっている（図 1）。また、外国出身ボランティアの担当している活動内容については、通訳・翻訳が多く、ついで生活相談やイベント関係となっているが、日本語学習支援を担当している人もいることがわかる（図 2）。

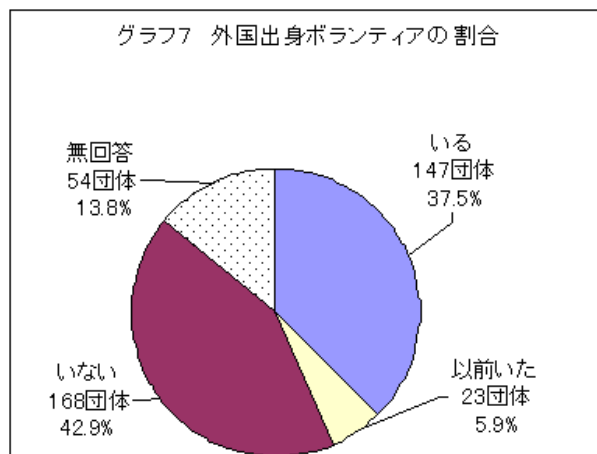


図 1

⁴ 2009（平成 21）年度より、これら 2 つの事業は「日本語能力を有する外国人等を対象とした日本語指導者養成」として 1 つに統合されている。

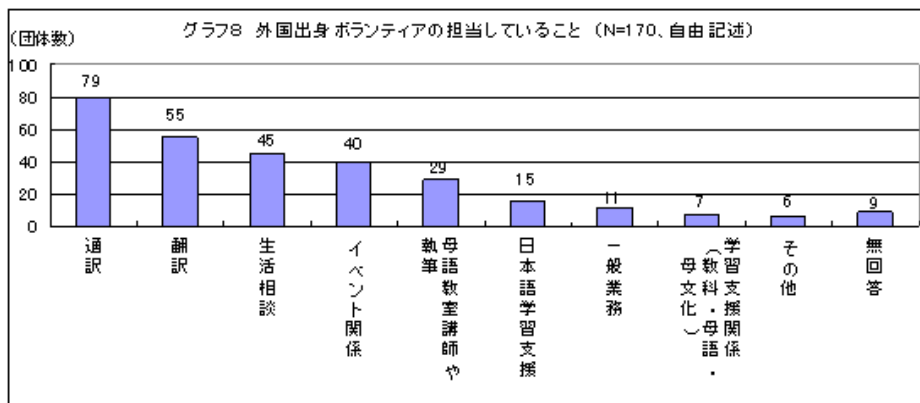


図 2

外国出身支援者の各団体における人数は、1人の場合が半数以上を占めており（図3）、またその支援の対象は、大人と子ども両方の場合が多い（図4）。

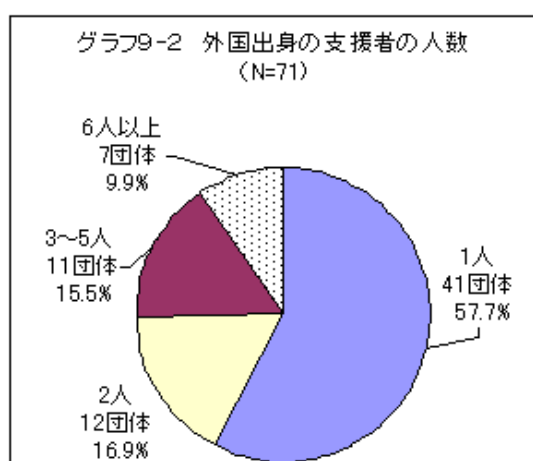


図 3

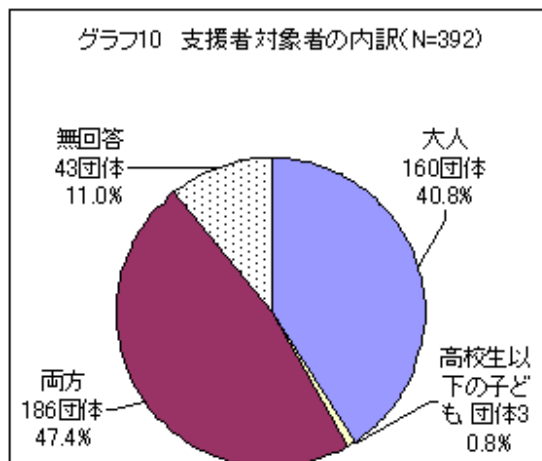


図 4

このように、地域日本語教室における外国人支援者の存在は意識され始めているが、その養成という考え方は緒に就いたばかりであり、どのような人が、具体的にどのように活動をおこなっているかは、いまだ明らかにされていないのが現状である。

1.2. 外国にルーツを持つ子どもに対する支援活動と外国人支援者

在住外国人の定住化や国際結婚の増加などにより、日本で生まれ育つ、あるいは幼少～学齢期にかけて来日する、外国にルーツを持つ子どもたちも増加している。日々成長していくこれらの子どもたちへの支援は喫緊の課題であり、行政から学校現場に支援者が派遣されたり、地域の国際交流協会やボランティア団体などによる支援活動も行われるように

なっている。そして、このような活動を対象にした研究も多く、子どもたちの学力やアイデンティティの問題、支援活動の実態や課題、子どもたちをとりまく学校・家庭・地域の連携や教育戦略などが議論されてきている（志水・清水編著 2001, 清水 2006 他）。また、年少者に対する日本語教育・評価方法の構築も議論され、教育実践をデータとした研究も数多くおこなわれている（川上・石井・池上・齋藤・野山編 2009, 川上編著 2006, 2009 他）。

しかし、これらの研究のほとんどが日本人関係者の視点に偏っており、外国人支援者の視点からの考察が欠けていると浅田（2008）は指摘し、学校現場に派遣されているブラジル人支援者4名への聞き取り調査と取り出し授業の参与観察をおこなった。その結果、学校側の「甘やかし」、取り出し時間の不足、支援対象とする条件の曖昧さ、資格を持たない外国人支援者が教科学習を支援することへの戸惑いといった、外国人支援者から見た支援活動の課題が明らかになった。また、朴（2006）や齋（2009）は、自らが支援者としておこなった活動を分析し、朴は母語を重視した日本語支援の有効性を、齋は生徒と支援者が支えあう関係性から生徒の主体的な学びを促すという視点の重要性を、それぞれ主張している。このような外国人支援者から見た支援活動の研究はまだ少なく、学校現場でおこなわれているものに限られている。

1.3. 「当事者だった人」の語りの重要性 – 「ライフコース」という視点

川上（2009）では、幼少期に複数言語環境で成長した成人日本語使用者に面接調査をおこない、そこから浮かび上がってきたかれらの言語習得の過程と言語能力観を、以下の5点にまとめている。

- ① 子どもは社会的な関係性の中で言語を習得する
- ② 子どもは主体的な学びの中で言語を習得する
- ③ 複数言語能力および複数言語使用についての意識は成長過程によって変化する
- ④ 成人するにつれて、言語意識と向き合うことが自分自身と向き合うことになり、その後の生活設計に影響する
- ⑤ ただし、言語能力の不安感は場面に応じて継続的に出現する

すなわち、かれらは主観的な意識のレベルで言語習得や言語能力意識を形成し、そのことに主体的に向き合い、折り合いをつけることによって自己形成し、自分の生き方を立ち上げていくのだと川上は述べ、このような言語能力意識に向き合う言語教育実践の構築を今後の課題としている。

また、齋藤（2009）は、文化移動をする子どもたちへの支援をライフコースという視点から捉え直している。子どもの成長・発達と社会文化的な関係性を時間軸で捉え、子ども

たちが歩いていくステージごとに学びの様相をとらえようとしている。子どもたちは成長するにつれて生活世界を広げていき、そこで人を介した社会との関わりができることで意味空間が広がっていく（図5）。齋藤は2人の日系ブラジル人青年の体験談から、彼ら自身が学ぶことに意義を見出し、学習に主体的に取り組んできたからこそ現在の彼らの状況があるのであり、そこにはそのきっかけや支えとなる人物の存在があったということを示している。そして、文化間移動をする子どもたちを支援する者の重要な役割として、子どもたちが文化的差異を乗り越える力を育むこと、子どもたちが人との社会的関わりから主体的に学びに関わっていけるよう、縦横に開いた支援ネットワークを形成することなどを挙げている。

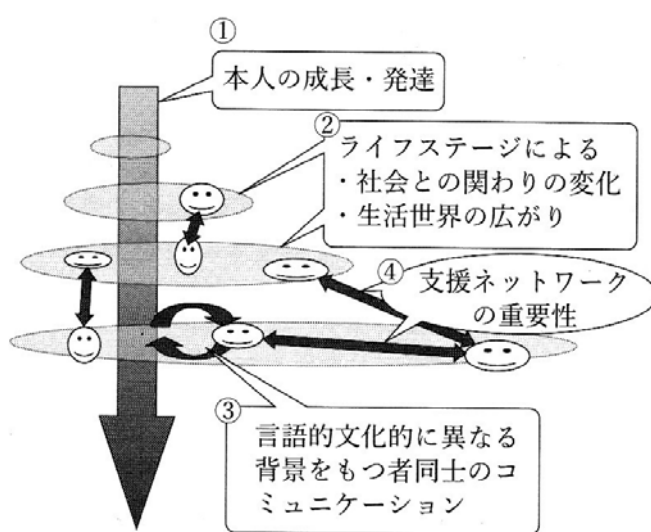


図5

1.4. 研究の目的

以上見てきたように、地域日本語教室等で支援者として活動している外国出身者の存在や活動の概要は少しずつ明らかになってきているが、かれらの背景や実際の活動の様子を調査・分析し、かれらの視点から支援活動を捉えようとした研究はまだ少ない。

「当事者だった」かれらに人生の経験を語ってもらうことにより、これまで歩んできたライフコースにおいて、他者との社会的関わりやアイデンティティの形成・変化やそのきっかけを知ることができ、そこからかれらの考える支援活動の意義を知ることができると考えられる。また、実際のかれらの支援活動の様子を具体的に見ることで、かれらの考える支援活動の意義がどのように具現化されているかも知ることができる。これらのことが明らかになれば、子どもも成人も含めた「生活者としての外国人」に対する支援のあり方に、大きな示唆をもたらすものと考えられる。

そこで本研究では、地域の日本語教室等において活動している外国人支援者を対象に、聞きとり調査と実際の学習支援活動の記録をおこない、以下の点を明らかにする。

- ①外国人支援者の来日前から現在までのライフストーリーを記述し、
- ・来日の背景
 - ・来日後、どのように地域社会で生活してきたか
 - ・なぜ今、他の外国人住民の支援をしているのか、その意義をどう考えるか
 - ・将来の自分自身（と地域社会）をどのように考えているか
- を明らかにする。

- ②外国人支援者が参加する地域日本語教室での学習支援活動を分析し、
- ・外国人支援者は具体的にどのような支援をおこなっているか
 - ・外国人支援者による活動の特徴とその意義
- を明らかにする。

以上の2点から、地域日本語教室等に外国人支援者が参加することの意義を明らかにし、地域日本語教室の場のあり方を、かれらの視点から捉えなおすこととする。

引用文献・資料

- 浅田秀子 (2008) 「外国人支援者からみる外国籍児童に対する教育支援」 異文化間教育学会第 29 回大会発表資料
- 齋立苺 (2009) 「JSL 生徒と支援者が共に支えあう関係による日本語支援」 川上 (編著) (2009)
- 川上郁雄 (編著) (2006) 『「移動する子どもたち」と日本語教育—日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考える—』 明石書店
- 川上郁雄 (編著) (2009) 『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー—主体性の年少者日本語教育学—』 明石書店
- 川上郁雄 (2009) 「私も「移動する子ども」だった 幼少期に多言語環境で成長した成人日本語使用者の言語習得と言語能力観についての質的調査」 2009 年度日本語教育学会秋季大会予稿集
- 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広 (編) (2009) 『「移動する子どもたち」のことばの教育を想像する ESL 教育と JSL 教育の共振』 ココ出版
- (社) 国際日本語普及協会 (2007) 「日本語教室における外国出身者の社会参加及び受け入れ側の意識に関する調査」 <http://www.ajalt.org/shien/research.html>
- 齋藤ひろみ (2009) 「子どもたちのライフコースと学習支援—主体的な学びを形成するために」 齋藤ひろみ・佐藤郡衛 (編) 『文化間移動をする子どもたちの学び 教育コミュニティの創造に向けて』 ひつじ書房
- 志水宏吉・清水睦美 (編著) (2001) 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって—』 明石書店
- 清水睦美 (2006) 『ニューカマーの子どもたち—学校と家族の間の日常世界—』 勁草書房
- 朴智映 (2006) 「母語を活かした日本語指導—韓国人児童への支援を通して—」 川上 (編著) (2006)
- 文化庁 (2007) 「「生活者としての外国人」のための日本語教育支援事業」 『平成 19 年度「文化庁日本語教育大会」』 資料
- 山田泉 (2002) 「地域社会と日本語教育」 細川英雄編 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』 凡人社

2. 調査の概要と分析の方法

2.1. 調査協力者と活動内容

調査に協力してくださった外国人支援者（運営者も含む）は8名で、アルファベットでA～Hさんとする。以下に、それぞれの活動団体と活動内容⁵を記す。

1) Aさん（ペルー出身）

関東地方において、子ども向けの日本語教室「Jこども日本語クラブ」に支援者として関わっている。この「Jこども日本語クラブ」は、文化庁の「“生活者としての外国人”のための日本語教育事業」の中の、「日系人等を活用した日本語教室」として開設されたものである。「Jこども日本語クラブ」は、第2・4日曜日の10:00～11:30に、大人対象の「J日本語教室」と同じ場所で開催されており、活動日のボランティアと外国人参加者の状況によって、Aさんは子どもの支援をすることも大人の支援をすることもある。

2) Bさん（台湾出身）

中国地方にあるK国際交流財団主催の日本語教室で、講師として初級者クラスを担当している。この日本語教室は毎週日曜日の11:00～12:30に開催され、一年度二期制で、一期15回の授業を、Bさんのともう一人の講師とで分担している。また、「パートナー」と呼ばれる日本人ボランティアが毎回複数名参加し、学習者と一緒にテーブルについている。

3) Cさん（台湾出身）

関東地方のボランティア団体“Lファミリー”において、運営委員を務め、交流活動を担当している。月曜日10:30～12:00の日本語講習会で学ぶ一方、その後の時間を利用して、会場となっている市役所の食堂の一角を使い「みんなのサロン」という交流の場を定期的に開催している。

4) Dさん（フィリピン出身）

中国地方において、フィリピン人の相互支援グループ“M”の運営委員を務めている。県の助成金で日本語教室を開設したが、助成金は当該年度のみだったため、調査をおこなった年については、同地域の多文化共生を目指したボランティア団体が主催、グループ“M”の共催として、教室を続けている。Dさんは日本語教室で自ら学ぶかわら、参加者の募集や送迎・連絡などの運営に関わっている。

⁵ 外国人支援や国際交流に関わる複数の活動をおこなっている人もいるが、ここでは調査の対象とした活動団体・活動内容のみを挙げる。その他の活動については、各自のライフストーリーの中でとりあげることにする。

5) Eさん(ペルー出身), Fさん(中国出身), Gさん(中国出身), Hさん(台湾出身)
4名は共に, 学齢期に来日し, Eさんが大学院生, Fさん, Gさん, Hさんが大学生である(調査当時)。関西地方にあるN国際交流協会で, 外国にルーツを持つ子どもの支援をしている。N地域は外国人集住地域ではなく, いわゆる「少数点在型」と言われる地域である。N国際交流協会では, 子どもサポート事業として, 日本語・学習支援事業と, 子ども母語事業をおこなっている。毎週日曜日の13:00~15:00におこなわれている日本語・学習支援事業は, 大学(院)生ボランティアと, 渡日を経験した外国にルーツを持つ大学生(ピアサポーター)と一緒に活動をおこなっている。毎月第2・4日曜日の10:00~12:00におこなわれている子ども母語事業は, 日本で生まれ育ったダブルの子どもたちも多く参加し, 自分のルーツのことばや文化を学ぶ場で, 中国語, スペイン語, ポルトガル語がある。これも渡日を経験したネイティブの大学(院)生が担当し, 日本人ボランティアがアシスタントとして参加している(N国際交流協会2008)。Eさんは, 子ども母語事業でスペイン語を担当している。FさんとGさんは, 子ども母語事業の中国語を担当し, 日本語・学習支援事業にピアサポーターとして参加している。Hさんは日本語・学習支援事業にピアサポーターとして参加している。

2.2. 調査手順

2.2.1. 調査の依頼・承諾

Aさん, Bさん, Cさん, Dさんについては, まず本人に依頼をした。Bさんは筆者と既知であったが, Aさん, Cさん, Dさんは地域日本語教育や外国人支援活動の関係者から紹介を受けた。本人から了承を得た後, 各活動団体の代表または担当者にも調査依頼をし, 承諾を得た。

Eさん, Fさん, Gさん, Hさんについては, まずN国際交流協会に調査を依頼し, 協会から子どもサポート事業に関わっている4名を紹介してもらった。その後改めて個々に調査を依頼して承諾を得た。筆者は1999年から4年間N国際交流教会の日本語事業にアドバイザーとして関わっており, Eさんは当時そこに参加していた。Fさん, Gさん, Hさんとは初対面であった。

事前の口頭またはメールでの依頼のあるなしに関わらず, 8名とも, 依頼書を渡して調査内容を口頭でも確認した上で, 承諾書に署名してもらった。各活動団体の代表または担当者にも依頼書を渡し, 承諾書に署名をもらった⁶。

⁶ 依頼書および承諾書は, 巻末に資料として付す。

2.2.2. ライフストーリーインタビュー

インタビューでは、各調査協力者の来日前から現在までの個人史を聞きとることとし、インタビューシートにもとづき、出来事とそのときの思いを、ほぼ時系列に沿って聞いた。また、現在の活動については、関わるきっかけ、活動内容、楽しいこと・大変なこと、今後の展望という大まかな質問項目を立てて聞いた。どちらもインタビューシート⁷を用意したが、協力者の語りに応じて、質問の内容や順序を臨機応変に変えていく半構造化インタビュー（フリック 2002）の形をとった。インタビューをしながらインタビューシートにメモすると共に、インタビューはすべて IC レコーダーで録音した。FさんとGさんは、本人たちの希望により、2人一緒にインタビューをおこなった。インタビュー実施日と所要時間は以下のとおりである。

	インタビュー実施日	所要時間
Aさん	2008年11月23日	約120分
Bさん	2009年1月18日	約180分
Cさん	2009年3月6日	約173分
Dさん	2008年10月30日	約99分
Eさん	2009年3月8日	約93分
Fさん・Gさん	2009年2月22日	約105分
Hさん	2009年3月8日	約110分

2.2.3. 学習支援活動の記録・観察

Aさん、Bさん、Dさん、Eさん、Fさん、Gさんの6名については、実際の学習支援活動を、活動団体および学習者にも了承を得た上で録音・録画した。また筆者が観察しながらフィールドノートをつけた。Dさんは自身が学習している活動、Eさん、Fさん、Gさんは母語学習の活動であったため、AさんとBさんの学習支援活動を分析の対象とする。ただし、インタビュー前に活動を見せてもらうことで、インタビューの場における共通認識が増えた。

2.2.4. フィールドノートの追記・整理

活動の観察とインタビューの終了後、なるべく早いうちに、調査者が活動時の座席位置や板書の内容、非言語行動などについて、またインタビュー時に気づいた点やインタビュー前後に話した内容などを、思い出せる限り書きとめ、整理しておいた。

⁷ インタビューシートは、巻末に資料として付す。

2.3. 分析の方法

2.3.1. ライフストーリーの構成と「語り」の類型化

インタビューのデータは、すべて漢字かな混じり文で文字化⁸し、語り手の発話ごとに、コード（語りを要約する、あるいは特徴づける短い文またはタイトル）をつけ、それをもとに、まずクローロジー（時間的配列）による編集（桜井・小林 2005）をおこない、個々のライフストーリーを構成する。さらに、全員のライフストーリーにおける共通のテーマを抽出しながら考察をおこなう。すなわち、各調査協力者のライフストーリーを、「それ自体を典型事例として生かすライフストーリー」（やまだ 2000）として構成するとともに、「類型化に向かう素データとしてのライフストーリー」（やまだ 2000）としても生かす方法をとる。この分析結果を第3章に提示する。

さらに、第4章においては、現在の活動についての語りについても共通のテーマを抽出し、かれらが考える支援活動の意義を明らかにする。

2.3.2. 学習支援活動の分析

学習支援活動のデータは、日本語で話されている箇所はすべてひらがな・カタカナを用いて文字化した。Aさんの学習支援活動はスペイン語をベースにおこなわれていたため、スペイン語母語話者に、すべてのデータの文字化とスペイン語部分の翻訳を依頼した。その後、日本語での発話部分の確認や発話者の同定等を筆者がおこなった。

データの分析については、全体構成の分析をおこなったあとで、外国人支援者による活動として特徴的な点を抽出した。AさんとBさんでかなり活動の形態が異なっていたため、詳しい分析方法はその結果と共に第5章において述べる。

引用文献・資料

- ウヴェ・フリック（2002）『質的研究入門—人間の科学>のための方法論』小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子（訳）春秋社
- 桜井厚・小林多寿子（編著）（2005）『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房
- やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味—ライフストーリーの心理学」やまだようこ（編著）『人生を物語る—生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房
- N国際交流協会（2008）『地域における外国にルーツをもつ子どもの居場所づくり～子どもサポート事業のあゆみ 2006・2007』

⁸ 文字化の方法と用いる記号は、資料として巻末に付す。

3. 外国人支援者のライフストーリー

本章では、まず、8名の外国人支援者それぞれのライフストーリーを紹介する。そして、8名のライフコースにおける共通のテーマを抽出しながら考察をおこなう。

3.1. Aさんのストーリー

Aさんのひいおじいさんがペルーに移住したとき、おじいさんは沖縄に残ったひいおばあさんのお腹の中にいた。おじいさんは沖縄で生まれ育ち、16、7歳の学生の頃に戦争に行き、当時おばあさんも看護師として戦争に参加していた。戦後沖縄で結婚し、Aさんのお母さんを含め4人の子どもを授かったが、生活ができなかったのか、南米に行きたかったのか、詳しくは聞いていないが、「たまたま来た船に乗って、たまたまペルーに」⁹移住した。当時はそういう人が多かったようだ。

筆者：じゃその当時はそういう人は、多かったんですかねー。

Aさん：多かったと思いますね。やっぱり、沖縄の経済自体が、そんなよきはなかった時期でもあるし、あとは戦争に負けて、(おじいさんが)兵隊やったというのもひとつの、

筆者：あーそう。その土地で暮らしにくい、

Aさん：暮らしにくい状況にいたのかな？ま、もちろん、みんなみんながそうではなかったらしいんだけども。

移住当時、Aさんのお母さんは3歳だった。一家はスペイン語も話せず、金銭的な面でも損をしたりして、苦労が多かったようだ。しかしAさんが記憶している頃には、おじいさんはレストラン経営や農場経営など、かなり広く仕事をしていた。

Aさんのお父さんも日系で、両親はレストランなどを経営していたが、経済状況が悪くなり、日本で職を探すことにした。「いわゆる出稼ぎ」である。入管法の改正で日系人の受け入れ態勢が整ってきたこともあり、既に日本に住んでいたおじいさんを頼ってまず1989年にお父さんが来日し、お母さんが1990年の1月に来日した。Aさんと弟は同じ年の7月に来日した。当時12歳だったAさんは、日本に行くことを嬉しく思っていた。

やっぱり、おじいちゃんからは、日本はすごいいい国だよって聞いてたので、ま、おじいさん、祖先の国に帰るっていう感覚でいましたから、自分の中には嬉しかったっていうのはあった。

来日して1ヶ月間東京の近くに住んでいたが、その後3ヶ月間、お母さんと弟と一緒に、親戚に会うために沖縄に行った。ひいおじいさんに「どうしても沖縄の歴史を見てほしい」と言われて、洞窟に連れていかれた。しかしAさんは中に入ることができなかった。

Aさん：火炎砲の、まあその煙の、黒い煙のあとも、やっぱり天井とかに残ってるし、でもとてもじ

⁹ インタビューでの語られた表現を直接引用する場合に「 」を用いる。発話単位で引用する場合は、行を改め、ゴシック体で示す。

やないけど、まーすごい、空気が重かったんで、私は入れなかった。でも、しかもその時は、本当、日本語が分からないので、ひいおばあちゃんが、自分を指して、その洞窟を指したっていう感じで、あと、お母さんは、通訳してくれるわけで、結局はやっぱりひいおばあちゃんもあそこに入ってたい、ことをそこで、知ったっていう。

筆者：ふーん。その入れなかったっていうのはやっぱり、

Aさん：えーっと空気が重かった。あの何かが、何か、何かが重たい。なかなか入りづらいついていう。

ひいおばあさんたちと会えたのはうれしかったが、なかなかコミュニケーションがとれず、「日本語を覚えないとだめ」だと感じた。

日本語分からないから、自分たち話す時は全部スペイン語？でも、かりにスペイン語で話しても、人の名前を言ってしまうと、相手がなんか自分の悪口言ってるんじゃないかって、思われるのはすごいやで、それをやっぱり、日本語覚えないとだめかなっていうのは。

父の仕事が決まり、関東地方のJ市に移り住み、4月から近所の小学校に入った。本来なら中学生の年齢だったが、教育委員会と両親とおじさんとが話をし、小学校の6年生になった。J市内の小学校で初めての外国から来た児童だった。教育委員会も学校側も、どう接すればいいのかわからなかったようだ。周りからは、何を言っているのか分からないと「宇宙人」と呼ばれたりした。その「うちゅうじん」という言葉も後で調べて意味がわかった。授業も「ゼロっていうか本当に何を言ってるんだかなという感じ」だった。

当時は取り出し授業も通訳もなく、自分でやらなければ何もできなかった。Aさんはお父さんが使っていた日本語の本をもらって、その本の通りに覚えた。しかし、それを学校で使うと、おかしいと言われてしまった。

Aさん：使われない、使ったことない日本語が、そこにあるわけ。

筆者：ですとかますとか。

Aさん：ですとかますとか。だから逆に言うと、もっと“宇宙人”から、さらに「何だこいつは？」と。

(笑)

Aさんは自分にとって「意味がない」本を捨て、他の人が言っていることを場面ごと覚え、場面を「パズルのように組み立て」るという方法をとった。

Aさん：で、その本に頼らないで、今度、辞書だけを、ま、その時は、父が持ってた辞書があって、その辞書を片手に、人が言っていることを覚えたりとか、もう本当に、場面場面をそのまま覚える？例えばこういうところにも、周りの人たちが何を話しているかっていうのをちょっとだけ片耳をむけて、あっ、こういう場面でこういうこと言うんだと。だからその場面がどっかに合わしたら、じゃ、そういう話だったらそういうことを言おうっていう。

筆者：あー、じゃその場面のなんかこう映像と、言葉と一緒に、うーん。

Aさん:だからもう、後はもう間違っただけで笑われたら、あ、笑われたからだめか。じゃ、これは違う、違う時だ。(相手が)話しかけてくれたら、あーじゃこの場面はよかったとか。だからもう、自分で本当に場面場面を、パズルのように組み立てて行くっていう。

日常会話の中で一日一言覚えて、家に帰って調べて、翌日必ず使うということも心がけていた。クラスメイトたちとの間で言いたいことがほぼ理解しあえるようになるのには8～9ヶ月かかった。

友達ができるきっかけになったのは、好きなサッカーだった。一人でサッカーボールを蹴っていたら、数字とジェスチャーで練習日を教えてくれた子がいて、サッカー少年団に入った。サッカーにはコミュニケーションが必要なので、サッカーをしながら友達が日本語を教えてくれて、それを真似して話した。

友達が塾に行っているを知り、「親と交渉」して、塾にも行き始めた。学校の勉強が2回できるし、友達もできてよかった。

学校では、担任の先生から小学校1年生の国語の教科書を渡されて、みんなが授業をしている間に、それをひたすらノートに書き写していた。字に慣れるという点においては良かったが、周りで何がおこっているのかはわからなかった。それでも、見てわかるような科目以外は、授業がわからないと思ったら自主的に書き写しをやっていた。書き写したものを先生がチェックしてくれた。先生も初めての経験で、どう接すればいいのかわからなかったのだろう。その先生がいたからこそ、日本が好きになったとずっと思っている。その先生が、今「Jこども日本語クラブ」や「J日本語教室」で一緒に活動しているRさんだ。

Rさんにも聞いても、やっぱりその当時の、経験、彼女もした体験っていうのは、やっぱり大きかったみたいで、その後、外国籍の子が来ても、やっぱり対応ができるようになったし、今みたいに実際は日本語、を教える側にまわってますし。本当に、なんかお互いの出会いっていうのはよかったのかなっていうのは、今でも思ってますね。

塾のときの先生にも、進学ガイダンスで十数年ぶりに再会することになった。やはり自分に影響を与えてくれた人たちには、時間を経ても巡りあえるんだなと思う。

中学校1年生の真ん中ぐらいから、授業の内容が理解できるようになった。国語(現代文)と日本史が大の苦手で、古典と英語、数学、世界史は得意なほうだった。古典は、一・二点やレ点など、パズルをやっているようでおもしろかった。世界史はペルーの小学校で勉強していたし、内容はどこへ行っても一緒だから。

2年生からは言葉の面ではまったく問題がなくなっていた。ちょうどその時に国語で文法を習うことで整理ができた。

赤ちゃんは、なぜその言語を習得したかっていうと、たぶん、周りの人が何を話しているかで。でもだからといって、子どもとか赤ちゃんとかに対して、文法やりなさいってのは言ったことないはず。だからそういう感覚でたぶん、物事を、文法関係なく、勉強してましたね。だからどこかで文法を勉強することになると、そこで一度ストップしてしまうな一っっていうのは思ってた。だからある程度耳が慣れて、話すようになって、文法を教えると、もう型が作られたもの、自分の、しゃべったこと、ごちゃごちゃまぜになった物を、型にはめるっていう、だから美しい日本語にできるっていうのはその後かなっていう。だから中学校2年生とかはちょうどその時期、現代文とかだったら文法とかが、すぐ教えられるのはその時期かなっていうのは。

最初から文法をやっていたら、たぶん今のように話していないだろうと思う。

高校受験のとき、先生が一番下のレベルの学校を紹介してきた。安全にという先生の考え方もわかるが、「もっとチャレンジさせてほしい」と思い、自分で勝手に志望校を設定した。先生には無理だと言われたが、願書の提出日まで先生と戦った。その高校を選んだのは、外国語コースがあったからだ。スペイン語圏からすると、英語は簡単に見える部分があって、中学校時代から英語の成績はわりと良かったのだ。

でも実際には英語を本格的に勉強したのは専門学校に入ってからになる。大学に行ってもよかったが、高校の先生に「大学とはどういう授業やるんですか」と聞いたら、「高校の延長線」と言われたので、大学でまた文法の難しいことをするだけなら、専門学校のほうが話すことが多いだろうと考えた。いちばん最初に見学会に行った語学専門学校に決めた。

リスニングができたのか、専門学校ではトップのクラスに入ることができ、ずっと「英語づけ」の毎日だった。「小学校6年生に戻ったような感覚」だった。日本語が英語になっただけで。英語好きな人たちの集まりだったから、皆同じように向上心があった。お酒を飲みに行くと「日本語禁止令」を出して、日本語で話すと罰ゲームとして一気飲みをしたりした。よくふらふらしながら家に帰っていた。学校の先生も一緒に飲みに行きましよう誘っていた。日本語を最初に覚えた時と同じやり方だった。

でも、勉強っていうんじゃなくて、もう本当に、フリートークとか、ほんで友達感覚で話して、そこでまた同じように、片手はもう、そのテーブルの下で片手が、一生懸命こうやって(ジェスチャー)、(相手が話す)英語を書いて。で後でこうやって見て、うわなんじゃったこれっていう*** (笑)。だからもう、ひたすらもう、見られない所で一生懸命こう書いて、だから人の言ってることを、書いてるの見られると、こいつが勉強しに来たな一と思われるのはいやだから。あとはその場で覚えて、その単語だけを覚えて、また調べに帰って来るっていう。やっぱり最初に、日本語をやった時と、まったく同じやり方でやって。

専門学校2年生のときに就職活動をした。いつ頃からだろうか、学校においては全て日

本人扱いされていたし、就職活動においても同じ土俵で戦いたかった。

外国籍の人だから、これを免除してあげよう。これだったら、**を免除してあげようっていうのがあって、俺いやだった。すごいそれいやだった。なんかね、アドバンテージいやだった。それだったら、同じ土俵で戦ってないっていうのがすごいいやで、だから、そういうの、就職活動においても、もう本当に、東大の人と同じような方法で受けたりとか、もう本当に、同じ年齢だし、同じ人間だし、できる、向こうはできるものあれば、自分はいずれできるようになるし。

多くの会社を受けたが、わりと早く決まった。やはりスペイン語と日本語と英語を話せるという人がなかなかないというのも一つの理由だろう。苦勞したという話がよくあるが、Aさんにとっては、苦勞というのは「自分を磨けるチャンス」でもある。苦勞して得たものは、一生忘れないことでもあるのだ。

就職したのは、神戸に本社のある貿易会社の東京オフィスで、Aさんはアメリカやルクセンブルクから手術着を輸入する仕事をしていた。職場でも外国籍の人が初めてで、会社としても戸惑ったというのを後から聞いた。でも実際にはそんな感じは受けなかったし、結局は国籍は関係なく、その人自身なのだろうと思う。貿易会社なので海外の人たちと話す機会もあり、その時にAさんの英語の発音や名前から、国籍を聞かれ、そこから話が広がるということもある。だから外国籍であることは、逆に「人とのきっかけ」になるとAさんは考えている。

昨年¹⁰、塾に通っていた時の先生だった人から声がかかって、外国人生徒対象の進学ガイダンスで通訳をし、体験談を話すことになった。また、J市で日本語ボランティア講座があったときにも体験談を話した。そこで、小学校時代の担任の先生だったRさんと再会した。Rさんたちが文化庁の委嘱事業に申請して、子どもの支援のための教室を立ち上げるのを一緒にやらないかと声がかかった。

自分は、どうしても、一番最初に出会った人だったので、一緒にやってもおもしろいのかなっていうのは、あった。のはきっかけ。後は、やっぱり、自分がコミュニティに入っていて、やっぱりいろんな人から、そういう(日本語を)覚えたいんだけどっていうのは話を聞くから、じゃー、私自身は、あんまり教えるのは苦手なんです。あんまりそんなにうまくはないんですよね。でも、こういう人たちと一緒にできるっていうことあれば、サポートでもできるっていう感じがしたんで、で一緒にやりたいっていうのが。

そして今年から始まったのが「Jこども日本語クラブ」である。最初は子どもも少なかったが、口コミで少しずつ増えてきた。基本的には「日本のボランティアの先生」がついて、分からないときにAさんがサポートをするという態勢である。Aさんが入ると子ども

¹⁰ 本章に出てくる時制は、すべてインタビュー当時のものである。

たちがスペイン語で話してしまうからだ。

3年前からJ市で奥さんと一緒に子ども向けの英語教室も開いていたAさんにとっては、もともと子どもを相手にするのは苦にはならず、むしろ同じ考え方で「この考え方そのままこっちこうなんだ」と「Jこども日本語クラブ」の活動に関わっていくことができた。

Aさんは会社を辞めて、つい最近独立した。発展途上国の支援をしたいという思いがある。コーヒーのフェアトレードなど、できるところから始めたいと考えている。

発展途上国と、先進国を、実際は自分自身が、体験している。であれば、せっかく先進国にいるのに、発展途上国に、支援をしたいっていうのもある。でも、その支援というのは、寄附とかではなくて、職を与える？支援。よく問題に出て来るのは、子供の強制労働とか、あと人身売買。たぶんいろんな問題出て来るけども、基本的にはやっぱり、一番苦勞してるのは子ども？なんで、その親に対して、職を安定させれば、子どもが必然的に、強制労働させられなくなる。であればそういう地域において、学校を作るとか。でも貿易やってて、フェアトレードというのがありまして、その考え方がすごい、昔から知ってて、それが自分自身では、貿易も正直もう、それなりの資金力がないとできない。だけどべつに、その資金力はそこまでなくても、自分の、ちょっとできる所から始めればいいっていうのは、あるから。で小さい物でも構わないけど、そういうちょっとした支援をすればいい。

日本に来て最初に住んだのがJ市で、良くも悪くも苦勞して育ったこの環境が好きだから、このJ市に貢献したいという「地元愛」もある。せっかく今外国籍の子どもを支援する側にまわっているし、今までもペルー人の友達からの相談を受けてきた。J市で仕事をする事で、地元に住む外国籍の人に対する支援にももっと時間も費やせるんじゃないかと思う。だから、発展途上国に向けた活動と地元での活動の両方を本格的にやっていきたいと考えている。特に、これから生きる子どもたちに向けた活動をしたい。

世の中世の中って聞くけども、世の中作りあげたの誰かと言ったら大人の人たち。その世の中をよくするっていうことになれば、これから生きる子どもたちかな。だから自分は、頑張ればいいし、それと同時に次の世代の人たちも、そういう世の中変えるような何か、というのはしてあげたい。

将来は、貿易で得た利益で各国に学校を作って、その学校の子どもたちを互いに交流させることができればいいと思っている。

3.2. Bさんのストーリー

Bさんは、台湾の大学（当時は学院）で、東方言語社会学を専攻していた。必修科目だった日本語の成績が良かったので、先生に国費留学制度を利用して1年間日本に行ってみ

ないかと勧められた。Bさんは小さい頃からお父さんに連れられて東京や沖縄に何度か遊びに来たこともあったので、「ま、1年間だけだったらいいかなと思って」、「1979 か 80 ぐらい」の4月に来日した。東京の日本語学校で勉強した。Bさんのお姉さんもちょうどその時に大阪の短期大学を出て東京の大学に編入したので、2人で一緒にアパートを借りて住んでいた。だから、日本語学校の授業以外は、家でも学校でも台湾語で話していた。日本語学校ではいちばん若かったので、「台湾のお兄ちゃんお姉ちゃん」がかわいがってくれて、学校が終わるとあちこちに連れて行ってくれた。「台湾にいる時よりモテモテ」で、とても楽しかった。1年間はあつと言う間だった。

1年間だけの予定だったBさんの日本滞在は、台湾の政治情勢の影響を受けて一変することになる。

私が高校2年か3年か覚えてないけれども蒋介石が亡くなられて、で、日本に来てこの1年間の間に、どうも、中国が武力的に台湾を攻めてくると。だから台湾は戦争になるという、デマってうかね、なんかそういう噂が非常に広がったんです。だから父は戦争になる所はあえて帰ってくる必要ないので、で父と母たちもアメリカ移民を決心してね、で—そういう中に私が帰る必要性はないので、だけどアメリカ行くにはまだ、つてがないので、だからとりあえず、もし大学行けるのであれば、日本の大学に、行ったらどう？って。でまた向こう安定したらっていうことで。で父とは母は日本教育だったでしょう？戦争時代、植民地。私より遥かに、その時は日本語が上手だったのでね。それで私は、東京の大学に、行きました。

1年間と思って日本に来たのに、「え、私ずっと残らないといけないことになったわけ？」と思い、少し泣いてしまったが、日本語学校の推薦で、東京の大学に入った。

大学の授業はほぼわからなかった。ノートを見せてもらう勇気もなかった。サークルにも入ったが、言葉がわからないのが辛くなり、結局やめてしまった。

見かけってうか、が外国人っぽくないので、だから、片言で授業中に、長い文章になるともしかしたら外国人ってばれてしまうかも知れないけれど、やっぱり、短い言葉だと、ね、「すみませんノートを見せてください」って言うと、何で？みたいな顔されるんですよね。だから、何人かにそれをされてから、言う勇気もなくなってきて、うん。で、なんとかサークルに入ろうと思ったけれども、テニス部に入ったんですけども、まず、「玉拾い」って言われて、その「玉拾い」の意味が分からなくて、で皆が動き出してから後ろついて動いてたけど、やっぱそれもしんどくなって、テニス部もやめて、(中略)やっぱこう次何をするかっていうその学生用語が全く、△△△(日本語学校)ではなかったわけだし、原形って使わないでしょう？ね、辞書形なんかないから。だから、「私は疲れましたから、家に帰ります」って言うと皆が・・(いぶかしむ表情)っていう感じで、なんか、最初は、すごい、寂しかったね。うん。

友達もなかなかできなかったが、2年生になって、ゼミである女の子が声をかけてくれた。「なんでしゃべらないの？」と言われたが、それすらわからずに黙っていたら、先生が留学生だと紹介してくれた。その子はとても世話好きで、常に彼女がどこに行くにも連れて歩いてくれた。彼女と一緒に漫画を読んだり、歌を聞いたりして日本語を覚えた。

Bさん:(漫画を買って)で1回読んで、どうしてもこう、イントネーションが分からないところがあるから、その時は、〇子っていうけどその子に、「〇子これなんて読むの」って、「やっだー」とか言うじゃない？そうするとこうやって(身振りをつけて)、「やっだー」とかね、真似をしてました。(笑)だから、よく、本当彼女とは日本語の勉強をしました。で彼女はもちろん教えることはできないから、だからその漫画の本を買って、で自分が読んで、でここだったら、知りたいっていうか覚えたいっていうところポイントを、して、ですぐ〇子とその会話の練習を？したことはありません。

筆者 :へー(笑)。いいお友達。漫画の方がやっぱり、会話を、日常、

Bさん:思ったのがだから、日本語学校で習った日本語は、あんまり、大学では私にとっては、ね、本当友達作りにおいては役には立たないって、いう実感をしましてね。(中略)あと歌かな？やっぱり彼女についてオフコース聞いたり、あの一なんだったっけ、南こうせつ、***、

筆者 :あ、当時そうですね。

Bさん:そうそうそうそう。うん。ね、そういうの彼女たちが、カラオケはまだない時代なので、だから彼女たちが聞いている時に、一緒にその歌詞をね、一緒に見たりとかね、歌ってる時間いたりとかね、それはたぶん大きな影響はあったと思う。

敬語はアルバイトで身についたと思う。お父さんには反対されたが、お父さんの知り合いである保証人のところに食事に呼ばれたときに、アルバイトをしたいと言ったら、口をきいてくれた。中華料理屋だった。

たぶん(保証人の)おばちゃんは、洗い場とかそういうのやめて、レジってうことを(店に)言ってくれたのかどうかしらないけど、とにかく最初からレジだったのね。レジだとお金をする以外に、この一つの、冷蔵庫っていうかな？ガラス張りの冷蔵庫みたいなのがそこに、お惣菜と、肉もまあ、デパート地下みたいな感じで。でそこが私の管理の場なのよ。ね、そうすると必ず買いに来た人には、ね、「いかがですか？」「何になさいますか？」っていう、掛け声をしないといけないんですよ？それを一覧表を、そのマネージャーが、書いてくれて、そこに貼ってあるんですよ。だからお客さんがお帰りになる時にそれ見ながら、「えー5千円になります」って言ってね、で貰ってから、「えー、5千円のお釣りでございます」っていう感じ。それがだからやっぱり何ヶ月かしたらもう自然と、身に覚えてって言うのか、うん。それは、本当大きなプラスだったような気がする。

大学ではとにかくよく勉強した。学内に留学生が7人いたが、Bさんの成績がいちばん良く、2年生のときから月4万円の奨学金をもらうことができた。まだ電子辞書のない当時、薄い紙の辞書を常に携帯して、暇さえあれば読んでいた。電車の中で隣の人に不思議

そんな顔をされたこともある。3年生に入ってから、授業も大体わかるようになり、それまでずっと単位をもらえなかった先生の授業でも、単位を取ることができた。

心理学には非常に興味があったし、(専門を)それにしたけれども、心理学の先生、まだいらっしゃるかどうかわからないけど、◎◎先生っていう女性なんですけど、彼女は、授業の終わりに必ず出席を取るんですね、でその出席っていうのは今日の授業の感想を書くことなのね。でももちろん書けないわけですし、怖いし、だからいつも「楽しかった」とか、「良かった」とか。そうすると、1、2年は、単位もらえませんでしたね。で3年になってから、「先生の言ってることは、よく分かったけれども、でもやっぱり私は、赤よりも、黄色の方が自分の意思を伝えられることができるんじゃないかな」って、そういうような、やっぱり意見的なことを書くようになってから3年目、やっと、単位をくれましたね。

4年生になるとほとんどの学生は就職活動が始まって卒業論文のみになり、あまり大学には来なかったが、Bさんは「月曜日から金曜日までフル」に授業が入っていた。意地でも4年で卒業したかった。先生も、他の学生の卒業論文は中間に1、2度チェックするだけだったが、Bさんには2週間に1度持ってくるように言って、チェックをしてくれた。

卒業論文が書けたのは、当時交際していた現在の夫の助けも大きかった。卒業直前に両親に紹介したが、結婚は早いので、少し待つことにした。

結婚はまだ早いので、っていうことで、日本で1、2年就職をして、お互いにこうね、もう社会人として、彼はもう私の大学の時、もうすでに社会人になったのでね、収入はあるから、私を養う分はもう、余裕なぐらい持ってるわけ。だから、もう1回、こう社会人同士として、お互い見て、それでもオッケーだったら、2年後にまた話そうと、っていうことで。

卒業後、「自分が安全と思うところに子どもを置きたい」お父さんの「コネ」で、商社に就職した。Bさんは本当はアナウンサーになりたかった。だからこそ一生懸命語学を勉強して発音もがんばったのに、「父の魔の手から抜けられないので」、就職活動もさせてもらえなかった。会社では取引のための書類作成と通訳翻訳が業務だったが、仕事は嫌でたまらなかった。

就職して3年後に結婚し、その後もBさんは仕事を続けていた。夫は「文化人は新聞を読むんだ」とBさんと一緒に新聞を読んだ。それは子どもが生まれるまで3年間続いた。その3年間で自分の日本語がぐっとレベルアップしたと思う。

彼に、興味のあるところ切り抜いてって言われたんですよね。最初はどのくらいで一かかと。彼は私が日本に来て2年終わりから3年目にかけて、その時期に知り合った。彼はその時の日本語と今の日本語は変わらないって言うのね。でも絶対あり得ないんだよね。それで、切り抜いてって言われて、でーそれちょっと切り抜いたんだよね。で、その時に、面白いのは彼が「じゃ読

んでみ、意味分かる？」って言ったら、「分かるわよ、馬鹿にしないで」みたいな感じで、どうしても読めない字っていうのは出てくるんですよ、意味わかってても。漢字だから。でそこは、俺が(ふりがなを)振ってあげると。で振ってもらって、でーいわゆる音読みたいな？「声出して読んでみ」。「うん」。でお互いの、興味の持つものを共有する？ひとつのきっかけと、お前の日本語の勉強になるとって言って、うん。

そして子どもが生まれると、Aさんは「公園デビュー」し、「ママ友」がたくさんできた。その時はもちろん日本語は一、ま7割8割ぐらいは不自由しないから、だから子育てのコツ？をお互いにね、交換したり、結局仕事してないからね。だから皆、屋間お茶会、子ども交えてお茶会したりとか。それはパパは3歳までは働いてほしくないって言うので、だからとりあえず最初の3年はね、ずっとまた仕事しようっていう気持ちはずっとあったけれども、3年っていうことで、だから3歳。で、(長男が)2歳8ヶ月の時に◆◆君(次男)が産まれまして、また3年でしょう？うん。ていう感じ。その時が一番だから、日本に来て一番楽しいと、もちろん恋愛時期は別としてよ、□□(夫)を除けば、友達関係で、楽しかったのはその、それこそ(大学時代の)○子とママ友が。

しかし、同じマンションに住んでいる一人の女性に、「バッシング」を受けるようになった。彼女は他のお母さんたちにBさんの陰口を言った。もともとは子ども同士も仲が良かったのだが、おそらく原因は、彼女に誘われて子どもを通わせていた体操教室を辞めたことではないかと思う。

体操だったらいいかなーと思って行ったんですよ。でも実は、行ってみたら、受験なんですよ。受験用の体操教室で、わっかがあって、何色のわっかに入ると、お父さんのお名前は？とかね、うん。これだったらどうする？とかね、家の電話番号知ってる？とかね、なんかこう、遊び感覚でやるけれども、でもあくまでもそれなのでね。それで、ある日、出てきた時に、その先生に、「お子さんはお母さんの名前知らないみたいで、受験の時にきくと聞かれると思うから教えてあげてください」と。で帰り道に私が「◇◇(長男の名前)、ママの名前知らないの？」って言ったら、「知ってるよ」って言って、「じゃなんで先生に聞かれた時に言わなかったの？」って言ったら彼が、「だって☆子(Bさんの日本名)って言っていいか、☆☆(本名)って言っていいか分からないもん」って言ってね、本人はなんとも思ってないんですよ。で、なんでこんなくだらないことで、☆子でも☆☆でもどうだっていいじゃん、なんでこういうくだらないことで、言われるのねーって思ってね、(中略)じゃあ、うちはやめすと、でやめたのよ。

ストーカーのように電話をかけてきたり玄関のチャイムを鳴らしたりと、彼女の行動はエスカレートしていった。相談した幼稚園の先生には、この経験が10年後にプラスになると言われたが、当時のBさんには何の慰めにもならなかった。幸い周りには良識のある人が多く、彼女の話をもっと受けたりしなかったのは救いだっただ。

夫が田舎に帰りたいと言いだしたのは、ちょうどその頃だった。日本では東京でしか生活したことのないBさんにとっては、「田舎に行かないといけないって拒絶感」があった。でも、「親孝行をするには、お金を送ることよりも、孫をそばにおく」ことだという夫の言葉に感動したし、Bさんの親にも親孝行すると言ってくれた。「バッシング」を受けていたこともあったし、喘息気味だった長男のためにも環境のいいところに行くのがいいだろうと決断した。

資格を取るために夫は会社をやめ、まず退職金の半分を持って帰ってきて「これはお前の分だ」と言ってBさんに渡してくれた。そして、「プー太郎」宣言をした。

これから、K(夫の故郷)に帰ったら、またずっと、仕事しないとイケないから、俺は半年間プーちゃんになると、プー太郎すると。で私はプー太郎の意味が分からなくて、初めて聞いた。あれ漫画にも出てこないね。(笑)で、へ？みたいな感じ。でまあ、女性だから、どうしても、現実には走るでしょう？生活どうする？なんていう感じで。でまあ何とかすると、っていうことで。で結局、3ヶ月後に、(夫は)国家試験受かって、でそのあと、「よっしゃ、旅行行こう」と。で子どもたちを連れて、(中略)アメリカ横断したの。ニューヨークからハワイまで。

アメリカから戻ったあと、東京のマンションも予定通りに売れて、今度は台湾、タイ、シンガポール、香港とアジアを回った。そうしてやっと荷造りをして、K市に移ってきた。

K市に来てまずしたのは、糸巻きの内職。それがBさんにとって最初の「社会復帰」だった。「じっとしてられない」性格のBさんが次に思いついたのは、K市ではなかなか見つけられない親子ペアの服を仕入れて、ホームパーティをして販売することだった。

親子ペアの服をKにはないと、で私は東京でずっと親子ペアを着てたわけだから、親子ペアの服がほしくて、仕入れに行きましたね。でへそくりをはたして、問屋行くにはやっぱり、ライセンスがないと、入れないのでね、営業証明ね。でそれをどうしたかっていうと、ある子ども服の店にかけ込んで、私はこれこれをしたいですよって。(中略)仕入れて来たものを、3割はあなたの店に無料で、置かせてあげるから、でそしてたらその人は、非常にオーケーで喜んでくれて、で私が仕入れ行って、で送ってもらって、で3割がそこに置いて、7割は、(中略)我が家で、ホームパーティをして、幼稚園のお母さんに声をかけて、で一円も儲かりませんでしたね。服っていうのは7掛けだから、売れなかったら全部残るから。もちろん多少は売れましたよ。でも残ったのは友達の誕生日に送ったり、(笑)自分でも、絶対好みでないこんなリボンリボンを着てたりとかね(笑)。

ホームパーティでは、同じ住宅街に住む県外出身者7人からなる仲良しの「軍団」が、ケーキを焼いたりコーヒーを入れたりボランティアとして手伝ってくれた。

それも一区切りついた頃、人から県の国際交流財団があると紹介してもらい、遊びに行ってみた。

「日本人ですか？」(と聞かれて)、ね？国籍が日本だから、なんて答えたらいいかわからないし、

どう言っても、知らない人だから、余計なこと言う必要ないと思って、「はい」。「何語が話せるの？」って言われて、「中国語を少々」って言ったんですよ。(中略)で「何かがボランティアがあったら是非、させていただきます」と。っていう感じで私は、まあまあ、一応Kの、国際交流っていう意味で、それを見学してきたんです。

しかしちょうどその時、K市は「国際交流プラザ」を作る準備中だった。早速市役所から電話があり、ぜひ面接に来てほしいと言われた。仕事から帰ってきた夫に相談すると、下の子も幼稚園に入っているし、勤務時間も週4日で9時～4時だから、興味があるならやってみたらと言われた。面接を受けて、嘱託職員として働くことになった。

1, 2年目は非常に楽しかった。市役所から来た上司は国際交流のことや地域に住む外国人が必要としていることもわからないので、「君たちのしたいようにしたらいい」「すべて責任は俺が持つ」と言ってくれた。もう一人の職員はイベント関係があまり好きではないような感じだったので、結果的に国際交流の事業は全面的にBさんの肩にかかってきた。Bさんは、「ゴーゴーゴー、いけいけー」で、いろいろな企画を立ち上げた。それらの企画は今でも続いている。英語担当の職員が休みのときは、英語での対応もしなければならぬので、英語も2年間、先生について勉強した。ここでの仕事は「本当天職かな」と思っていた。

しかし、2代目以降の上司は、Bさんから見ると「意欲なく、働きたいと思う人は誰一人来なかった」。始めたいと思うことができなかつたり、始めたものをやめざるを得ないことがあった。例えば「外国人の奥さま会」。

外国人の奥さま会。ね、私2回やったんですよプラザいた時に。で中国の奥さんたちがみんな来て、(中略)もう3,40分したらティッシュ回しながら、大泣きして皆帰られたのね。で、ある意味では可哀想かなと思うけど、これだけ泣いたら、たぶんまた一年間頑張れると思うのね。(中略)だけどそれ2回しかさしてもらえなかったね。

市内に外国人がいることをアピールするために、お祭りのときにBさん自らチャイナドレスを来てメインストリートに立ったり、フィリピンの女性たちに自分の文化を紹介するようにすすめてバンブーダンスを始めたりしたが、そういったこともやめさせられてしまった。Bさんには、「市の考えがわからない」。でも、8年間勤めたことを後悔はしていないし、やって良かったと思う。

でもまあ、プラザで8年間いたことは後悔してませんけどね。やっぱりそれだけ、中国人の留学生今でも、「お姉ちゃんお姉ちゃん」ってね。実際に会ったことない人でも、Bさんっていう人がいるから、なんか困ったことがあったら必ず、助けてくれるお姉ちゃんがいるから、今はまた、おばさんなっているかもいけないけど、(笑)お姉ちゃんがいるから、だから、その人に訪ねていったら

いいんだっていう風にね、なんか本当に噂が噂を呼んで、たくさん中国人がプラザに来るようになってね、非常にそれは、やってよかったかなと思う。

国際交流プラザに入って3年目に、大学で中国語と日本語を教えてほしいと言われた。断ったのだが、大学側が直接市と交渉して、課長から直接命令でやってみるように言われてやり始めた。中国語は1年目にアシスタントをつけてくれたが、日本語はアシスタントもいないので、一人で模索しながらやらなければならなかった。母語ではない言葉を教えることが重荷に感じられた。

自分が困ってたことを、教えるのは全然オーケーなのね。で一やっぱり、母国語じゃないから、教えてる時に、何かの間違いがあるといけないし、あとやっぱり、(中略)教授法について学んだことはないから、中国語だと一母国語だからアレンジして何とかこうしていけるけど、なかなか、日本語だとアレンジしてみたら、間違ってたらどうしようかっていう恐怖心があるから、だから、非常に、すればするほど、重荷になったのね。

教授法を学んだことがなかったなので、大学で日本語教授法の授業が開講されたときに、1年間受講した。それを中国語の授業で生かしたり、その反応を見てまた日本語の授業に生かしたりと、工夫を重ねている。

去年から私中国語なんか教授法変えて、教授法変えるっていうよりも、教科書を使って、じゃあ暗記してきて、で一、先生が一方向的に話す授業を、ま最初からしてないけど、それをもっと全面的にやめて、もうとにかく、(教授法の授業で)教えていただいたものを、入れて、この一つの文型終わったら、一つのロールプレイを入れて、中国語もできるわけでしょう？同じ言語なわけだからね。だから日本語で得た経験を中国語に入れる、中国語で得た経験を、こっちの反応を見て、こっちもこうできるんだっていうのを、非常に今はプラスになっていてね。

以前はキャンパス内で学生に中国語で話しかけると逃げられていたのに、今は学生のほうから中国語で話しかけてくれるようになった。「成功かな」と思う。授業アンケートでも、「B先生の授業は知らないうちに時間がすぎてしまう」と最高のほめ言葉をもらった。それが自信につながっている。

(アンケートを見て)なんかこう涙が出そうで。うーん。だからなんか、あ、中国語がこれだけできるだったら、これを逆に、日本語にも、ね？ま文法は、本を調べてきちんと正しいのを取り入れればいいから、それ、入れ替えたらね、どうかなと。だから今年は、あんまり悩んでないっていうのはそれ。たぶん学生から得た自信がちょっと、プラスになってるんじゃないかな。

国際交流プラザを辞めた後、「行政と切り離して、自分のやりたいことをやろう」と考え、新しい組織を立ち上げた。ただ、始めて1年の間にお父さんが亡くなったりと、悪いことが起きて、最初に思っていたことが十分にはできていない。現在は語学レッスンや留学情

報提供、通訳派遣などをおこなっている。

県の国際交流財団では、日曜日の日本語クラスの担当の他、週2回スタッフとして出ている。今は国際交流の啓発イベントに関わることが多い。特に若い世代に伝えていくのは、とても楽しい。去年は「わいわいワールド」を開催した。子どもたちが3日間、様々な国の文化と遊びに触れるイベントだ。子どもたちには「お説教」ではなく、自然体で伝えていきたい。

これまでたくさんのことをやってきて、今は大学での授業も多く、少し疲れている。子どもたちが大学を卒業するのを優先して、その後またボランティア活動ができればと思っている。

筆者：何年後かに、こう本当に、Bさんが思っている好きなように、活動をしてもいいってもし言われたら、何、

Bさん：命の電話をしたい。

筆者：あー。ホットラインみたいな？

Bさん：うん。だから、(相談窓口に)足を運んで来れない人もいっぱいいるから、その人たちに対してね、まあ、実際に、非常に難しい仕事らしいから、言葉は人を生かすし一殺すし。ま聞いてあげれる？っていうか、たぶん55,6(歳)なった時に、私は、その奥様たちよりははるかな人生経験をね、たぶん持っているだろうから、まあそういうようなね、もっと内面の、内側の助けに？なってあげられたら、いいかなあと思ったりはしてる。

2人の子どもたちも育ち、「とりあえず、夫婦円満」で、いい人生を送っているとBさんは思う。老後の夢は、半年かけてヨーロッパの汽車旅行をすることだ。

3.3. Cさんのストーリー

Cさんは中学1年生の時に、東京の子どもたちとの交流会で2週間ほど日本に滞在したことがある。「目を張るぐらい」の強い印象が残った。小学校にランドセルや上履きがあること、初めて触れた雪の景色、新幹線…。明治神宮に行った時は「色彩が違う」と感じた。

台湾の赤と日本の赤、色が違うんですね。日本の赤というか、オレンジに近いですね。色が違うとか、その時、気がつきました。

文学にも興味があり、高校に入ってから、翻訳された日本の小説も読み始めた。芥川龍之介や志賀直哉など、情景を想像しながら読んでいた。平岩弓枝などの推理小説も読んだ。本を読んでいると受験の厳しさが癒された。

異文化を感じながら風景とかですね。(中略)日本に行ったの初めて13歳の行ったの思い出を

再び、図のなかに、浮かびあげましたですね。高校だから進学の問題とか、(中略)受験の厳しさをどこか心のなかに癒されるかもしれないので、好きになりました。

3年制の国立芸術専科学校に入り、水墨画を専攻した。3年制だと公立学校の教員の資格が取れず、卒業後は塾で子どもを対象に絵を教えていた。教育におけるCさんの理想と、利益を追求する塾との間に「大きな壁」があり、その壁は働いているうちにどんどん大きくなっていった。

子どもが模索の間に、何を形を出すとかね。そのプロセスが大事ですね。これを無視して、できる形を早く見せることは、恐らく子どもの才能を抑えるんじゃないかと思うんです。殺すんじゃないか。そういう大きな悩みですね、塾の運営仕方ですね、もちろんいろいろ(コンテストに)参加して、入選して、親を喜ぶし、塾においては、次継続してまた入る、それも大事ですね。その時は大きな壁があって、かなりストレスがたまって、結局、いきなり声が出ない、そういう悩みが続いて、それで耳鼻科行ったら、もうこの職業、しばらく休んだほう、あるいはやめたほうがいいと。

今親になってみると、「少し親の気持ちがわかる」が、当時の自分は「若すぎた」と思う。結局Cさんは仕事を辞めた。専科学校時代の同級生が東京の美術大学に留学していて、何度か遊びに行つてその留学生活を見たことがあり、憧れを持っていた。Cさんも「ただの絵の先生だけで人生を送りたくない」と、日本に留学することを決意した。日本語学校に入る条件として独身女性は28歳までとあったので、「最後の切符」だと思った。3ヶ月間台湾でひらがなやカタカナを勉強して、1991年に来日した。27歳だった。反対していた親も、最後には自分で決めたのなら、と言ってくれた。

日本語学校は東京だったが、生活費のことなども考え、友達も一緒に探してくれて、少し離れたL市に安いアパートを借りた。生活は「不安」の一言だった。日本語学校の友達ほとんど学校の近くに住んで誘い合つて勉強や銭湯に行ったりしていたが、CさんはL市に一人だった。アパートは木造で、鍵も簡単なものだったので、誰かが入ってくるんじゃないかと恐ろしくなり、もうひとつ鍵をつけたりした。いつも「目が覚めると同時に不安」で、1年間ずっと目覚まし時計が鳴る前に目が覚めた。自転車で地図を見ながら友人が通う美術大学に行つてみたりもした。

現在の夫と知り合ったのもこの年だった。たまたまラーメン屋で隣に座っていて、Cさんが水をこぼしてしまった時にティッシュで拭いてくれた。その後電車で再び会った。それから電車で会うと手紙を渡してくれるようになった。

共通は2つ駅だけです、で会った突端に、いつも手紙用意してくれた。全部振り仮名ふつて、そのとき(私は)振り仮名ふつても、意味あまり分からない、実は。でいつもくれたんで、それで、手紙やり取りして。

進学先が決まるまでは大変だった。第一希望だった大学を含め、2つの大学の受験に失敗してしまった。試験で、モデルのデッサンをするという課題もあった。どんな課題が出されるかという事前の情報収集が不十分だった。その後、1週間ぐらい塾に通って必要なテクニックを習ったが、もっと早く行かなければならなかったと思う。こういった失敗の積み重ねも「経験」になった。

その後に目指したのは、関西地方の美術工科大学だった。できて6、7年目の新しい大学だった。日本語学校の先輩が一人その大学に行っていて、連絡をとりあった。先輩はCさんの気持ちを理解しながらその大学を勧め、励ましてくれた。

私の先輩はもちろん(日本語学校時代は)東京にいたんですね、東京からそっちに行くの気持ちがあったんですよ。分かってくれたんですよ。行きたくないけどしょうがないっていうのがあって、「こちら関西弁だよ、かなり違うんだよ。」そういうが、先輩の気持ちが伝わってきたというか、私の気持ちで理解してくれるんですよ。「おいで」って。「こちら新しい学校は、先入観入れないで、新しい学校の設備がいいんです。ゆっくり、じっくり、先生もサポートしてくれる、ゆっくりと新しいの機械に触れるよー」とかね。

試験の2日前に行くと、その先輩や他の台湾の留学生たちが歓迎会を開いてくれて、事前の練習をしてくれたり、試験の日もつきそったりしてくれた。

結果は「早く知りたくて、胃が痛いほど」だった。待ちきれなくて大学に電話をしたら、はっきりと合格とは言わなかったが、「いい結果」というようなことを言われて少し安心した。通知が送られてくるのを待った。

やっぱり、1回、2回の落ちると、送ってくるのね、郵便物が薄いんじゃないですか。(中略)その一日、何もできないでね、ずーっと郵便受けで、待ってたんですね。郵便やさん来たーとか、あバイク来たとわかって、ポストの中に入れた、音が違うんじゃないですか、触る途端に分かるんで、あ、ぶ厚いんだ、(笑)これ問題ない。

合格通知を受け取ると次は引越した。運よくアパートはすぐに決まった。台湾の美術専科学校時代の同級生が先にその大学で勉強していたのだが、東京の大学の3年生に編入することになったので、その人が住んでいたアパートに住むことにしたのだ。

1年生の必修科目は講義ばかりでつまらなかったが、2年生に入ると実習科目も増えてきて「大学生だっていう実感」が沸いてきた。寂しさもあってアルバイトを始めたが、そのうちアルバイトと学生とどっちが本業かわからないぐらいになってしまい、何の目的で日本に来たのかと思うようになった。3年生からは奨学金をもらうことができ、学業に専念できた。現在の夫とは、その間もずっと文通を続けていた。

3年目にアパートから留学生会館に引っ越したことにより、Cさんは命拾いをする。

Cさん:(アパートは)駅からすごい遠いんです、すっごく暗いですね。真っ暗いところですね、それで、その時留学生会館ですね、空いてるので、だから留学生会館に引っ越そうと思ってたんで、引っ越して、よかった。もしそのまま住んでたら、私今は、いないはずですよ。

筆者 :え？

Cさん:阪神大震災があったんです。そのアパートが全壊だった。全壊だった。

留学生会館はいちばん被害の大きかったところからは離れていたし、建物も新しかったので、ヒビが入ったぐらいで済んだ。本当に運がよかった。Cさんがアパートを出た後にそこに住んでいた人もいなかった。

震災があったこともあり、現在の夫がL市に戻って来るように言ってくれた。単位は3年生までにオーバーするぐらい取って、残りは卒業制作だけだったので、結婚することにした。それからしばらくして妊娠したことがわかった。

子どもができたことで、もちろんまた台湾行ったり一、すったもんだとかありました。そうですね。もう革命みたいです。ようやく親を説得して、で親も、こちら何回も見に来て、安心して。

5月になってお腹が安定してからL市に引っ越した。指導教員が東京に事務所を持っていたので、そこで卒業制作の相談をすることができた。先生にも「やらないといけないよ」と言われ続けたが、なかなか焦る気持ちにならなかった。絵を描いたのは子どもが生まれてからだった。

子どもを産んで、もうその時12月、11月末からかな、もう小さい生後2ヶ月の赤ちゃん、まだ首座れない、でもおんぶして、徹夜して、で一まあ、ほんとにわたし、一応卒業したといえるぐらい。テーマですね、「大地への便り」です。

作品は、「今振りかえってみると、その時しか描けない」ものだったと思う。描いたものの中から何枚か選んで大きいパネルを作って、それを友達に宅急便で送って提出してもらった。大学の卒業式だった3月26日は、Cさんが来日したのとちょうど同じ日だった。

大学時代の専攻が絵やデザインで、「発表ぐらい友達にまかせ」ていれば良かったし、妊娠中は卒業制作で引きこもっていたCさんにとっては、本当に日本語を勉強するようになったのは、子どもが生まれてからだった。

子どもを産んで、何ヶ月から公園で行って、公園で知り合った友達が今までです。本当にもうほんとうに良かったですね。幼稚園のいろいろ選び方、いろいろ育児の話とか、(中略)ほんとにいい習い、学び場所ですね。公園では。(中略)その時は私たち、本当によかったのは、いいお友達に恵まれてるですね。その日本のおうちですね、遊びに行ったり来たりですね。

2人目の子どもが生まれる前に、上の子を保育園に預けた。上の子は夜泣きが激しく、なかなか寝られないときは、保育園の連絡帳に絵も描きながら思いをつづった。

(連絡帳を見せながら)夜私よく、こんな毎日書いてたんです。先生のやり取りって、一番、言いたいことがあるんですよ。(中略)特にいろいろ、育児の時にね、なかなか外に出られないです。先生たちとこういう通して、日本語の学習も含めて、自分のいろいろ、悩みも書いてて。

その後、上の子を幼稚園に入れた。その幼稚園を選んだのは、「毎日お弁当だから」だ。Cさんは、子どもが生まれてすぐにお弁当箱を買っていて、お弁当を持たせるのを頭の中に描いていた。最初は仕切りを入れずに失敗したりもしたが、だんだんてきぱきと作れるようになり、バリエーションも増えた。

そして下の子が2歳ぐらいの頃から、子どもたちを連れて図書館や公民館に遊びに行つて読み聞かせなどをするようになった。その公民館の職員が、日本語教室を紹介してくれた。

公民館の職員ですね、勧められてるんですよ。「お母さんもし興味があれば、市役所勉強ね、ボランティア日本語の勉強がありますよー」と、教えていただいたんですね。それきっかけです。じゃ勉強に行こうかなーとか。“Lファミリー”ですね、託児がついてるんですけども、託児がついてるボランティア団体さん少ないです。

“Lファミリー”の日本語教室は、市役所の一室を会場としており、教室の後、仲間と一緒に市役所の食堂で昼ごはんを食べる人も多かったが、Cさんは最初の頃、子どもがじっとしていないのではと気になって、勉強した後はすぐに帰っていた。その後子どもも慣れてきてからは、お昼ごはんも食べて帰るようになった。

上の子どもが小学校2年生になった時、当時の代表だったメンバーに誘われて、“Lファミリー”の運営委員になった。それ以来ずっと、「交流活動担当」として、イベントの企画などを行っている。お昼ごはんを食べながら皆でおしゃべりする「みんなのサロン」をもっと宣伝しようと、ポスターを作って日本語教室の受講生の皆さんに声をかけた。「みんなのサロンやってますよ」とわかるような紙も作って、食堂のテーブルに置くようにした。「サロン」では、テーマを事前に決めることもあれば、その日のメンバーを見て自由に話すときもある。

テーマがあれば、いっそうより話しやすい。それで、事前にお知らせ、今月の何？とかね、例えば、3月だから、お人形まつわるそういう話とかね、日本のお人形、自分の国のお人形？(中略)それがあれば、いいですね。何も決まなくて、で行って、今日はメンバー誰？あじゃあ、いろいろおしゃべりして、どこの店、何が？とかね。(中略)今日は帰りはどこか、西友さんにとかに寄ります。ほら安いとか、この店が安いとかね。

お母さんたちが自分の国の本を「読み聞かせ」する企画も実施した。

いろいろ国のお母さんたち集めて、みんな自分の国の本と一緒に読み聞かせという形ですね。
(中略)本当一步踏み出さないとだめ、ほかのお母さんと呼んで、一緒にやろうというかたちで、定着するまではちょっと苦勞するんですけども、ほかのスタッフですね、日本語の先生たちですね、一緒に組んで、そういうが、今考えてるんですね。

子どもの学校では、保護者の懇談会などで自己紹介をするとき、どこの出身でいつ日本に来たかを話し、子育てしながら出会いを楽しんでいる、分からないことがあったら教えてほしいというようなことを言う。そうすると、外国で同じような経験をしたお母さんたちが話しかけてくれることもある。

日本人ですけども、外国行って、その体験して、苦勞して、帰ってきて、「実は私はアメリカ行って、ご主人の仕事でね、その時“となりのトトロ”の映画始まったんですね。引きこもってて、半年ぐらいいかな？で、“となりのトトロ”の映画、ビデオで200回も見たのよ、外全然、アメリカにいたら全然出られない」とかね、「その苦勞がわかったー」とか、話してくれる人も、あとタイで過ごした人も、「言葉が分からないけど、そのときは現地の人笑顔とかでね」、それが話したんですね。

そしてPTAにも積極的に参加するようになる。楽しくやることを心がけているのだ。

私もPTAの選考委員もなったことある、クラス委員もなったことある。で、2年間、地区委員。朝とか子ども、通学班の行事とかですね、見守りとかね、ついでに学校まで行ったりですね、してたんですね。あの一、楽しくやるとか私、頭の中にかけて、したいんで、だから、ほんとに、クヨクヨ悩むはしないんですけど、ひきうけます。そういう態勢ですね。

PTAの広報誌で、アメリカに住んでいたお母さんや中国のお母さんにもインタビューをして外国の小学校紹介を特集したこともあるし、今でも毎月学校の行事予定表をボランティアで作っている。Cさんが絵を描いて、他のスタッフが小物を作ったりしてカラフルにしている。「家庭教育学級」の発表校がまわってきたときには、そのためにプレゼンテーションの仕方勉強した。そういうチャンスがなければできなかった。何事も「プラス面を入れる」ことが大事だと思う。

他の学校から依頼を受けて、総合的学習の時間に墨絵体験の指導をすることもあった。後でお礼の手紙を読むとすごくうれしい。台湾の紹介をする時など、映像や写真を見せると子どもたちがちゃんと聞いてくれることに気づいた。これも回数を重ねていく中で気づいたことだ。「やっぱり経験」だと思う。

2003～2004年の2年間は、“Lファミリー”の運営委員、PTAのクラス委員と同時に、「外国籍県民県政モニター」を努めた。その後、2006～2007年にかけての半年間、県の

「多文化共生推進プラン検討委員」となった。いろいろな立場の人と話すのはいい勉強になる。

メンバーは 10, 12 人かな？外国人, 外国出身はふたり, 一人ブラジル学校の校長先生と私です。ほんっといい勉強になりました, 私, 今まで, (外国籍県民県政)モニターになって, で“Lファミリー”の運営委員になって, いろいろの場, 人の前に話して, さらにこういう検討委員になるときは, 他のメンバーは日本人です。で行政立場と, NPO と, 日本語のネットワークの代表者とかね。

そして半年後の 2007 年 10 月, C さんは「市民活動サポートセンター」のスタッフとして採用された。プランを作った人が現場で働かないと, 市民の「声がわからない」。市民活動の現場にいて, 半年前に作ったプランが現実に向かっていることをかみしめている。

そのプランを検討している委員の中に, 本当にまさか, ほんと半年後たまたまですね, この場私ここで仕事してるんですね。だから, かみしめるですね, 私はその時のプランとか, その時が現実してるんです, 現実に向かってるんです。

C さんが考える多文化共生のキーワードは, 「出会い, (文化間の) 刺激, 理解」そして目標として「自立」がある。自立の前には「支援」が必要だ。

“Lファミリー”で日本語学習が終わったあと, お母さんたちが食事をしながら, 子どもたちも自然と一緒に遊んで, とても楽しそう。C さんは, こういう出会いの場をこれからもっと作っていきたい。それには日本の女性の力も必要だと考えている。

もうちょっと子どもが大きくなったら, こういようないろいろ国の子どもたちですね, これ, 実現したいです。(中略)今, たとえば, 定年になったの女性たちは, かなりすごい経験が積んで, 日本の女性ですね, PTA を通して家庭を守るとか, 60 歳になったら, すっごいキャリアを持ってると思いますよ。人の前で話すとかも, 段取りもよく, 目処たつのもすごい素晴らしいですよ。その才能をぜひ, その力を借りたいんですね。だから, 子どもを通して, その方たちも一緒に組んでいきたいですね。ぜひその経験を借りたいですね。はい。それで, やがて, そういう例えば 50 代, 60 代の女性たちですね。ふりかえてみて, 今の子どもたちとね, 今の親たちの悩みの話を聞いてあげたりとか, 立場なれば, 今のお母さんたちはきっと自分の子どもといいかたちを伝えられるんですね。自分そう思うんですねー。

10 年後には, 外国人も増えて, 「いい方向へ進む」と, C さんは思っている。

3.4. D さんのストーリー

Dさんは、6人きょうだいの3番目だ。本当はドクター¹¹になりたかったが、家族も多いし、農家なので早く助けたいと思い、中学校を出て、レストランなどで働いていた。日本に来る前の2年間は、マニラに出て、メイドをしながら踊りの勉強をした。「エンターテイナー」として日本に行くためだ。

Dさん:私の親戚も、日本で、なんとかなるかな、エンターテイナーの仕事しててー、それから私の田舎を、来たんですよ。それから、あなたも大丈夫だからしてみないか。(笑)その話ですの
で。

筆者 :じゃその親戚の人と、一緒に来て、

Dさん:はい、来て、マニラ行って、それから、エイジェンシーがありますよね、エンターテイナー*
* *とか。それからそれで、踊りの勉強して間に、メイドの仕事しててー。

踊りの勉強をしたのはその時が初めてで、練習は厳しかった。午前10時から午後5時までエイジェンシーで練習をし、その前と後にメイドの仕事をした。大変だったが、家族のことを考えてがんばった。

2年間の踊りの勉強を終えて最初に来たのは九州だった。1985年の12月に来て、半年働いた。日本語はほとんどわからない状態だった。

Dさん:やっぱり困ったんですよ。で一言がもうわからないし。

筆者 :日本語の勉強は、全然、来る前に、

Dさん:来る前にはほとんどないです。ただあなたの名前ぐらい。うん、なるべくフィリピンおる間
が、踊りの勉強しないといけないから。

筆者 :そうですかー。へーそれで来て、

Dさん:で、それから、お店でママさんかパパさんが、それでみんな日本語、少し少し、教えてくれました。

フィリピンに帰り、しばらくしてオーディションがあり、今住んでいる中国地方のS市の店に来ることになった。前の店では踊るだけでお客さんのそばに座ることはなかったが、S市の店では違っていた。

Dさん:今までが、忘られないのが、もうみんな悪い言葉？が、ここで聞きましたよね。それ慣れるの経験、暴力の言葉とか。どうしても私たちそのときは、言葉があまり分からないから、なんかみんな、悪い言葉が言われるのがみんな面白いそう感じ？(笑)その経験。

(中略)

筆者 :え、悪い言葉って、たとえば。

Dさん:たとえば、「おまえアホ」とか、うん。でもそのとき私たち言葉分からないから、そのときは

¹¹ インタビュー時、筆者は「医者」と解釈したが、後にDさんのコメントによると看護師のことを言っていたという。

ただママさんでも、「何言われてもとりあえず笑いなさいよー」って、「ありがとうだよー」って。だからその言葉言っても・・・スマイルスマイルスマイルで、それからやっぱり私たちも勉強言葉できるのとき、「アホ？アホって悪い言葉じゃないか」って(笑)そのとき。うん。

S市で夫となる男性と知り合った。Dさんのビザでは半年しかいられないので、その男性はDさんがもう一度S市に来られるよう、自分で店を作った。そしてDさんが一旦帰国し、88年に結婚して店を始めた。

タレントとして来ているのと、結婚してからとでは、Dさんの日本での生活は全く変わった。

やっぱりタレントのときはもう半年で帰るから別に勉強しなくてもいいんじゃないですか？やっぱり結婚したら子どものためもあるし、仕事のためもあるし、やっぱり言葉、少しいい言葉が勉強しないといけない。

1989年に一人目が、1993年に二人目の子どもが生まれた。夫は子どものためにも日本料理を作ってほしいと言うが、なかなか難しい。

見る感じだと一、なんか簡単そうだけど、やっぱり自分で作ったら一、なんか、みりんとか？砂糖、酒、混ぜるのがちょっとなんか、うまくできないとどっちがすっぱい、うん。なりますね。

2人の子どもの好みも違っている。

Dさん:でもやっぱり、子どもが2人だから、(フィリピン料理を)食べる人とか食べない人も一出てきますよね。

筆者 :あー好き嫌いとか。

Dさん:好きとか嫌いがはっきり。子ども2人しかないんだけど、それははっきり言いますね。

筆者 :じゃ2人で違う。(笑)

Dさん:違う。(笑)フィリピンの料理作ったら、私と上のお兄ちゃんが食べますけど、日本の料理だったらやっぱりお父さんと下の子が。

言葉についても、上の子どものほうはフィリピンの言葉を結構話せるが、下の子のほうは「本当日本人ぽい」感じで、そこまで勉強しようという気持ちもないようだ。

S市に住んでしばらくは、夫に言われてあまりフィリピン人とは友達にならなかった。しかし夫は10年前に亡くなってしまう。その後は大変だった。

Dさん:どうしてもお父さんが、あまりフィリピン人と一友達になると、やっぱり日本語の勉強も、耳が入らないと思うからなるべく離れるように、してたんです。うん。だから夫といつも、一緒に。

筆者 :へー、まあまあ、でもいいですね。いつも(笑)一緒にいてくれたら。

Dさん:それから、夫が、亡くなられて、夫はもう亡くなられたんで、

筆者 :あ、そうなんですか？何年ぐらい、

Dさん:それは、1998年。

筆者 :あ、10年。あーそうなんですか？うーん。その後はでも、大変だったでしょう？

Dさん:うん、大変です。だからその時はなんで夫がおる間に、勉強しなかったんだらうって、その時が思いますね。

市役所での手続きや仕事のこと、近所との関係など、すべてひとりでしなければならず、いちばん辛い時期だった。学校からは、子どもの宿題ができていないと電話がかかってくることもあった。

先生から電話かかってきました。何で勉強しなかったんですか？何で宿題できてなかったんですか？でもやっぱり私たち言葉わからないから、書けないから、私たち言ってました。「書きなさいって言ってます。」(笑)でも何書いてるか私たち分からないから。

その後フィリピン人の友達もできた。特に仲がいい友達は5人ぐらいで、一緒にご飯を食べに行ったり、互いの誕生日のお祝いをしたりしている。子どもが小さい時は一緒にキャンプに行ったりもしていたが、下の子も高校生になり、「この歳になったらみんな友達が大事になってるみたい」で、最近はほとんどお母さんたちだけで集まっている。そのメンバーたちで作ったのがグループ“M”である。

昨年、教会のシスターTさんが県から助成金が出るという話を聞いて、Dさんや友人のUさんたちフィリピン人女性を集めて、話し合いの場を持った。

シスターTが私たち集めて、それから、「あなたたち今、何が一番困ってるよ？」って聞いたんですよ。だからUさんと私もどうしても言葉？が一番困ってるから、「県から願うなら、日本語の勉強がお願いしたほうがいいんじゃないですか？」って。

日本語を勉強する場がほしいと考えたのは、自分たちの経験を、新しく国際結婚で来る人たちに経験してほしいからだ。

Dさん:どうしても私たちの考え、Uさんにも私にも、私たちの今までの経験を？新しい結婚する人に、ならないように。

筆者 :あー。うん、例えばどういうことが。

Dさん:だから、家で例えば、私たち日本人と結婚してたけども、言葉がほとんど分からないから喧嘩の原因ですよ。やっぱしー、夫と言葉が分からないと、私たちも色々な考えで、自分の考えで、喧嘩なったり。うん。子どもにも、お母さん何言ってる？さっぱり分からないと言われるとかー、うん。それで私たちほかに新しい結婚する人のフィリピン人も、ならないように？だから少しでも皆勉強した方がいいんじゃないかなーって思って。

グループ名“M”は、フィリピンの言葉で「腕をくんで皆で頑張ろう」という意味だ。手をつなぐだけだと弱いから、腕をくんで、力を合わせて頑張ろうという思いをこめている。県の助成金をもらうときに、国際センターの人が、日本語の先生に声をかけてくれた。始めるときに先生たちとミーティングをして、「あいうえお」から始めたいというDさんたちの希望を伝えた。日本語の勉強以外には、国際交流のイベントがあるときに、フィリピンの料理を出したり踊りをしたりしている。

市内には他にも日本語を勉強できる場所があるが、子どもの面倒を見る人がいない。グループ“M”を作る時に話し合っ、大学生がボランティアで子どもを見てくれることになっている。他にも自分たちでグループを作ることで参加しやすくなった点がある。

私たち同じみんなフィリピン人で行くから。もし××(市内の国際交流センター)とか違う人が入りますよね、たとえばインドネシアとか、うん。だからやっぱ一言言葉が分からないから入るのが恥ずかしいとか。でも今同じみんなフィリピン人だから、なんか入りやすい？うん。みんな人が知ってるから。それもやっぱし、***違うと思います。(中略)運転してない人もありますよね？それから私たち、コールグループがあるんですよ。そのコールグループを、誰々が迎え、うん。たとえば一人が、誰々が迎えに行きなさいよーってとか、それも、やっていますので。

助成金は昨年度で終わったが、Dさんたちが続けたいと言ったら、市内の大学の先生が、大学の教室を使ってお金がかからないように続けようと言ってくれた。日本語の先生たちには1回につき一人200円ずつ出している。「ガソリン代ぐらいは持たないと、先生たちに迷惑をかけるから」だ。仲間のUさんが、勉強するフィリピンの人たちを集めている。

Uさんが、セールしてます。化粧品？だから色々などこの店は行ってらんですよ。だから結構、今ここ、みんなが誘われたのは、Uさんです。売ってる間に、「これからまた日本語の勉強始まるよ、あなたたちどう？」ってとか。

今勉強しているのは34人。今年から参加した人たちは「Aクラス」でひらがなとカタカナを勉強している。2年目になるDさんたちは、「Bクラス」で漢字や敬語を勉強している。漢字の書き順がわかると字がきれいになって、人前で書くのも平気になった。

だからそれで全然違います。前、病院に行くとき、「すみません、名前、住所、書けない、書けない」って。今だったら「名前、お一分かった、大丈夫」。平気で書けます。(笑)やっぱしそれだけでも、なんか自信がきます。

街中でも漢字が目に入るようになり、それがきっかけで子どもとのコミュニケーションも変わってきた。

その前も、車運転してる間に、どの漢字でも、目が入らないんですよ。今だとやっぱし勉強したとき、あ、これは“くち”だ、お、これは何だ、とか。それから子供にも、「この漢字はどういう意味？」とか。やっぱし漢字が、いろいろの読み方ありますよね？私の、分かる読み方で読みます。それから子どもが、「お母さんその意味じゃないよー」って。前だとどうしても私が黙ってるから、子どもも何も教えない。今私も一生懸命、「え？これは“あい”だよな？」とかなんとか。「お母さんそれ“あい”の読み方じゃないよ」って。やっぱしコミュニケーションも、変わってきます。

今、Dさんは通訳の勉強を始めている。セミナーには仲間5人で参加したが、今実際に通訳をしているのはDさんを含めて3人で、依頼があると、その3人で交代で行っている。多いのはDVの問題だ。

Dさん:DVが多いんです。やっぱし、聞いてみたら、どうしても言葉が、合わないからなんか、殴ったりとかなんとかする？殴られたりとかね。でも最初聞いてみたらその内容の問題が聞くと、何が一番原因か、やっぱし、言葉です。

筆者 :うーん。ふんふんふん。あーそっかー、うーん。お互いの気持ちが、

Dさん:気持ちを、話ができないから。

その他に、学校や病院、警察などに通訳に行っている。通訳を頼まれる機会が増え、「今それがいちばんいいかな」と思っている。通訳をする際、「足すな、引くな」ということを注意されているので、それは気をつけるようにしている。

これまで日本での生活を経験してきて、そして通訳をしながらさまざまな問題を見てきて、Dさんには、フィリピン人に伝えたいこと、日本人にお願いしたいことがある。

日本におるならやっぱし時間守らないといけない。やっぱしこれもひとつの問題です。学校にも、約束の人の関係なんかも、やっぱしそれは、私たちフィリピン人だから、フィリピン人だから遅いわっていうの、イメージなってますよね。うん。だから約束あるならその時間が守らないといけない。それはフィリピンの人たちにアドバイスですよ。うん。日本だってやっぱし、時間の国だからどうしても。(後略)

それから出来ないなら出来ないで、分かるなら分かるで、それはつきり言ったほうが、いいと思います。出来ないなのに出来ます出来ますって言うから、どうしてもそれが、問題が起きますよね。(中略)どうしても私たちがフィリピン人だから、なんか恥ずかしがり？出来ないのに出来ますって言うから。それが一つの間違いですね。

日本人の方をお願いするのは、私たちが外国来た人だから、あんまりー、なんか、日本人みたいにすぐ慣れなさいとはちょっとなんか難しいですね。やっぱし習慣が違うのでー、すぐ日本の習慣が入るのはちょっとなんか、無理だと思います。うん。(後略)

(学校からのお知らせを)子どもが読んでよって、私も読めないわって。(笑)夫もないしどうしよ

う。(笑)それで、先生たちにひとつのお願いのは、外人のお母さんてわかれば、少しローマ字でも、書いてほしいですね。(後略)

どうしても今、日本人の方をお願いしたいのは、どうしても、私たちみたいの外国人だと、フィリピン系、特に、黒い人特に、どうしてもバカにしないでください。(笑)どうしても同じ人間だから。

子どもがみんな大きくなっておばあちゃんになったら、フィリピンに帰りたいとDさんは思っている。でも「日本もまだまだがんばりたい」。まずは通訳を本当にうまくできるようにしたい。そして、子どもが勉強したいと言えば、ちゃんと最後まで行かせたいと思っている。

3.5. Eさんのストーリー

Eさんのお母さんは日系で、母方の親戚はたくさん日本に来ていた。お母さんとお兄さんも日本に来て暮らしていたが、Eさん自身はもし日本に行くとしても「観光ぐらい」と思っていた。ペルーでは15歳で日本の高校にあたる教育を終えていて、行きたい大学も決めていた。

Eさん:大学決めていたんですけど、別に受験、

筆者 :はまだだった?¹²

Eさん:まだだったんですよ。はい。でも一こういう大学行きたいなっていうの、考えてた。ありましたね。

筆者 :それはどんな分野の大学?

Eさん:え一つとそうですね、情報科学、システムエンジニア。

筆者 :そっかそっか。そういうのに興味があった?

Eさん:そうですね。はい。プログラミングとか結構。はい。

しかし、Eさんの予定は変わってしまう。ペルーで事故に遭ってしまったのだ。治療のために、Eさんも父と一緒に来日することになった。2000年のことだった。日本に行けるのは嬉しかった。

未知の世界でしたし、僕日系4世なんですけど、もう4世だし、結構まあ、8分の1の、血しか入ってないので、まあ、そうですね、日系人というよりペルー人として育ったので、こう、ひいおじいちゃんのふるさどに戻れるなんて一とか、いうの思わずに、とりあえず、結構そういうシステムエンジニアを目指してたから、やっぱ技術が進んでる日本に、行けるのはなんかすごく嬉しかったんですよ、まそういう風に最初は見てたんですよ。

¹² 筆者はEさんが来日後に参加したN国際交流協会の日本語グループでアドバイザーをしていたため、Eさんとは旧知であり、くだけた話し方でインタビューをおこなっている。

日本に来て治療を始めたが、どのくらいかかるのかもわからなかったし、後遺症なども問題もあって、そのまましばらく日本にいたことになった。そこで、来日して3カ月後ぐらいに、住んでいたN市の国際交流センターに行くことにした。

治療がまだ長引くことがわかって、で、じゃもう向こうでの受験はあきらめて、まあちょっと日本で勉強できないかと思って、その相談するためにも、ここ(N 国際交流センター)に初めて来たんですけど、最初日本語の勉強とかしたりして、そのあとまあ、高校(の相談)とか。

アルバイトもしていない状態だったので、まずは日本語の勉強のため、EさんはN国際交流センターに通い詰めた。N国際交流協会の日本語事業としてあった木曜昼、木曜夜、金曜午前に加え、金曜夜と土曜午前の自主グループにも参加し、さらに火曜日と水曜日には、ボランティアの人に個人的に教えてもらっていた。日曜日と、センターの休館日である月曜日以外は毎日通っていた。

お父さんはすぐに仕事が見つかったので木曜の夜だけに参加していた。お父さんはペルーではいろいろやっていたのに、日本語力の問題でできる仕事に限られてしまうことが、Eさんには悔しかった。

友達がほしい、学校に入りたいという一心で、Eさんは日本語を学んだ。

とりあえず、誰かと話したいなと思って、でも誰かと話しようと思ってもスペイン語話す人は、近くにいないし、15歳なんで、やっぱり結構反抗期だったりするので(笑)親と話はしたくないけど(笑)、話はしたいんですよ、誰かと。となると友達がほしいと、でも友達といっても日本語できない、じゃまず日本語から、ちょっと頑張って覚えないと、もうこのままの状況はいややと思って、でそれで日本語ちょっと、その友達作りたいたいというのがモチベーションになって。学校に入ろうと思ったのも、大学にちょっと行けないというのがわかったんですよね、なんかその年齢的な制限があって、とりあえず、大学にはしばらく行けないけど、それまで、ずっとこの生活は、なんか嫌だな一と思って、日本語を勉強したい、まず友達作りたいたい、友達作る一のはやっぱり学校とか、そういう自然にできた、関係の方がいいかな一と思って、学校に入るために日本語も勉強しないといけないし、とりあえずまあ、日本語から始めないと、何もできないと思って、日本語の勉強始めたんですね。で結構、それまで漫画とかが結構好きだったんですよ。で、兄が持っていた漫画をちょっと読んだり、ま片手に辞書を持って、それで一ちょっと、ひらがなとかカタカナ覚えて少し漢字とかもちょっと、ま漫画だったら割と、結構、話し言葉が多いので。あと一教科書、ここに来て、日本語の教科書で、文法とか勉強して。

N国際交流センターで出会ったボランティアの人たちは、退職した人や主婦の人など、皆年齢が上で、「できる話とできない話」があった。でも、「皆さんに温かく快く接してもらったのがすごく嬉しかった」。センターに来ていたグアテマラの人とはすごく仲良くなった。

て、帰りに一緒にコーヒーを飲みに行ったりした。「年齢は違うにしても、同じ言葉で話せる」ので、「本音で話せる」友達だった。

Eさんの進学について、Eさんに関わっている多くの人が心配してくれて意見を言ってくれたが、Eさん自身は「どうしていいかわからず、途方に暮れて」いた。最終的には、N国際交流協会の職員と一緒に教育委員会に行って話をしてくれて、定員の空いている高校の2年生に編入することができた。

しかし、Eさんの期待に反し、簡単には友達ができなかった。

最初、なんかみんな、結構寄ってくるんですね。(中略)西洋から来ている、結構珍しかったみたいで。でも一、やっぱり日本語覚えるだけで、友達はそんなに簡単にできるもんじゃないな一っていうのは思いましたね。まず文化のこと、言葉の壁もちろんあったし。ここで勉強してたのは日本語だったので標準的な日本語。で●●市の高校に入ると、みんな●●弁で、先生も授業●●弁で、されるし、(笑)なんか辞書に載ってないんですけどっていう。(笑)

日本語に慣れてきた後も、「先輩後輩」の関係性というものには、どうしても馴染めなかった。

2年生に入ったんで、ちょうど真ん中じゃないですか？先輩もいて後輩もいるんですけど、僕はその、砕けた口調で話したくても、後輩が、敬語使って話してくるし、先輩もなんか、ちょっと偉そうにするし、で僕からしたらもう、高校に当たる教育、卒業してるわけなので、まあいうたら知識的には、日本語がわからないでも、知識的には同じぐらいのレベルで、1歳しか変わらないのに、なんで偉そうにしてるんか、それが理解できなくて、もう、結構、・・・学校がちょっといやになったりすることもありましたね。ま勉強も分からないし、結局友達は、学校に入ったけど友達は、なかなかできないっていう、あれやったんですけどね。(中略)お父さんに、「学校もういやだもう行きたくない」と(言ったら)、「行きたいって言い出したのは自分でしょう」って、「郷に入れば郷に従え、今日本にいるから、日本のルールでプレイしたらいいんちゃう？」っていうことで。

お父さんに「日本のルールでプレイ」するように言われた Eさんは、「彼らが接してほしいように接していこうかな」と考え、少しずつ敬語も使うようになった。「遊びに行こうや」と言って実際誘ってくれないというような「建前」もわかるようになった。そういう表面的な建前を言う子より、Eさんが仲良くなりたいと思って自分から声を掛けた子のほうが、仲良くしてくれた。方言の動詞の変化をルーズリーフにまとめてくれた友達もいる。

そうして、クラスメートともだんだん話せるようになり、2、3人「話の合う友達」もできた。「一時期は忘れかけていた大学に行きたい目標」を取り戻すことができ、勉強に向かうことができるようになった。3年生になってからは授業もわかるようになって余裕も

出てきた。最後の文化祭には自ら積極的に参加し、「サルサ」も踊った。

文化祭も、(部活の)ESSで参加したし、クラスでも参加して、でまた有志で、サルサ、友達十何人が集めて、みんなサルサ踊って、なんかそういうのもやって、先生にちょっと怒られながら。「あんた、受験勉強しなあかんやろう、たくさんのことやってたらなんか、もう、勉強せなあかんでー」って言われて、そのときはなんかすごい楽しくて、そうですね、文化祭が一番充実、してた時期ですねー高校で。(中略)このままじゃ、高校行ってたけど、なんか、特にこれっていったことはない、っていうような状態になったら、なんか嫌やしな一と思って、で、やっぱり自分もサルサやったのは、自分のこと友達に理解してもらいたいですね、それまで僕は郷に入れば郷に従って感じで、結構受身になっていたんですけど、もっと友達に、自分のことを理解してもらいたいと思って、積極的に、参加したんですね。

もともとは情報工学に興味のあった E さんだったが、計算は得意でも、証明問題になると日本語が必要になってくるのでなかなかできず、工学部はあきらめざるを得なかった。「最終的にはもう、なんでもいいから大学に行きたい」と思い、「どうせ行くんやったら日本語が勉強できる環境とかがあったほうがいいな」と考えて、外国語大学を受験することにした。滑り止めだったはずの大学に落ちてしまって、本命の大学は「絶対あかんやろうなあ」と思っていたが、見事合格することができた。

日本で2年以上教育を受けている場合は「留学生」としては認められないのだが、E さんの場合、ちょうど2年になるかならないかだったので、N 国際交流協会の職員や高校の先生の働きかけで、なんとか留学生としての資格を認めてもらって、その枠で入学した。しかし、ビザが留学ビザではなかったため、留学生の身分は入学後1週間で取り消され、一般学生の身分になった。

大学に入り、4月は新しい生活で楽しかったが、すぐに「5月病にかかって」しまった。「外国語大学」であっても、「文化の摩擦」があったのだ。

E さん:外見は、日本人と思われたんですけど、中身がね、違うのでそういう、ま外国語大学でも、また文化の摩擦が、起きたりして。

筆者 :たとえばどういう、

E さん:うーんそうですねー、たとえば人と挨拶するとき、まささいなことですけど、人と挨拶するときに、南米の方はわりと握手、で、ほっぺにキスしたりとか、ハグとかしたり、スキンシップが多いんですけど、話す距離も近いし。それは全然できてなくて、ここでちょっとやろうと思ったら、あんまり、いい印象持たれなかったの(笑)

筆者 :そう。(笑)びっくりされた。

E さん:そうですね、変態扱いされたりしましたね。だからこういうことは、日本の学校ではダメなんやと思いましたけど、まあそういうのもあって、自分は日本に合わせようと思って、思いすぎたせいか、いつの間にか自分は、日本人になろうとしていたっていうか、意識していなくても、

なんかちょっと無意識的に、自分の身を守るため？こういう、外国人的な要素を出すと、絶対、傷つくから、それを、やっぱり傷つくとかいやな思いをしないために？なんて言うんですかね、新しい自分、日本用の自分、作っていったんですけど。だからだって、名前とか出すと、「違うやーん」とか、結局何かと、日本語もある程度うまくなって、日本人なら、分かること、僕も、ちろん分からないんじゃないですか。誰かに何かを聞くときにも、なんか、「え？」っていう顔されたりして、とにかくー自分は、このままでいいんだろうかーっと思って。

アイデンティティに「揺らぎ」を感じ始め、自分が何をしたいかもわからず、せっかく入った大学も辞めようかと思ったりもした。しかし、親と話して冷静になり、「目標が大学やったので、達成できたからには、卒業までしないといけないな」と考えるようになった。

2年生まではつらかったが、3年生になって留学して帰ってきた友達とは「握手」や「ほっぺにチュー」もできるようになって、楽しくなった。やっと大学でも「本当の友達」ができた。

大学の宿題などは、「コピペ」をすると、「つなぎ目がわからない」ので「絶対ばれる」と思ったし、「自分でちょっと頑張って、下手なりに出してみよう」としていた。「自分がこんなことができました」というのを見せたいという気持ちもあった。卒業に必要な単位数は120だったが、「せっかく学費払ってるし、これ面白そうだしと思って」、結局150単位ぐらい取得した。

大学に入ってから、N国際交流センターには時々来ていた。奨学金の申請書など正式な文書を出す時に、チェックを頼んだりするためだ。その時に、日本語グループでボランティアが少ない場合は、簡単な漢字など「これくらいだったら教えられるかなーと思って」手伝ったりしていた。それも心に「余裕が出てきた」3年生の頃からだ。子どもの支援もしていたが、自分は役に立っているのかと思い、一度辞めてしまったこともある。

別に僕は中国語ができるわけでもなくて、韓国語できるわけでもなくて、日本の学校の勉強もともにできるわけでもないかなーとちょっと思って、それで、やっぱりいつの間にか自分をこう追い込んで、..あんまりこう、座って話すだけ...どうなんかなーとちょっと思ってたんですけど、今はその意味がわかるんですよ、その心のケアとか。でもその前はたぶん学力しか考えてなかったと思いますね。

N国際交流協会の職員から、「子どものモデル」になるというようなことを言われ、自分でも趣旨を理解し、「子ども母語」の事業でスペイン語の活動を担当するようになった。来ている子どもたちも、初めは悩んでいた子も多かったが、ここに来て皆仲良くなってまとまりが出てきたと思う。

以前に比べたら、まとまりが出てきたし、子どもたちも、結構、悩んでた子もいたみたいなんですよ。中には、やっぱりNっていうのは少数点在地域なので、学校に、一人いるかないかっていう

感じなんですよ。それが自分、なんですよ。やっぱりなんかこう周りからの、プレッシャーっていうか、何かと恐く感じる事が、多かつたんちゃうかなーと思うんですけどでも、みんな仲良くなつて。

学校に派遣されて子どもの支援もするようになり、「ますますこの世界に入って、出られなく」なつていった。4年生になつて、先輩から調査の協力を頼まれ「母語」について興味を持つようになり、自分の卒業論文も、日本の小中学校に在籍する外国人児童・生徒と母語との関係について書いた。母語を知ることで、学校への適応もスムーズに進むし、学力のためにも母語が必要だというようなことを主張した。そして、これまでの自分の経験にさらに理論付けをしていきたいと思い、大学院進学を選んだ。Eさんの中で、大学の先生になれたらという「野望」が芽生え始めた。

母語の勉強始めてから、4年生になつてからは、もうちょっとやっぱり、せつかく、こういうんなことやってきたので、サラリーマンで一人生はしたくないのがあって、(中略)で母語にも興味を持ったし、じゃあ、ちょっと、まあ野望ですけど、大学の先生になれたらなーと思って、やっぱりそれは、渡日の経験は、今までしてきたし、当事者ではあるんですけど、やっぱり結構主観的にものを見てしまつてることが多いので、今度はね、論理付けというか、ちょっと客観的な見方もできたら、なおさらいいんじゃないかなと思って、あと、これなら人には負けないうのも身に付けたいし、まだ出来てないんですけど(笑)

修士課程でも必要な単位は1年目でそろえ、今は修士論文に取り組んでいる。母語とアイデンティティの関連性について書こうと思つたが、子どもはまだ「アイデンティティ」という抽象概念を理解できる段階ではないし、中学校・高校で変わっていくものだし、なかなか難しい。もう一度考えを練らなければいけないと思つている。N市とは違う外国人集住地域で調査をしているので、いろいろ見て視野は広がつたと思つている。博士課程に進みたいと考えているので、「卒業するための修論」にはしたくない。

修士課程修了後、そのまま「ストレートで」博士課程に進学したかつたが、経済的なこともあり、一旦就職しようと思つている。でも、割り切つて就職活動を始める気持ちにはなかなかないでいる。

筆者 : どんな仕事を考えてますか？

Eさん: そうですね、職種というより一勤務地が、僕は関西からちょっと離れたくないんですね。親もいるもので、親もあまり日本語できないので、ま関西からあんまり離れたくないから、となるとやっぱり大企業とかは、もうだめで、ですから職種というより、勤務地、優先ですね。ま、僕にしたら、次の段階に進むためのステップだと思つて、やっていこうっていう、気持ちなんんですけどでも、まだ一、乗り切れない感じですね。でも一それをしないとイケないなっていうのは、

筆者 : じゃあその博士課程の学費をまず、稼ぐために就職するって感じ？

Eさん:そうですね。まあかといって全然、違うことやっても一それも意味ないなと思って、なるべく繋げていきたいな一とは思んですけど一、まあどうでしょうかね、多分、難しいでしょうね。

Eさんが将来的に「大学の先生」になりたいと思うのは、研究をするためというよりも、「システム」を作りたいからだ。

外国にルーツを持つ子供たちの、サポート、システムとか。いちばん、今思ったのが、人手不足なのと、人がいてもその質が、必ずしもいいというわけではないので、そのへんの、人材育成とかにもちょっと、挑戦してみたいなと思いますね。いろいろ見てきたんですけど一、学校によって、この先生大丈夫かな?(笑)ま僕も人のこと言えないですけど、(笑)そうですね、たとえばね、ネイティブだから、ちょっと話ができるから、ほかの人がいないから、お願いしますよって、先生になってる人が、いるんだよね。で、今までの歩んできた道とか見たらもう全然、違う分野だったりするし。まあかといってその、先生の資格持ってるから必ずしもいい先生っていうわけでもないからね。それは。まあわかってるんですけど一。別にそういう、問題じゃなくまあ、その育成できたら、それに越したことはないかなと思いますね。

子どもを支援する活動をして、子ども好きであることに気づいた。小中学校の先生もいいが、やはりシステムを作るには発言力のある「大学の先生」がいいと思う。

(大学の)先生になればある程度の発言力も、ついてくるんちゃうか一と思って、でシステムに、なんらかの影響を与えられたら、良いなと思いましたね。まあ、肩書き、・・・なんか学歴社会っていうんじゃないですけど、結構そういうのあったりするじゃないですかまだ。これだけは言えるっていうの、先生になったら、より多くの人に聞いてもらうことも出来るし、まあ、もちろんね、子ども達と関わるのもすごい好きなんですけどね。

渡日の経験をし、自らも「アイデンティティ」を研究しているEさんは、現在の自分自身のアイデンティティを次のように考えている。

えーっと僕はですね、ペルー人です。ペルー人ですけど一、100%、なんか生粋のペルー人っていう訳でもないし、別に、そんなんじゃなくてもいいんじゃないと思うようになってきたし、別に今僕が持ってるアイデンティティは一つではないと思っているんですけどね。(中略)別に、ひとつに拘らなくていいんじゃない?と思って。自分がちゃんと、自分はこういうものなんだというのを認識できればと思って、(そういう考え方が)出来るようになるまでは、結構大変だったんですけどね。今は自分は、まあいくら頑張ろうとも、日本人になれないし、だからといって、生粋のペルー人とは何だと。(笑)混血事情も複雑だしあそこ。ですからまあ、別に、何人とかっていうふうに拘る必要はないと思いますね。そういう、逆に多様な背景を持ってるほうが何かと、自分の役に立っていると思いますし、今までのことの支えにもなってますし、これからのやりたいことにも、繋げて行きたいなとは、思っていますし。

3.6. Fさんのストーリー

Fさんは、「その辺の話したらちょっと、すごく長くなる」事情によって、「自分の意思じゃなく」来日した。1997年のことで、当時Fさんは12歳だった。日本に行くとき聞いたときは、特に何も考えていなかった。

親が行くって言ったので、ついていだけの感じ。最初はやっぱりちょっと、ワクワク感がありました。外国に行けるっていう。

日本に来て3日後ぐらいに地元の小学校に入り、「右も左もわからない状態」だった。週に数時間中国出身の先生が教えてくれる取り出しの授業が「唯一の救い」だった。クラスメートも、初めは近づいてきたが、それも2、3週間だけだった。

最初入った時は、外国人ということで、周りの子供も新鮮感、好奇心もって、すごく近づいてきて、話しかけてくれたりするんですけど、だんだん、新鮮感がなくなって、もう何もかまってくれなくなりました。たぶん、2、3週間ぐらいたってから、そのギャップに、すごくショックを受けました。(中略)向こうも好意を持って、声かけてくれるんだろうと思うんですけど、やっぱり言葉が分からないから、すごく緊張するんですね。意味の分からない言葉をずっと話しかけられするのも、なんかきこちが悪いっていうか。

それでも、よく誘ってくれる友達が一人いた。

一人、たぶん担任の先生が、その子に、Fと一緒に行動しなさいというふうに、指示を出したと思います。その子はまあ、結構、よく日本語を教えてくれたり、休みの日に家に来て、遊びに行こうって誘いに来てくれたり。その子は、今でも、たまに一緒に遊んだりすることがあります。

日常の会話は中学校に入ったぐらいから、授業の言葉は中学校2年生の後半ぐらいからわかるようになってきたが、それでも、勉強にはなかなかやる気が出なかった。

中国にいた時は、すごく、成績が良くて、日本に来てからこういきなりなんか、わけ分からない言葉、わけ分からない環境で、すごく自信喪失、に陥って、もう勉強しても意味ないや、ってなって、ま結果的に勉強にやる気が出ない、という感じです。

中学校1、2年生の頃は、あまり学校に行かなかった時期もあったし、けんかもよくした。窓ガラスが割られないよう、全てプラスチックの窓にされてしまうほど荒れた中学校だったのだが、そういった環境だけが理由ではない。

言葉ができない自分に対する苛立ちを、どっかに発散させたいというのも、今冷静に分析すれば、そういうのもあったので、やっぱりちょっとなんか、気に入らんことがあったら、すぐ手をだしてしまったり、うん。(中略)中国人やから、変な名前してるとか、そういうこといわれたりして、こうすぐに、

きれる。

一緒にインタビューを受けていたGさんの話を聞いて、自分もバリアを張っていたのだろうと思う。

今Gちゃんの話聞いてると、中学校の時自分が、人とけんかしたりしてたのも、たぶん言葉が、すごく単純な言葉しか知らないから、相手にこういうことと言われて、で、今だったら、いろんな返し方が、軟らかい返し方もあるんですけど、その時はその言葉一個しか知らないから、まあ結局それで、まあ、トラブルになったりしてたと思います。日本語も、ほかの日本人と、自分が使ってる日本語は違うから、コンプレックスを、持ってたのかもしれない、それで、まあ、Gちゃんのいうバリアを、張ってる、そういう感じだと思います。

中学校で唯一楽しかったのは、技術の時間だった。

中1、中2で勉強が嫌だった時期も、技術の時間でなんか、作ったりしてる時間はすごく、楽しかったです。俺、これいけるじゃんって。これだったら、やれるかも、みたいな。

やっとなり落ち着いて、勉強に向かうことができたのは、中学校3年生からだった。日本語ができないことで「厳しい労働環境」で仕事をしている親を見て、勉強してそういう環境から「抜け出したい」という気持ちがあった。そんな時に、自分の好きな「機械」に結びつく学校があることを知ったのだ。

機械とかが好きやったので、(中略)学校の先生と雑談してて、偶然、工業高等専門学校、工専っていう、存在を知って、あー俺是非、絶対行きたいと思って、で工専を目指して、中3から、勉強を始めた。

工専の受験には失敗したが、工業高校に入ることができた。高校は中学校とはうってかわって、非常に厳しかった。

高校は、すごく厳しくて、制服は学ランですけど、第1ボタンを開けると、連れて行かれる。(笑)そういう学校やったので、すごく厳しい。職員室に入る時も、まず、自分の制服をちゃんと、チェックして、ノックして、で「自分は、何年何組の何というものですが、何々先生にこういう用件が来て来ました。」言わないと、もう1回やり直してずっと言われるので。

学生も「結構真面目な人」が多く、今でもつきあいを続けている友達が数人できた。

勉強については、中学校1、2年の頃「さぼって」いたので、高校でついていけるか心配していたが、高校1年生の最初の間テストで学科で4位の成績をとったこともあり、「このペースでがんばったらいけるんや」と動機を持続させることができた。車関係のエンジニアになるという夢に向かって、3年間勉強を頑張った。特に高校から大学への「推薦枠」が、大きな「原動力」となった。

その工業高校の中に、毎年、今通ってる■■大学に1名だけ、推薦枠ではいれるようになってるんですけど、その受ける条件としては、3年間総合の成績が1位になる人がそれを選ぶ権利があるので、最初からそれを知ってましたから、それが原動力でずっと、3年間勉強を続けられました。

そして、勉強によって取り戻された「自信」は、自分自身の肯定にもつながっていった。勉強で自信を取り戻して、周りの人よりは劣ることなにもない、逆にまあ、日本語は、日本人と違うけど、それは仕方がないから、逆に自分が、それまでに中国で暮らしてた経験とかは、他の人になんか経験で、それを自分の強みと思って。

目指していた推薦枠で大学に入ることができ、機械工学科で4年間勉強を続けてきた。
Fさん: 高校のときは、凄く自分にプレッシャーを、まけたらあかん、まけたらあかん、プレッシャーをかけてたのもあるし、大学に入ってから、まあわりとリラックスして、4年間やってきました。勉強も、ずっと好きな勉強なんで、苦にせずに。でもやっぱ、工業高校なんで、基礎学力は、普通科の学生より、ちょっと劣る部分があるので、最初、1回生の時、ちょっとだけ苦労しました。

筆者: うーん。あー。そういう、まあやっぱり教養みたいな授業とか、

Fさん: はい。その代わりにまあ、専門科目は、高校の時、若干、やってかぶってる面もあるので、専門は、まあ結構楽でした。

大学2年生の時から、社会人を相手に中国語を教え始めた。最初は個人レッスンをいくつかしていたが、それが次第に増えてきたので、ひとつにまとめて中国語講座を開くことにした。市の施設の部屋を教室として借りて、週に1回、3年間続けてきた。Fさんが「甘い」ので、難しい文法の説明をするというよりは、中国の文化を紹介したり日中関係について話し合ったりすることが多かった。受講者は20代から60代まで幅広く、多い時で10人前後いた。その中で、印象に残っている男性がいる。

Fさん: えーっと、議論の中で(笑)結構、中国に対して、厳しい意見を持ってはる、おじさんがいまして、あの一(笑)いつも否定的ですね。

筆者 : へー。え中国語を勉強してるのにな?

Fさん: その人はたぶん中国を、知ってるからこそ、客観的にこう批判、毎年、なんかボランティアとして中国に、木を植え行ったりもしてるんですけど、で、反面、「最近中国に関するこんな悪いニュースあったで」、そういうことばかり、毎回話題として出して、うん。まあ、ちょっとその言い方が過激、しすぎだったりしたら、「ここにいる僕も中国人なんで、僕の気持ちも考えてくださいよ」って言うと、まあ、今度謝ってくる。はい。

(中略)

筆者 : それはどう思います? そういう厳しい意見っていうのは、

Fさん: 厳しい意見は、・・・うーんまあ、事実もあるから、でもまあ、言い方ですね。中国人同士で

も、すごく政府を批判したり、中国のおかしいところを批判したりするんですけど、でも、日本人に、こう言われると、ちょっと、むかつくときある。

Fさんが大学を卒業するというので、12月にお別れの食事会をして解散した。「普通の学生では経験できないこと」を経験できたと思う。

N国際交流センターでの活動を始めたのも、大学2年生からだ。ある集まりで、N国際交流協会の職員と知り合いになり、中国語ができるスタッフがほしいから手伝いに来てと誘われて、午前の“子ども母語”での中国語と、午後の学習支援に参加するようになった。ここに来ると、常に過去の自分が経験してしていたことを今経験している子どもに出会えるので、過去の自分が困難を乗り越えた時の気持ちをもう一度思い出させてくれる。それが大学で勉強する原動力にもなったと思っている。

就職活動は大学3年生の後半から始めた。機械関係と自動車関係を3、4社受けた。でも、第一希望は決まっていたので、他の会社は「練習」のような感じで受けていた。無事に第一希望の自動車会社から内定をもらうことができた。

筆者：自分のどんなところを、評価されて決まったと思いますか？(笑)

Fさん:(笑)えっとー、まあたぶん、中国語が出来る、中国語と日本語両方できるっていうところと、専門分野が出来る。もうひとつは、やっぱり自分が中国から日本に来てから、ずっと逆境を、ずっと乗り越えてきたので、面接の時に自分が、一番アピールしたい自分の良いところ、僕が言ったのは、逆境にあったときに、自分が今まで経験してきたので、これからも、絶対くじけることなく、それをうまく乗り越えていける自信はありますよ、というのはアピールしました。

あと1ヶ月ちょっとで入社だが、入社してからすぐTOEICの試験があるらしいので、英語の準備をしないといけないと思っているところだ。自分が選んだ道だから、自信を持ってやっていきたいと思っている。機会があれば、日本と中国を行き来できるような仕事もできればいいなと考えている。

来年か再来年には、中国に戻っている両親を日本に呼び寄せたい。そして将来の夢は、会社を興して社長になることだ。

Fさん:遠い目標は、・・・そうですね。まあ自分で、会社を興して、社長になりたいっていう気持ちがあります。でもそれはやっぱり、社会人としての経験もないし、知識も、経済力も、ないので、やはり数年、会社員として、働いてから、実現させたいです。

筆者：それはどんな関係の、会社を作りたい？

Fさん:機械とか自動車関係の、会社をやりたいです。

筆者：ん？それは、具体的に、

Fさん: 技術を, 日本の技術を, 中国の会社に, 教えるというか, 日本の技術者を中国に派遣させたり, と思っています。

3.7. Gさんのストーリー

Gさんの母方のおばあさんは中国残留孤児で, おばあさんと, お母さんのきょうだいの一部が先に日本に来た。それから徐々に家族全員が手続きをして, 順番に来日した。Gさんが両親と姉と共に来日したのは, 1998年の5月で, Gさんは10歳だった。Fさんと同様, Gさんも, 日本に行くとき聞いた時はあまり何も考えていなかった。

やっぱり, 子供だったから, あー日本だって。その当時は日本という国について何も知らなかったし, 歴史を勉強する前に日本に来たので, だから日本を嫌いになることはなかったし, 戦争があったこともまったく知らなかった。で日本に来てから, いろいろと, 体験をしてから, であれ歴史を習ってから, あーそうなんだ, っていうふうに, 気づいて, そうですね。なので当時日本に来た時は何も考えずに, 親が, まあ, 大人はたぶんわかると思うんで, 日本はいい国だっていう, 可能性が, 広がるっていうふうに言っていたので, 私たちの将来のために行くっていうふうに。

親は子どもの視野を広げたいと思い, 「残留孤児の第3世代」としてチャンスがあるなら行こうと決めたのだとGさんは思う。またお母さんは, 先に日本に来ていたおばあさんと離れていたのが恋しかったのもあるだろう。「逆にうちのお父さんがついていきますっていう感じ」で, 家族で日本にやってきた。

日本に来てから最初の8ヶ月間は, 財団¹³で日本語を勉強した。周りは全員大人だったので, あまり子どもに接する機会はなかった。でも「子どもって, 習得するのが早い」から, 問題はなかった。

8ヶ月の日本語の勉強は, すごく楽しくて, 時を忘れるぐらい, ぜんぜん, やー楽しいや。これやっていけるんじゃないっていうふうに思っていたので, あんまりまじめに, 勉強しなかった。

その後, おばあさんの住む都市に移り住み, 小学校の4年生に入った。授業は全然わからなかった。友達も作ろうとせず, 一人であることを選んだ。

ほとんど, そうですね, 無言ですね。何も話さずに, 友達も一人ぐらいいたんですが, 私があんまり, 社交的な人じゃないので, もう小さい頃から, そうじゃなかったの, すごく苦手で, すーごく優しくしてくれたんですけど, 私は何を言ってるのかわからへんから, いいや, 一人いるほうが好きっていうふうに, ちょっと一人であることを選んでいました。で気がついたら, 6年生ぐらい, 5年生ぐらいになってから, 友達いないやってことに気がついて, その時慌てて, 友達がほしいというふ

¹³ 中国帰国者センターを指すと思われる。

うに。でも、もう遅かったですね。友達の心を傷付けてしまったので、なので、そこから自分を見つめ直して、はい。

優しくしてくれたのに応えることができず「心を傷付けてしまった」友達とは、中学校に入ってから、今度はGさんのほうが友達になろうと一生懸命にはたらきかけて親友になった。それでも、小学校のときのことは今でも後悔している。

小中学校時代の友人は、その子一人だけで、ほとんど、自分からけんかをしていた。中学校時代の同級生には「印象が悪い」だろうと思う。

Gさん: 向こうからの、そうですね。ちょっかいというか。私は、自分からはいけません。もちろん一人なので、孤独なので。向こうからきたものには、絶対に負けません。へへへ。(笑)かいますっていう感じの、

筆者 : あー、負けず嫌い、

Gさん: かなりの、一人でも堂々としていう。堂々とじゃないんですけど、ぜんぜん怖くなかった。すごい荒れてました。

Gさんは当時のことをあまり思い出せない。

たくさん思い出が、あまり思い出せないんです。というのはたぶん、忘れたっていう、気持ち在必死で、今でもぜんぜん分かりません。いやな思い出は、あーあったかな、なかったかな。とにかく、小学校、中学校は、あんまりいい思い出がなかったです。はい。あんまり、思い出したくないし、中学の同級生には会いたくないです。結構やらかしてしまったので、へへへ(笑)

高校生の時に一度、中学校時代の同級生とバイト先で会った。「昔の嫌な人に遭遇した」という気持ちだったが、バイトをしながら当時の話をするようになって、「私の勘違いだった」とGさんが気づいたこともあった。「たくさん誤解」があったのだと思う。

自分の発言で問題が起こったことが多々あったので、中学2年生ごろからは、「自分の気持ちを抑えつつ、回避する」ようになった。自分の発言に注意することをずっと心がけていた。

1歳上のお姉さんも負けず嫌いで、「私は勉強では絶対負けへんぞ」と決めて塾に行くことにした。お姉さんが塾に行くようになってから、その姿を見て、Gさんは「あ、何かに集中するといいなんだな」と気づき、自分も行きたいと親に言った。親は困った顔ひとつせず、一生懸命節約して、2人を塾に行かせてくれた。でも、2人が選んだのは大学進学率の高い高校ではなく、中国人学生の多くいる高校だった。

Gさん: (姉は)たぶん塾に行ってから気づいたんでしょうね。何が必要なのか、自分には、どんな

環境が必要なのかっていうの、気づいてみたいで。姉は本当にしっかりして、いっこ上なんですけど、もう本当に人生の大先輩って言っても。(中略)なので、その姉をいつも見習って、
筆者 : あーじゃ、お姉さんと同じ高校に。

Gさん: そうですね。もうずっと姉を、姉の後ろを追ってて。

高校に入ってGさんの人生は変わった。Gさんに必要なのは「中国人の友人」だったのだ。

Gさん: もう本当に私の記憶は 10 歳まで。止まってたんですね。で、そこから何をやってるかは、ぜんぜん。もう毎日が、色がなかったっていうか、もう白黒な毎日で、高校に入ってから、もう途端に私の世界が、全て色が、染められるようになって、もう本当の楽しいなあ一つというふうに。(後略)

筆者 : え、何が違ったんでしょう。中学校までと、高校と、

Gさん: えー私自身が、あの、日本人と壁を作ってしまうんです。今でもそうなんです。嫌いではないんですけど、たぶん小学校の恐怖の思い出から、やはり日本人は私を理解してくれないというふうに、(中略)こうすごく、(バリアを)張ってしまうので、日本人は日本人、私は私というふうに、張ってしまうので、なので私に必要なのは、やっぱり向こうの友人かな?とか、中国人の友人かな?っていうふうに、今でも思っています。なので、友達作りは、高校になってから。

先生たちも、中国の学生には配慮してくれて「甘やかすっていう感じ」だった。Gさんはそれまでにそういう状況を味わったことがなく、「日本人の先生なんか大嫌い」というふうに思っていたので、たくさんの先生から愛情をもらえたことが嬉しかった。

高校時代は一生懸命勉強した。お姉さんに言われた一言がきっかけだ。

Gさん: その一言が、ちょっときついんですけど、まあ直訳すると、お前はぶさいくだから、誰かに養ってもらえるなんて、思わないほうがいいっていうふうに。なので。

筆者 : (笑)お姉さんが?

Gさん: そう。魅力がなければ学力をつけなさいと。あーって思って、本当はっとして、やっぱりと
思って、

筆者 : (笑)それもうすなおに?(笑)

Gさん: すなおに、受け止めて、高校の時から勉強しました。(笑)

大学は、センター試験が免除される中国人引揚者の枠がある大学を選んで受験した。数学が苦手な国語が得意なので、「絶対文系に行こう」と決めていた。中学生の時から中国語のビデオを見たり CD を聞いたりしていたが、高校に入ってさらに中国語の素晴らしさを感じてもっと勉強したいと思うようになり、中国語を専攻することにした。

高校の友人を通してから、やっぱり中国語を使った会話から、すごい心に響くんですよ。一言一

言が。あー中国語ってなんてすばらしいんだ。やっぱりもう1回、止まったところからやり直して、勉強していきたいと思って。

Gさんが大学に合格した時、報告した日本人の先輩がいる。彼女とは、中国人学生の交流会で出会った。中国人だと思って話しかけてみたら日本人で、こういう活動を見に来たのだと言っていた。それがきっかけで大学に行くための奨学金などのアドバイスをしてもらったり、いろいろお世話になっていた。

大学合格を報告し、Gさんがアルバイトを探していると言うと、Gさんのためになるし経験も生かせるいいアルバイトを知っているから紹介するよと言われた。それが、N国際交流センターでの活動である。

Gさんは、この活動はアルバイトというより、自分が勉強できる場所だと感じている。「バイトで稼ぐ人よりも私のほうが、たぶん、全然儲かっている」と思う。毎週来るのが楽しみだ。Gさん自身にも日本で生まれた8歳の弟がいるので、子どもたちがすごくかわいい。教育にも興味を持つようになった。活動をしながら、過去の自分と当時の先生のことを考えるのである。

このセンターに来てから、教育に対する？ことを、最近、自分に、(笑)問いを、投げかけたりとか？なんである時はあの先生は、こんなふうにしてくれなかったんだっていうのを、しみじみ？ふふ。(笑)最近、体験と共に、こう脳内で、繰り返し繰り返し、疑問に思ったりとか、私ならこんなふうにしたいという。まあこれから日本に、外国人が増えるってことは、皆さんも、知ってると思うし、私もそれを、ちょっと自分の経験を生かせたらいいな一っというふうに、思っています。

一方で、友人の影響を受けて、メディア関係への就職も考えるようになった。

彼女はもう私と違って、日本名がなくて、私は小学校に入ってから、日本名を(中略)こだわることなく、使ってたんですけど、彼女からしたら「私も日本名ほしかったー」って言って。でも、彼女は中国人なんで、純の、生粋の(笑)なので、すごく、メディアから、たくさんニュースが、報道されるたびに彼女は傷付けて、学校に行きたくないというふうに思ってたでしょうね。それが原因で(メディア関係に就職したいと考えていて)、ま私もそれが原因でたくさん、いろんなことがあったので、それはもう大切だな一っと思って、是非そこに、就職して、皆さんの、視野を、変えていきたいな一っというのを。

そのようにいろいろ考えていると、就職についての方向性がなかなか定まらない。もうすぐ3年生になるので、最近焦っている。この1年間で徐々に好きなことを見つけられたらと思っている。

結婚のことも考える。Gさんは「日本人とバリアを張っちゃう」ので、日本の男性に異

性としての魅力を感じたことが一度もない。また両親が日本語を話せないし、弟もいるので、中国人と結婚することを考えている。そうすると、中国で就職したほうがいいかとも悩み始めるのである。これまで子どもたちのためだけに生きてきた親に幸せをあげたい。

最近本当に悩んで、中国で就職をするか、将来親は中国に帰るだろうというふうに、思ってるんで。なんかすごく、親がかわいいそうだと思って。もうここ十何年間、私たちのために生きてきたようなもんなので、本当、楽しくないと思うんですよね。(中略)中国語を話しても理解してくれない状況で、親は10年、11年間ぐらい、特に私のお母さんが、本当家か、買い物か。家か、みたいな。友達もいなくて、本当そういう親を見てると、泣きたくなくて、一軒家の、親に幸せを、残りの。あまり迷惑をかけることは、したくないです。そう、だから、中国で就職しようかなということも考えてるんですよ。

ただ、中国の人は「恐ろしくなるぐらい」頭が良く、競争しても勝てないのではないかという不安もある。それに、中国では「人間関係」¹⁴がなければ何もできない。そういう意味では日本は素晴らしいと思う。昔は日本から逃げ出したいと思っていたのに、中国に戻っても人に勝てないんじゃないかと思うと、またそこから逃げ出したいようになってきた。中国でも日本でも「半分半分生きてきた」ので、どちらでも大丈夫だと思うが、日本を選ぶことになるのではないかとGさんは考えている。

成長するにつれて、自分が生きてきたこの、十何年間は本当に、何事もなく、平和に生きてこれて、ありがたく思っ、ほんと感謝しきれないぐらい、気持ちで、だから、ん？まあ、日本選ぶでしょう。はい。

Gさんにとっては、「人の役に立てること」が素晴らしいことだとずっと思ってきた。優しくしてくれた先生たちもいたし、いつか、どこかで恩を返したい。

特に、高校のときの先生だったり、中学校のときも、先生嫌いだったんですけど、本当優しい先生もいたし、やっぱりこういうふうに、手伝ってくれた先生方の気持ちを考えると、すごく心も温かいし、そういうふうに私がされたこと、他の人にしたいな一つ。恩を返せるところがないんですよ。(笑)なので、そう考えてみると、じゃ人の役に立てるような人間になろうって、思ってます。はい。特に中国のテレビ見てて、どこのこの小学校を建てた人がいるとか思うと、すごいその人はすばらしいって思っ、ずーっと小学校を建てたいっていう夢が、今もあります。だから、貯金をして、一個でもいいので、小学校を建てたいなという。

3.8. Hさんのストーリー

Hさんは、お母さんが日本人と再婚したために、9歳の時に日本に行くことになった。

¹⁴ 一緒にインタビューを受けていたFさんが、「コネ」のことだと教えてくれた。

聞いた時は嬉しかった。

日本はテレビとかで、何かもう最先端みたいな感じで、よく言ってたんで、嬉しかったなあって思
って。でも友達と別れるのは辛かったけど、まあ、別に会えなくなるわけじゃないみたいな感じ
で、ちょっと前向きに。

小学校4年生の年齢だったが、ひとつ下の3年生に入った。しかし、授業の内容は理解
できたので、1ヵ月後には4年生に上げてもらった。

Hさん: 言ってるの正味よく分らんけど、問題見たら大体分かるから。あと、やっぱり、数学とか
はもう1回勉強してるものだったんで。またやんのあほらしいなと思って、だから、それで、上げ
さしてもらった。

筆者 : 自分で先生に言ったの?

Hさん: 親に相談して、どうしようかなーとか言ってたら、次の日からもう4年生に行っていよいよ
みたいな感じで、また自己紹介したんですけど。そこで。

クラスメートが「外国人だから珍しくて、めっちゃ寄ってくる」ので嬉しかった。その
中から何人か友達もできた。みんなが「普通に」接してくれるのが良かったと思う。

Hさん: 逆に何かもう普通に接してくれるので、いいなあ、変な気遣いなくみたいな感じで。

筆者 : 先生とかもそうでした? あんまりー。

Hさん: はい。まあ普通に、怒られたり。(笑)よくします。

近くの小学校に、日本語を教えてくれる先生がいたので、週に2、3回、学校が終わっ
てから通っていた。先生と仲良くなって、「関西弁」も覚えた。

最初のほう、行くのちょっとだるかったんですよ。学校終わってからまた行かないとだめなんで。

でも、先生と仲良くなって、授業終わった後でも何かしゃべってて、当然そこで関西弁にしゃべり
はるから、それで、関西弁のほうを先覚えちゃった。

日常会話が理解できるようになるのに3ヶ月ぐらい、授業の内容がわかるようになるま
でに1年ぐらいかかった。子どもだったから早かったのだろう。

家では、お父さんとは日本語で、お母さんとは中国語で話していた。お母さんも日本語
が話せるのだが、「家ぐらいは、中国語をしゃべる」ようにしていた。お父さんはよく日本
語を教えてくれた。どこに行っても説明をしてくれたし、例えばエレベーターに乗ったら
「1階、2階、3階」と数字を教えたりした。

中学校では、「日本の文化を学びたい」と言って、茶道部に入った。友達の男の子が一人
で入っていてかわいそうだったのもある。茶道を通して「和の文化」を学んだ。それ

が中学校のいちばんの思い出だ。

最初は何か、足痛いな—ってやっぱり思ったんですけどでも、何かこう、落ち着きますね。やってくる時、むしろ落ち着かないと、手順とか、あまりいいお茶入れられないから。(中略)頭ん中を空っぽじゃないけど、何か、“すっ”，みたいな効果音がイメージなんですけど、その入っていく？だからなんかこう、気持ちの切り替えみたいな学んだね。和の心というか。まあでもそれは、結構気持ちいいもんでしょう？

高校は、「自分のレベルを考えて、無難にいこうかな」と考えて、公立高校の「真ん中らへん」を選んだ。先生には、「勉強したらもっと上行けるぞ」と言われたが、落ちるのがいやだったのだ。

高校では、「何を思いついたか知らない」が、野球部に入った。「話題もちきり」で、みんなから「どうせ3日でやめるやろうな」と思われていたが、それをいい意味で裏切って3年間続けた。

だって、こんな一生懸命練習することって、もう高校くらいしかないやろうなと思って、だから、もったいないじゃないですか。せつかく、始めたし。と、楽しいからですね。

「やっと同じような人と会えた」のも高校だった。同じ高校に、日本生まれの中国人と、中国から来た留学生がいた。

Hさん:中国から来た留学生が一人おって、で、もう一人は、中国人やけどもう生まれたときから日本人、日本に住んでる子と出会えて、こうなんか、ちょっと嬉しかったですね。高校の時は。

筆者 :それは初めっから分かったんですか？名前とかで？その人が中国にルーツがあるっていうのは、

Hさん:なんかその、日本に元々住んでる子が、同じクラスで、しゃべってたんですよ。でなんか、名前珍しいなと思って。▽▽っていう名前だったんですけど、で、しゃべりかけたら「中国人やねーん」みたいな感じで、ゆうとって、で、一週間位したら「2組に中国のやつおるでー」って言って、見にいったら、バリバリの、つい最近来た一みたいな、

筆者 :あーその一人留学生だった。

Hさん:そう留学生の子がおって、それで仲良くなった。

大学を選ぶ時、今行っている大学の「国際コミュニケーション学科」という学科が、人とコミュニケーションをとるのが好きなHさんには魅力的に思えた。就きたい職業はこれだとはっきり言えないが、語学力を生かしたいので、その「生かし方」を学べるのではないかと思った。語学だけを勉強するなら、外国語大学に行ったほうがいいのかもしいかな、それは「なんか違う」と思った。

国際コミュニケーションだったら、その語学自体も勉強するし、その、語学をどう生かすか？その

社会において。とかも学べるんで、自分はこっちの方がいいかなーと思って。確かに歴史とかも大切なんですけど、生かし方を、その、言葉の、使い方とかを教えてくれると思うんで。

大学に入ってから、「考え方がガラッと」変わり、もっと勉強したい、もっと知りたいと思うようになった。

大学の授業と高校の授業って、違うじゃないですか。高校の授業は、与えられたものに対して、答えとか書いて全部決まってるじゃないですか。でも大学の場合は、なんか与えられてるけど、自分から求めないと、出来ない感じ。だから、勉強したいな、勉強したいなって思いましたね。高校の時は勉強いやだったんですよ。正直もう。でも大学になって、もっといろいろ知りたいなーと思って。

特に、キャリアデザインの授業では、社会におけるマナーなどを学び、いろいろなことに対する意識も変わった。ビジネスマナーには細かいと思うものもあるが、意味や理由があるので、納得させられる。アルバイトをするときにも、決められた時間までただ働くのではなく、どうすればお客さんに喜んでもらえるか、どうしたら効率よくできるかといったことを考えるようになった。

留学生に日本語を教えている先生と仲良くなって、留学生とも話すことがある。留学生は勉強に対する姿勢が真面目で勤勉で、それもHさんの考え方が変わったひとつの要因かもしれない。

大学で中国語の授業をとって勉強したことも、自分にとって良かったと思う。

「お前中国人やから取るなよ」とか言われたんですけどね。でも僕、勉強してよかったと思います。簡体字と繁体字で違うし。(中略)全然今しゃべる人いないんですよ。お母さん亡くなったんで。だから、もうずっと日本語なんで、しゃべる人いなくて、中国の授業とってちょっとましになったかな。

おじいさんとおばあさんが話す原住民の言葉にも興味があり、おばあさんに電話をして教えてもらっている。だんだんその言葉を話す人が少なくなっていくのは寂しいから、覚えておきたい。

おじいさんおばあさんがもし、亡くなったらもうそこで終わってしまうかなとか考えるたらちょっと、寂しいじゃないですか。その世代の人が。かといってなんかこう、そんな頭もよくないからそんな、伝えるみたいできないし。(中略)こんな言葉もあったんやで一みたいな感じで。覚えておきたいなど。

N国際交流センターでの活動にも、大学に入った頃から参加している。高校時代の友人の中国人留学生がここで日本語を勉強していた。教えていた人は韓国人だったので、「韓国語教えてよ」と頼んで、友達も集めて韓国語を習っていた。その人にここでボランティア

をしてみないかと誘われたのだ。Hさんは主に教科学習を支援する「学力班」に配属されている。始める時に受けた説明の中で、「居場所」という言葉が気になった。

子どもの、居場所？みたいな。こう、落ち着けるというか、心を開いてくれる所みたいな感じ。だから、子どもたちに接して、悩み抱えてそうやったら、聞いてあげたり、勉強にかぎらず？生活面でも悩みあつたりする子どもがおるから、聞いてあげたり、ま、勉強も、教えたら教えたなら教えてあげたり、ま、一緒に遊んであげたりしてもいいし、みたいな。って言われて。すごい、居場所っていうキーワードが自分の中で、何か、引っかかって、気になって、で、続けてみようかなと。

活動をする中で子どもたちから悩みを聞いて、過去の自分は「プラス思考」だったなとHさんは思う。

たまに、隠す子とかいるじゃないですか。(でも自分は)何で隠す必要があるの？みたいな感じで。別に同じ人間やし、ま国は違うけど、しゃべる言語も違うけど、同じ人間やし、別にそこ堂々としてこうよみたいな。までも、自分が、小さい時は、別にそういう考えもなく、何か、俺特別やなみたいな(笑)、違うな一みたいな感じで、逆にそれで浮かれたけど。(中略)悩んでる子、「どうして、日本人じゃなかったんやろ」とか、言われてちょっと困りましたけど。

Hさんにとっては「同じ地球で生まれたから、皆一緒」だと思うし、「差別する意味が分からない」。でも現にいじめにあっている子どももいるし、そういう子どもたちにここに来て元気になってほしいと思う。

大学生活を1年終えたHさんだが、これからはハングルを勉強してマスターしたい。そして、来年は交換留学で韓国に行きたいと考えている。

高校の時、ハングルちょっと勉強して、興味あつたんで、あと勉強の姿勢が一番いいんですよ。韓国の留学生が、全体的に見て。だから、韓国どんなとこかなとか思って、勉強したいな一と思つて、どうせやるんだつたら徹底的にやりたいし、1年間行きたいなと思つて。

将来就きたい仕事については、まだよくわからない。旅行会社で働きたいと思つたこともあつたが、給料が安いし、大手の会社に入ると一日中チケットを出しているだけと聞いて、それが毎日だと考えたら嫌だと思つた。最近、日本語教師も考え始めた。

なんかそっちの方が出来そうな気がする(笑)。なんかこう、語学、中国語とかを使って仕事しなかったんですけど、よう考えたらそんな、小学校3年生までの言葉しかだいたいしゃべられへんのに、そんなんで出来るかなと思つて。勉強とかしますけど。それやたらいつそ、ね、日本語を教える方法でいってもいいかなと思つて。今バイト先の人で、台湾出身の人が2人おつて、1人はハーフなんですけど、その人は、日本語教える検定とか持つて、昔、そういうとこで教えてみたいなんで、今話とかいろいろして。

いずれにせよ、最近「内定取り消し」などの話も聞くのでとても不安だ。大学に入ってから、「生きるのって大変」だどつくづく感じる。特にアルバイトを始めてからは、「お父さんの偉大さ」がわかってきた。

(自分は)大学まで行かしてもらったし。だから、お父さんってすごいなと思って。俺がこの年になって、(そこまで)いけるのかなーと思って、だから、多分僕は日本でこう、あんまり、挫折っていうか、しなかったのは、父のおかげだったと思うんです。何でも、自由にやらしてくれるし。なんて言うんですか、視野が広い人だったんで、はい。おかげかなーお父さんの。外国から日本に来る人って何か結構、家庭が複雑な人とかが多いし。だから、それでちょっと居場所がないみたいな子どもが、ちらほらいたりするんで、(自分の場合は)結構、しっかりしててよかったなーと。

Hさんは現在、お父さんとの養子縁組の手続きをすすめている。親権が祖父母にあり、このままだと台湾の徴兵制度の対象になってしまうのだ。今は大学の在学証明によって徴兵を免除されているので、なんとか在学中に成立させたい。去年の夏から始めているが、手続きが複雑で、なかなか進まない。春休みにマレーシアに行きたかったが、パスポートの更新も間に合わなかった。

是非とも、法律上でも父さんには父さんになってほしいなと。なんでこんなややこしいでしょうね。別に僕が、無理やりさせられてるんだったら分かるんですけど、親子になりたい言うてるやん！みたいな感じで。家庭裁判所でいっても、「ですからー」みたいな感じになるんで。

これまでは手続きを父にまかせきりだったが、これからは何でも自分でしなければならぬと思う。卒業して10年後には結婚しておきたいし、家も買いたい。そして、20年後には「いいパパ」になりたい。Hさんが目指すのは「自分のお父さんみたいな人」だ。

20年後は、いいパパになります。僕。今のような、今の自分のお父さんみたいな人になりたいなと思って。子どもと出来るだけ、出かけたりして、山とかハイキング。でー、僕小さい頃お父さんによくなんか、名所とかよく行ったんですよ。奈良大仏とか、京都とか金閣寺とか。姫路城とか、和歌山の白浜とか、いろいろ連れて行ってもらって、それで、なかなかそういうの無いらしいですよ。他の人は。だから俺もそんないいパパになりたいなと思って。

3.9. 考察

以上、8人のストーリーを述べてきた。以下では、8人がこれまで歩んで来たライフコースにおいて、どのように社会的関係を築き、それに伴いことばや学びのあり方がどう変化したのか、自身のアイデンティティはどのように捉えられているのか、そしてどのような将来像を描いているのか、といった視点から、考察していく。

3.9.1. 「他者との関係」「居場所」と、「ことば」「学び」

外国人支援者たちの多くは、ライフサイクルの様々な段階で「ことば」の問題につきあっている。そこでの「ことば」は「他者との関係」をきりむすぶことと密接につながっており、であるからこそ、強烈な印象を伴ってかれらの前に立ちはだかるのだろう。

Aさん: その(小学生の)当時は一番何が欲しかったかっていうかっていうと、友達できる日本語を知りたかったっていうのが一番大事。けども、(父が使っていた日本語の)本っていうのはそういうのがないから、正直のところ、こういう本どおりで読んでても、何話しても、意味がない。意味がない物を自分で持っても、もっとさらに意味なくなるから、一番最初、やっぱり本を捨てちゃいましたね。

Bさん: (日本語学校の教科書には)辞書形なんかないから。だから、「私は疲れましたから、家に帰ります」って言うと皆が…(いぶかしむ表情)っていう感じで、なんか最初は、すごい、寂しかったね。うん。(中略)日本語学校で習った日本語は、あんまり、大学では私にとってはね、本当友達作りにおいては役には立たないっていう実感をしましてね。

Dさん: だからやっぱり、一番辛いのは子どもに言われるんですよね。お母さん何言ってる、さっぱり分からない。それが一番辛いんですよね。(中略)注意したいのに一、どういう言葉使っているんだらうか。ただダメダメダメと子どもが通じないんじゃないですか。ダメって何がダメなの？って。いいよお母さんの言葉分からないからお父さんに聞くわ一つとか。

学齢期に來日し、学校での人間関係をうまく築けなかったFさんとGさんも、その原因を「ことば」の問題として捉えている。

Gさん: (小学校の時は友達が)いなかったですね。ほとんど？みんな私が、けんかしました。(笑)(中略)高校の時に一回、中学校の友人と同じバイト先で(会って)、すごくいやな気持ちでしたね。なんか、昔のいやな人に遭遇したという、そんな感じだったんですけど。バイトを通じて、当時の話をするようになって、あー、なるほどっていう、(中略)そうだったんだ一つ。へー、私の勘違いだった一つ。(中略)たぶん言葉の、壁があったんだろうというふうに、思います。(中略)たくさん誤解がありました。一言でいえば。(中略)いや向こうはぜんぜん悪くないんです。ただ、あの一、言葉的に人を傷付けることってあるじゃないですか。捕らえ方ですよ。ふふふ。〈笑〉

Fさん: 今Gちゃんの話聞いてると、中学校の時自分が、人とけんかしたりしてたのも、たぶん言葉が、なんというか、すごく単純な言葉しか知らないから、(中略)今だったら、いろんな返し方が、軟らかい返し方もあるんですけど、その時はその言葉一個しか知らないから、まあ結局それで、まあ、トラブルになったりしてたと思います。

AさんやBさんが述べているように、このような問題は、「ことば」だけを切り離して、

すなわち学校などでテキストを使って言葉を学ぶような方法では、決して解決されないものである。また、Dさんのように、家族間で「ことば」の摩擦が生じると、それはより一層大きな傷となって残ることになる。

Aさんはサッカーを通して友達ができることで、Bさんはどこに行くにも連れて歩いてくれる友達と漫画を読んだり歌を聞いたりすることで、「ことば」の問題が解消されていったことを語っているし、Eさんも「話の合う友達」や「本当の友達」ができることで、失いかけた目標を取り戻して学びに向かっている。

このことを考えれば、「ことば」を身につけることによって、他者との関係が結ばれていくのではなく、他者との関係がきりむすばれることによって初めて、「ことば」をめぐる問題が解消されていくのだと言える。Cさんも、子どもを連れて行ってお母さん同士友達がたくさんできた「公園」が、いちばんの学び場だったと語っている。

「他者との関係」が結ばれるということは、その人がその存在を認められる「居場所」ができることであるとも言えるだろう。Cさんの「公園」がそうであり、Gさんが入った中国人学生の多い高校もそうだ。Gさんの例からは、日本社会にいるからといって、必ずしもそのマジョリティグループで人間関係や居場所を作らなければならないということではなく、「孤独」を感じない居場所を確保することが重要であるということが示唆される。また、Fさんは、機械という自分の興味から車関係のエンジニアになるという目標を持つことで学びに向かっていた。「居場所」は人間関係の中だけでなく、夢中になり没頭できる「目標」の中にも見出すことができるのである。

3.9.2. アイデンティティの形成と変化、自己肯定

アイデンティティの確立していない頃に来日した人の中には、自分を傷つけないようにするために、「バリア」を張ったり「日本用の自分」を作ったりしたという例が見られた。

Gさん: 自分の気持ちを抑えつつ、回避するようになりました。そういう発言で、起こした問題は、もう多々ありましたから、自分の発言を注意することっていうのはもう、本当に中学になってからなんですけど、もうその時からずっと心かけて、(中略)もうバリアを張ってます。今でも、友達に言われます。

Eさん: 自分はその日本に合わせようと思って、思いすぎたせいか、いつの間にか自分は日本人になろうとしていたっていうか、こう、意識していなくても、なんかちょっと無意識的に、なんて言うんですかその、自分の身を守るため？こういう、外国人的な要素を出すと、絶対なんかこう、傷つくから、それをやっぱり傷つくとかいやな思いをしないために？なんて言うんですかね、新しい自分、日本用の自分、作っていったんですけど。

しかし、居場所ができ、人間関係や生活世界が広がっていく中で、アイデンティティも

変化し、現時点でその変化の過程を振り返り、自分の言葉で語れるようになっていく。そして、かれらに共通するのは、現在の自分自身を肯定的に語っているということである。

Gさん: 昔は自分の中では、私は中国人なんだって。中国の全てが、素晴らしいんだってというふうに、もちろん今も、愛国心はあるんですが、いろんなことを経験して、いろんなことを見ると、自分の視野から物事を見ると、やっぱり、これは違うんだなっていうふうに。まあでも、影響はありますね。周りの日本人からとか、たくさん意見を聞くと、自分の考え方も影響されますし、まあでもそれは悪いことじゃないと思います。影響されるぶんだけ自分は、他人の意見に耳を傾ける証拠なんだって、思って。

Eさん: 僕はですね、ペルー人です。ペルー人ですけどー、100%、なんか生粋のペルー人っていう訳でもないし、別に、そんなんじゃないでもいいんじゃないと、思うようになってきたし、別に今僕が持っているアイデンティティは一つではないと思っていますね。(中略)今は自分は、まあいくら頑張ろうとも、日本人になれないし、だからといって、生粋のペルー人とは何だと。(笑)混血事情も複雑だしあそこ。ですからまあ、別に、何人とかっていうふうに拘る必要はないと思いますね。そういう、逆に多様な背景を持つてるほうが何かと、自分の役に立っていると思いますし、今までこのことの支えにもなってきましたし、これからのやりたいことにも、繋げて行きたいなどは思っていますし。

Fさん: (就職活動の)面接の時に自分が、一番アピールしたい自分の良いところ、僕が言ったのは、逆境にあったときに、自分が今まで経験してきたので、これからも、絶対くじけることなく、それをうまく乗り越えていける自信はありますよ、というのはアピールしました。

Aさん: やっぱり、貿易会社なってるんで、海外の人たちと話す？その時にやっぱり、なまり？英語話せなくてなまってる？名前も違うし、だから名前見て、「あー、ちなみに日本人」？て。「あー実は、ま血筋はそうだけど、国籍違うよ」と。「あそうなんだー。でどこ？」って、「ペルーです」って、そこからまた、話が広がったりとかするし。だから、自分で、その、外国籍であるっていうのは、あの、別に恥って思ったわけでもないし、逆に言うと人とのきっかけでもあるってのはある。

3.9.3. 前向きな姿勢と、描く将来像

壮年期にあるA、B、Cさんに共通しているのが、あらゆることが自分のためになる経験と捉えて前向きに取り組もうとする姿勢であり、何をするにもまず楽しもうと考えていることである。そのように考えて生きてきたからこそ現在のかれらがあるとも言えるだろうし、かれらがライフコースの中で居場所を見つけ、地域に根ざして生きてきたからこそ、前向きな姿勢が生まれているとも言えるだろう。

Aさん: 苦労したっていうのが、よくあるけども、自分にとっては苦労するのはチャンスだと思ってる。何のチャンスかと言うと、苦労するっていうのは、自分磨けるチャンスでもある。(後略)
よく言われるのはなぜそんな事をいっぱいするの？って言われた時に、毎日わくわくしたいからだよと言う。(中略) 楽しまない活動っていうのは、絶対続かないし、おもしろくとも何ともない。(笑)

Bさん: アメリカのサマースクールっぽく？泊まりはしないけれども、そういう仕事ができたらなと、思ったことはあるの。うんげひしたいの。(中略) あえて何かについて勉強するのではなく、うん。もちろん、全く何もなしじゃいけないんだよ。例えば午前中はちょっと、皆さん夏休みの宿題をやらうと。午後はまあ、今日は、アメリカの歌練習とか。ひとつ習おうと。明日は、中国の料理餃子作ろうと。一日一個ぐらいで、いいわけよね。で皆がそこに一緒にいること自体が有意義であって。(中略) ずーっとだからいろんなね、(企画を考えている。) まあ結局私は、遊びが大好きだからこそ。(笑)

Cさん: 楽しくやるとか私、頭の中にかけて、したいんで、だから、ほんとに一、ほかにはなんか悩んでる、クヨクヨ悩むはしないんですけど、(頼まれたら) ひきうけます。そういう態勢ですね。

すでに家族や生活基盤が安定しているかれらのまなざしは、次世代を担う子どもたちに向かっている。Aさんは地元に住む子どもたちへの学ぶ機会の提供と、発展途上国の支援を考え、Bさんは子どもや若者に異文化理解の機会を提供し、啓発していくことが最も楽しいと感じ、Cさんはいろいろな国のお母さんと子どもたちが触れ合える場をつくることを目指している。

また、青年期にある4人の中でも、Eさんは大学の先生になって、外国にルーツを持つ子どもたちをサポートするシステムづくりをしたいと考えており、Gさんも自らの経験を生かして外国から来る子どもたちに接していくことを将来の選択肢のひとつとして考えている。

これまでの経験と、現在の支援活動から、未来に向けて伝えていきたいこと、作っていききたいものがかれらの中に生まれ、存在しているのだ。

3.9.4. まとめ

かれらのライフコースの歩みから、他者との関係が構築され、「居場所」ができることや「目標」が設定されることが、「ことば」の問題を乗り越えたり、自主的な「学び」に向かっていくのに重要であることがわかる。このことは、眼前の「日本語学習」(子どもの場合には「教科学習」も) だけにとらわれがちな、現在の支援のあり方に一石を投じるものであり、「ライフコース」の中でその人の「学び」をとらえていくことの重要性を示唆するもの

である。

また、かれらのアイデンティティも、日本で生活し、他者との関係や生活世界が広がって行く中で形成され、変化してきたものであり、現在支援活動をおこなっているかれらのそれは、肯定的なものとなっている。もちろん、このアイデンティティは、これからもかれらのライフコースの中で、絶えず更新されていくだろう。

そして、自らが渡日を経験し、また現在支援活動をおこなうことで、伝えたいこと、作りたいものが生まれ、それが子どもたちと関わっていく自らの将来像にもなり、またそれによって作られる地域社会の将来像にもつながっているの姿が見てとれた。

4. 外国人支援者が語る支援活動の意義

本章では、支援活動についての語りから共通のテーマを見出し、外国人支援者が考える支援活動の意義を明らかにする。

4.1. 支援活動の目的と意義

N国際交流センターで子どもの支援をおこなっている4名は、自らが携わる支援活動の目的を、母語学習や日本語・教科学習支援そのものというよりも、少数点在型のN地域において、外国にルーツのある子どもたちが仲間と居場所を見つけることにあると考えている。そして、子どもたちが自らのルーツを知り、それに誇りをもつことで、自信につながっていきたいという。

Eさん:ここは少数点在地域なので、あの一子どもがね、孤独を感じたりとか、実際僕もそういう体験をしたので、まあここに来て、自分は1人じゃないと、同じような背景を持つてる人もいる、じゃあそれをなんかその、彼らの自信に繋げて行こうと思って。スペイン語を教えるのは目的ではないんですよ。

Fさん:子どもたちが、このせっかく中国にルーツを持つてるので、それを大事にしてほしいし、さらにそれを生かして、将来、彼らにとって何かプラス、のことになれば、いいなと思ってます。センターで出会った子どもたちも、それ(自分の母親が他の母親と違うこと)ですごく自信を失って、(中略)でも、ここの活動に参加することによって、同じ立場の子ども達がここで会うことによって、こう自分だけじゃないというのが、子供たち同士で、わかりあえるというか、それは子どもにとって、すごく大事な時間だと思います。

Gさん:彼ら同じような人が集まると、絆が深まると、自分は一人じゃないんだ一っという、孤独を感じないと思うんです。私が(中略)中国人がいる高校に逃げ込んだような状況で、そこから立ちなおる?そこから再スタート、私は遅かったです。彼らは、わりと早く、ここに来ることによって、すぐスタートを、始めれるんじゃないかな一っ。

Hさん:ここがその、外国の子どもたちの居場所になってるのはなんでやろうな。なんでみんな来んねやろなと思って。最初は何か勉強するとか言うから、絶対いややんみたいな。でもみんな結構、勉強いやいや言いながらも、何かちゃっかりしてるし、ちゃんとしてるし。で、遊んでたりしてるし、何か、第2の家庭、めっちゃアットホームで、で一何かこう、みんな、何かしらでもやっぱ、外国人やから、いろいろ、傷ついてる?悩み抱えてたりすんねんなと思って、それで、何か、俺もちょっとなんかこう、ここで、癒しじゃないけど、話し聞いてあげたりぐらいはできるかなと思って。

フィリピンの人たちが一緒に学ぶ場をつくっているDさんも、同じような境遇の人たち

が集まることにより、先に来た人の経験を伝え、そこから学んだことを皆で共有していくことの大切さを語っている。

Dさん: 私たち日本人と結婚してたけども、言葉がほとんど分からないから喧嘩の原因ですよ。やっぱり、夫と言葉が分からないと、私たちも色々な考えで、自分の考えで、喧嘩なったり。うん。子どもにも、お母さん何言ってる？さっぱり分からないと言われるとかー、うん。それで私たちほかに新しい結婚する人のフィリピン人も、ならないように？だから少しでも皆勉強した方がいいんじゃないかなーって思って。(後略)

どうしてもフィリピン人がみんな悪いんじゃないだけ、それがね。結構悪い人もありますけど、でもみんなじゃないから。(中略)フィリピン人の方も、さっき言ったようにみんな勉強してくれれば、時間、約束とか、習慣もちゃんと勉強して。多分、日本人の方も私たち見られるのが、高くなると思うけど。だからそれは今、グループ“M”が一生懸命みんな、引っ張りたいたいですよね、なるべくみんながそれが見られないように、頑張ろうって。

子どもの支援にも携わるAさんは、子ども自身が描く将来像と、そこから学びたいことを自分で選び取っていく自律性を尊重していくことを重視している。

Aさん: 生徒が、どういう事を学びたいかっていうのがもっとラフに考える？いつものどこの教室って行くと、けっこう教科書をメインにしてやると、その時期行かなかつたら、この本が、どこにいるか分からない。そういうのがないみたいで、であれば、その生徒自身が何を覚えたいかっていう。だから自律性？自分が何を覚えたい、何をどういうふうに活躍したいっていうのが、その確認をして、そこで教えてあげる？

[筆者: あー。じゃ毎回、その子達が自分でやりたい物を持って来る、っていう感じですか？]

Aさん: そうでうすね。だから、大体、みんな(他の教室)は、「日本語基礎」とか、「新日本語の基礎」っていうのは、自分たちでこうやって目で見えて、どこを勉強したいっていうのが、効率的？ま、大人の考えですよ。(笑)

4.2. 自分が支援活動をおこなうことの意義

かれらは、学びに来ている人と同じ経験を共有・理解でき、自らの経験からアドバイスをすることもできることに自身の存在意義を感じている。そして大学(院)生や社会人となって地域社会で生活基盤を築いて暮らしている自分の姿を、モデルとして見せることができると考えている。

Aさん: やっぱり、みんなは、実体験を話してあげると、あーそうなんだ、そうなんだねーとか。やっぱりみんな、みんなも、同じような体験してるわけ。場所は別にして。似たような体験してるから、そうなんだ、この間こういうあったんだよーとか。で、僕はどんどんそういう話をひろいあげてくる。逆に言うと、あ、こういうとこで困ってるんだ、じゃみんな、こういうことを知りたがってるんだな

と。(中略)Aは(日本に)18年いるんだけど、そういう経験あるんだっていう。で自分がまだ1年しかないんじゃない、あーそうか、じゃまだそういう体験がこれからあるのかなーとかっていうのを向こう(話を聞いた人)がもっと、そういうなんだろう、もっと気軽に見てくれる？

Dさん:若い人たちなんか、相談？お姉さん、今旦那と喧嘩したどうした方がいい？ってとか、もう、学校の問題があるからどうした方がいい？とか。やっぱりそれで、私たちの経験が今までであるから、それでアドバイス、できてますよね。

Fさん:午後(日本語・学習活動)に来てる子供たちは、日本生まれの子よりも、途中から、最近日本に来た子供たちが多くて、中国語よりも日本語を、勉強しないといけないという課題がありますね。今日も実際、あの僕とずっと、午後話してた高校生ですけど、これから大学受験、(中略)どういう学校があるか、受験のシステムとか、大学生活について色々、相談を受けてました。

[筆者:やっぱり、午後に来る子どもたちのほうが、なんというか、状況としては大変？]

Fさん:そうですね。自分もあの、同じような経験を、してきましたので、すごく気持ちは分かりますね。

Gさん:(自分の時は)アドバイスをくれる人いなかったからね、余計に。自分も彼らの今、苦悩する気持ちがすごくわかるっていうか。

Hさん:(相手の子どもが)中国語じゃなくても、やっぱりその、同じ外国から来たっていうことで、俺もこんなやっただみみたいな感じで、でその子がこう、ちょっと、日本に来て不安なこととかも、ちょっと軽くなるんじゃないかなとか思ったりもするし、ま、一応大学行ってるから、こう、その子どもも、じゃ、勉強とかしたら、日本でも大学行けるかなーとか、思って、まあこう見本になる、手本になるように。それが僕のいる意味。そう思います。

また、外国籍住民に対してだけでなく、一緒に支援活動をおこなっている日本人に伝えていくことも、自分の役割として重要であると考えている。

Cさん:(日本語教室の)運営委員になって、(事業等が)終わったの感想とかなんか発言する、お話の場所、それが意味があります。(中略)他の違う視点からいい刺激と、私思うんです。私自身もとって、もちろん、全部の会にとって、なるでしょうか。

[筆者:うんうんうん。思います。]

Cさん:これは重要です。例えば、力なくでも、ただ、特に何も意見、意見というか、特にいい提言なくても、私いま見たのは、感じたのは、すごい素直の気持ちで伝えれば、いい刺激になると思っています。

さらに、3章でも見たように、自身の経験をもとに、次世代に向けて、子どもや若者た

ちを育てたいという気持ちも強く持っている。国籍を問わず、全ての子どもたちに向けて伝えたいことがあり、それによって未来が少しでも良くなるのではないかと考えている。

Aさん:世の中作りあげたの誰かと言ったら大人の人たち。そのもし、その世の中をよくするっていうことになれば、これから生きる子供たちかな。だから自分は、頑張ればいいし、それと同時に次の世代の人たちも、そういう世の中変えるような何か、というのはしてあげたい。

Bさん:結局大学一年って私にとって次の世代でしょう？子どもたちにはね、こういうことを誤解したままで、こう生きてほしくないってところだけポイントを取り出して今一生懸命(授業で)喋ってるのね。(中略)いちばんしたいのはそこにある。おばあちゃんの知恵？っていうわけじゃないけれども、ね、やっぱり、それだけの年数があるからその知恵が産まれたっていうのを、これは非常に素晴らしいことっていうことを子どもたちにはね、うーん。私の食べた塩があなたの食べた米より多いわよって。ね？(笑)だからそういうようなのを、次の世代に、お説教じゃなくて、硬い授業の中ではなくて、もう自然体で。

Cさん:もうちょっと(自分の)子供が大きくなったら、こういうようないろいろ国の子供たち(が集うような場)ですね、これ、実現したいです。(後略)

やっぱり子どもから、まあ小学校中学校のね、(中略)子供中心で、やっていきたいと思うんですね。(中略)自分の発想を、自由な発想ですね、大事にしたいです。(後略)

あとは、たのしみですね。あと十年後とかですね、外国人も増えてて、その、いい方向へ、あの、方向へ進んでね、そう私はそう理解してますですね。

Gさん:ここのセンターに来てから、教育に対する？ことを、最近、自分に、(笑)問いを、投げかけたりとか？なんであの時はあの先生は、こんなふうしてくれなかったんだっていうのを、しみじみ？ふふ。(笑)最近、体験と共に、こう脳内で、繰り返し繰り返し、疑問に思ったりとか、私ならこんなふうになりたいという。まあこれから日本に、外国人が増えるってことは、皆さんも、知ってると思うし、私もそれを、ちょっと自分の経験を生かせたらいいな一っていうふうで、思っています。

4.3. 自分にとっての意義

かれらがおこなっている活動は、かれら自身にとっても学ぶことができる場であり、心を開くことができる「居場所」である。

Aさん:ボランティアの中にも、やっぱり元学校の先生とかもいるし、うちにいる、子ども、今まで面倒みてたから、じゃ、違う子どもの面倒みようかという。だからもうみんな、元々主婦の、集まりだったようなんですよ。だからすごくやっぱり、接し方はうまいっていうのは、いつも思う。だから私自身も、いつも勉強させられる、ばっかし？

Gさん: (この活動は)バイトっていうよりも、私が、勉強できる場所なんです。はい。他のバイトで稼ぐ人よりも私のほうが、たぶん、ぜんぜん儲かってると思います。〈笑〉(中略)本当もう元気をもらう場所だし、本当に良かったな—って、楽しく、毎週が楽しみで楽しみで、(中略)プレッシャーありつつ、自分を成長させるにはいい場所だと、思ってます。(後略)

同じような境遇にあった子が来ると、あまり話したがらないから、(中略)彼らを見てると、すごくんか、自分が当時そうだったな—とか、でももし、心開いていればってということ最近思っ。なので、(自分もここで)心を開くようになった。

Hさん: 色んな人と接するチャンスが、多いじゃないですか。交流センターだし。だからそれは自分にとってもいいことかなと思って。ここが自分の居場所になれるねと思って。

[筆者: Mさんにとっても居場所? っていうこと。]

Hさん: はい、そうですね。第2の家みたいな。何か、ここに来たらこうなんか、落ちつけるし、自然な自分出せるし、それは多分ボランティアする側もされる側も、にとってもその、それを皆で体験できたらいいかなと思って。

新しく来日した人(子ども)と接することで、常に過去の自分と対峙することになるが、それも自らの糧としている。

Cさん: 今までサロンやって、私は相談にのれるほどではない。むしろ自分の傷を回復、改修、むしろ自分の傷を治すですね。人の悩みを聞いて、私もありますよと。うん。

Fさん: 人間はたぶん、一つの、まあそういう、苦しい状況を乗り越えて、すごくほっとして、時間が経つと、前に苦しかったこと忘れてりするんですけど、でもここに来ることによって、常に過去の自分が境遇、経験してたことを、今経験してる子どもに出会えるので、過去自分が、困難を乗り越えた時の気持ちを、もう一度、思い出させてくれます。それがすごくまあ、大学の三年間、大学で勉強する原動力になったし、夢に向かって頑張る原動力にもなりました。

[筆者: うーん。それでも自分でこう、つらいとは思わないですか? その自分が苦しかったことを、こう、毎回、思い出さないといけないというのは、]

Fさん: あー、それは、今はないです。逆に今振り返ってみれば、それを乗り越えること出来たから、今、自分が強くなれたと思えるようになりました。

4.4. まとめ

かれらが支援活動の意義としてまず挙げていたのは、地域社会で暮らす外国人(あるいは外国にルーツを持つ人・子ども)が、同じような背景を持つ仲間を見つけ、みんなで学

びあっていこうとする「居場所」になるということである。これは、3章に挙げたかれらのライフストーリーの中で、かれら自身が必要とし、それを得ることで前に進んでいくことができたものだった。また、Aさんの重要視する子ども自身が覚えたいものを選ぶという自律性も、Aさん自身が、「教科書」の日本語では意味がなく、それを捨てて自ら友達を作るためのことばを身につけていったことが影響しているだろう。

当事者であったかれらが支援活動に関わることの意義としては、やはり同じ経験を共有できるという点が大きい。共感することで相手の気持ちを楽にしたり、経験からアドバイスをしたりすることができる。そして、学びに来ている人たちは、かれらの姿を、これから地域社会で生きていく自分の「ロールモデル」として見るのであり、さら

に、当事者であった経験は、多数派側である日本人にも伝えていくことが重要であり、さらに、次世代を担う子どもたちが、国籍を問わず、多様な文化を受け入れながら生きていけるように育てていくことで、より良い地域社会が作られるであろう。

そして、「当事者であった」かれらは、ある面では「当事者であり続けている」とも言え、活動を通して自らも学び、自らを開き、過去の自分自身と対峙し続けているのである。

外国人支援者が自らの経験をもとに、支援活動で何を重視するかは、支援活動のあり方を考える上で非常に重要である。眼前の状況を打開するために「教科書を使って、効率よく」という活動のあり方を振りかえり、「仲間」「居場所」「自律性」といったキーワードに注目していく必要があると考える。そして、外国人支援者はそこに「存在」することだけでも十分に「ロールモデル」としての意義を持つ。かれらのような外国人支援者がもっと増え、日本語母語話者支援者と共に活動を作っていくことが重要であろう。

5. 外国人支援者による支援活動の実際

本章では、AさんとBさんによる実際の支援活動を分析し、その特徴と意義を探る。

5.1. Aさんの活動

5.1.1. 活動の概要

Aさんが活動する「Jこども日本語クラブ」は、大人対象の「J日本語教室」と同じ場所で開催されており、調査当日は、「J日本語教室」のほうのボランティアが少なかったため、Aさんは、成人のスペイン語圏出身者であるXさん、Yさん、Zさんとの学習活動をおこなっていた。学習者3名にも許可を得た上で、約75分の学習活動を録音・録画した。

5.1.2. 分析方法

1) 学習活動の構成

青木他(2004)の分類を参考に、学習活動の分類をおこない、全体構成を明らかにした。

まず、学習活動全体を、学習目標となる言語項目または話題をもとに、分割した。ひとつの主たる項目が、複数の学習目標や話題に発展することもあった。「学習目標」と「話題」の種類は、以下のように分類した。

学習目標：語彙，発音，表記，文型・文法，談話，社会言語学的知識， コミュニケーションストラテジー

話題：学習方法に関する話題，学習者の日本語に関する自己認識，文化的話題

次に、分割したそれぞれの項目について、ベースとなる言語が日本語・スペイン語のどちらであるかと、その項目を開始したのが誰かを見た。

以上の観点から、学習活動の全体的な特徴を明らかにする。

2) 特徴の抽出とカテゴリー分け

談話資料を詳細に観察し、外国人支援者による活動として特徴的な部分を抽出した上で、それらをカテゴリーに分けて分析した。また、分析結果の考察にあたっては、インタビューにおいてAさんが語った内容も参照し、その意図や意義を明らかにすることとした。

5.1.3. 分析1：活動の構成

75分間の活動の、項目とその学習目標や話題の種類、ベース言語、開始者を時間の順に並べると、以下の表のようになる。

項目同士の関連性が高いもの、また入れ子構造になっているものについては、点線で区

切っている。また、学習目標と話題の種類は、出現順である。

時間	ベース言語	開始者	項目	学習目標	話題
00:00	日	Aさん	テキストの例文「わかりますか」	語彙	
01:50	日	Aさん	テキストの会話『カメラ屋で』 -ロールプレイ	談話	
05:33	日	Aさん	-「もうちょっと」と「もうすこし」	語彙	
06:17	日⇒西	Aさん	-「のが」と「のは」	文型・文法	
07:04	西	Zさん	-「すこし」と「ちょっと」	語彙	
07:42	日	Aさん	-安い「もの」	文型・文法 談話	
08:44	日⇒西	Aさん	-「すみません」「申し訳ありませんが」	語彙 社言的知識	
11:52	西	Zさん	-返答の仕方	談話	
12:28	西	Aさん	-「申す」と「おっしゃる」	語彙 社言的知識	
13:33	西	Aさん	「です」「ます」を加える	コミュニケーション方略	文化的話題
16:18	西	Yさん	文末の「よ」	社言的知識	
17:09	西	Aさん	フォーマルとインフォーマル	社言的知識 コミュニケーション方略	自己認識 文化的話題
19:59	西	Xさん	「くれる」	語彙 社言的知識 表記	
20:50	西	Xさん	最近一緒に活動する日本人ボランティアと文字学習		学習方法 自己認識
22:33	西	Aさん	テキストの練習・動詞の活用 辞書形⇒ます形へのルール	文型・文法	学習方法
31:28	西⇒日	Aさん	話しながら学ぶのが良い		学習方法 自己認識
34:07	西	Xさん	「買う」と「飼う」	語彙	
35:17	西	Zさん	「愛」と「会い(ます)」	語彙 文型・文法	
36:17	西	Yさん	Aさんとスペイン語で学習すること		学習方法 自己認識
37:31	西	Yさん	「言って」と「行って」	語彙 発音 コミュニケーション方略	文化的話題
39:56	西	Xさん	「きく」(「聞く」と「質問する」) ⇒「きいて」(て形)	語彙 発音 文型・文法	
43:05	西	Aさん	「聞いて」と「来て」	発音 コミュニケーション方略	自己認識
45:05	西	Xさん	人に時間が空いているか尋ねる方法	談話 語彙 文型・文法 コミュニケーション方略	

48:24	西	Aさん	文末に「か」を加えると勧誘になる	談話	
49:10	西	Aさん	文末の「よ」	社言的知識	自己認識
51:36	西	Aさん	まず「ます」の使い方を覚える 尊敬語は後で	社言的知識	学習方法
52:55	西	Aさん	「めし」	語彙 社言的知識	
55:25	西	Aさん	尊敬語も一緒に覚えようとする と混乱する まずは「です」「ます」「ください」	コミュニケーション方略	学習方法 文化的話題
58:28	西	Yさん	「こちらこそ」 「お世話になりました」	語彙 談話 社言的知識	
61:50	西	Xさん	「おさきにー」と、その返答	語彙 談話 社言的知識	
63:15	西	Aさん	「おつかれさま」と「ごくろうさま」	社言的知識 語彙 コミュニケーション方略	文化的話題
67:38	西	Yさん	「ごきげんよう」	語彙 談話 社言的知識	
68:45	西	Aさん	「体調はいかがですか」	語彙 表記	
70:33	西	Aさん	「最近どう？」	語彙 社言的知識 コミュニケーション方略	
72:37	西	Xさん	「がんばって」と”gambateando”	語彙 社言的知識	文化的話題
73:50	西	Zさん	「うち」	語彙 社言的知識	

1) ベース言語

活動開始時に、Aさんが日本語で話すほうがいいかと3人に確認し、「はい」という返事が得られたため、日本語で活動をスタートした。しかしまもなく、Aさんの説明が理解できなかったZさんの「no entiendo (わかりません)」という発話をきっかけに、スペイン語が使用されるようになった。一旦は日本語に戻ったが、その後、活動の大半はスペイン語をベースに展開された。

2) 開始者

全36項目のうち、Aさんが開始したものが20、学習者が開始したものが16(Xさん7、Yさん5、Zさん4)であった。

青木他(2004)では、日本人ボランティアと外国人学習者のペアまたはグループ11の学習活動を調査しており、学習活動の総数211のうち、学習者が開始したものは34(約16%)であった。

それと比較して、今回学習者が開始したものが約 44%を占めているのは、共通の母語が使用できる点が要因として大きいと考えられる。

さらに、関連した項目をまとめてひとつの項目として考えた場合（上の表の実線で区切った場合）、18 項目のうち 11（約 61%）を学習者が開始しており、Aさんは関連した項目を提示することも多いのに対し、学習者が積極的に新しい項目を提示していることがわかる。

3) 学習目標と話題

活動開始時は、Aさんがテキストをもとに進めていたが、その内容に関連して、あるいはそこから思い出して、学習者が疑問に思っていた言葉の使い方をどんどん質問していくようになった。したがって、学習目標としては「語彙」や「談話」が多かったが、学習者の質問には、「この表現は上司に対して使えるのか」といったような「社会言語学的知識」を求めるものも多かった。

Aさんが開始する項目としては、学習者が知っておいたほうが良いと考える「語彙」やその使い分けなどの「社会言語学的知識」のほか、自分自身が経験者として、日本人とコミュニケーションを取る際の「ストラテジー」をアドバイスする箇所も多く見られた。

また、特定の学習目標がない箇所の話題としては、Aさんが学習者に「学習方法」のアドバイスをおこなったり、学習者が現在の自分自身の日本語に関する「自己認識」を話して、互いに学習方法やコミュニケーションストラテジーを話し合ったりすることが多かった。また、普段の言語使用から、日本社会における対人関係のあり方など、「文化的話題」に発展した例も多く見られた。

5.1.4. 分析 2：外国人支援者による母語を介した活動の特徴

データを詳細に観察し、外国人支援者による母語を介した活動として、特徴的な部分を抽出したところ、5つのカテゴリーに分類された。以下に、実際の事例と共に挙げる。

1) 詳細な説明

学習者と共通の母語を用いるため、非常に詳細な説明が可能となる。また、単にスペイン語を用いることができるからだけではなく、学習者として日本社会の言語使用を分析的に捉えることができているからこそ、意識化していない日本語母語話者以上に詳細な説明ができると考えられる。

【例1:「こちらこそ」の説明】

Yさん	y el こちらこそ	“こちらこそ”は？
Aさん	こちらこそ es este cuando a uno le dicen algo el こちらこそ es yo こちら es yo こちらこそありがとうございます el こちらこそ significa, mayormente el	相手に何か言われる時“こちらこそ”と言うときの、“こちら”は私の事を指しています。“こちらこそありがとうございます”、

	こちらこそ lo utilizan es este sobre todo cuando das las gracias あーすいませんありがとうございました, ああこちらこそありがとうございました es no solamente usted tambien yo estoy agradecido	“こちらこそ”の意味は、特にありがとうと言う時使います。“あーすいませんありがとうございました”, “ああこちらこそありがとうございました”, “あなただけじゃなくて私も感謝します。
Yさん	cuando uno habla por telefono a veces te dicen こちらこそ	電話で話している時に“こちらこそ”と言う時もあります
Aさん	ああこちらこそ y ああこちらこそ despues de eso viene ありがとうございます mayormente cuando es agradecimiento o por ejemplo mandar saludos よろしくおねがいします, あ, こちらこそよろしくおねがいします o sea que te tengan en cuenta a uno mismo y eso tambien es una forma elegante de hablar y el japones siente muy bonito cuando le dicen eso es mayormente cuando uno es saludo y cuando es agradecimiento y mayormente es después despues de que la otra persona hablo no	“ああ, こちらこそ”, “ああ, こちらこそ”, その後は“ありがとうございます”, お礼と挨拶の時に特に使う。例えば“よろしくおねがいします”, “あ, こちらこそよろしくおねがいします”, 自分の事もあらわすしエレガントな言い方, 日本人に言うと, 彼らがいい気持ちになります。お礼の時, 挨拶の時, これは相手が先に話した時に言います。

【例2:「うち」の説明】

Zさん	despues este los japoneses usan mucho cuando te hablan para hacer un trabajo no te dicen うち	他の事ですが、日本人は仕事を頼む時に“うち”と言います
Aさん	あーうち, うち, うちは うちは es yo うち	“あ, うち, うち”。“うちは”私という意味です
Zさん	Ah y yo digo pues cuando me hablan con うち yo digo que su casa (Aさん:Ah) creo que no porque unos lo entienden como su casa	“うち”と聞くと彼らの家かなと思うけどちがいますね
Xさん	si うちの, うちのおとうさん	
Aさん	por ejemplo es todo lo que es de uno うち es dentro dentro de mi (笑)(Xさん:ya) (Zさん:Ah) por ejemplo si es que hablan de la compañía うちら es うちら o si estamos hablando por ejemplo de la compañía うちは, こういうかんがえです, うち は significa todo lo que esta alrededor de el.	たとえば“うち”は自分のものを全て, “うち”は中, 私の中でも, 会社のことを話すと“うちら”は, 話しているときは例えば“うちはこういう考えです”, “うちは”の意味は, 彼の周りの全ての物です

2) 学習者の言語使用環境に合った説明・提示

Aさん自身が学習経験者であるため、学習者の現在の言語使用環境を理解・予測することができ、それに合った説明や提示をおこなっている。

【例3:「くれる」の用法を限定した説明】

Xさん	En la palabra くれる	“くれる”という言葉は?
Aさん	mh mh	ええ
Xさん	en que circunstancias se utiliza ese	どんな時に使える?
Aさん	くれる es dame dame en la palabra くれる cual es la palabra formal es ください	“くれる”は与えて, 与えて。“くれる”のフォーマルな言葉は“ください”です。
Xさん	Ahhh ya este es el formal ください no?	そうですか。フォーマルは“ください”ですね?

この例では、学習者が「くれる」の意味を尋ねただけで、Aさんが学習者の言語環境を

予測し、「～してくれる？」の用法に限ってシンプルに説明している。

【例4:辞書形から「ます」形の提示】

Aさん	esto de aca porque es estas conjugaciones esta parte de aca que dice ます , es la forma que les dije que le cambia la forma de como uno puede hablar, lo que cambia es que le cambia en medio y los restos de aca le agrega nomas	この部分は、“ます”の形で、書いてある、ここにある部分は、話す時の活用の表です。どのように活用するかは、中の部分が活用するとか、これらの部分は何か追加をしないとイケないとかです。
Zさん	solo lo que hay que saber uno es saber cambiar no?	どのように活用するかが分かったら良いですね。
Aさん	Saber cambiar	活用が出来れば。
Zさん	La terminación del verbo だす por ejemplo el ultimo la す	たとえば、“だす”という動詞は“す”の部分
Aさん	claro	そうです。
Xさん	y para cambiar los verbos hay una regla	動詞を変化させるには、規則がありますか？
Aさん	Si	はい。
Xさん	O solamente en este caso cambiar la う por la い	この場合は“う”の代わりに“い”になる
Aさん	no en este caso en este caso (中略)	この場合、
Aさん	よぶ, mayormente cuando el verbo va a entrar con el ます siempre todo el verbo cambia en い cambia de la misma regla a い	普通は、“ます”を付けると、“い”行の所に変化します。
Xさん	Por lo general o es todos	普通は、または全部？
Aさん	Por lo general creo que es porque のむ , のみ [ます	普通です。“飲む”は“飲みます”
Xさん	[のみます	

この時に見ていた教科書には、ます形とて形の表しか載っていなかった。しかし、学習者がよく耳にし、また使用しているのが辞書形であり、学習者からもそれがわかる発言があったため、辞書形からます形に変えるルールを確認している。

3) 学習者からの「適切さ」に関する質問

学習者からは、実際使用の環境（特に職場）において、特定の表現を用いるのが適切であるかどうかを問う質問が多く見られた。母語を用いることができる機会に、実際使用におけるより細かな使い分けを明確に理解したいと考えるのであろう。

【例5:文末の「よ】】

Aさん	aumentandole la か es y por ejemplo para que se sienta un poquito mas suave la palabra le ponen よ , かきますよ , あこれかきますか , うん , かきますよ	“か”を加える、そしてソフトになるには“よ”を加える、“書きますよ”、“あこれ書きますか”、“うん、書きますよ”
Xさん	Pero aumentandole la よ — no quiere decir que uno este	“よ”加えても失礼ではないですか？

Aさん	Faltando al respeto no (Xさん: Ah ya) le esta suavizando la forma de decir (中略) Aunque de verdad depende de la forma (Zさん: Si) uno como habla le suaviza la forma de hablar, es por eso que cuando uno se acostumbra a poner el yo el yo cuando uno puede decirlo es cuando habla con la palabra informal ああいまかいたよ suena mas suave que decir mmh うんいまかいた	いいえ、失礼ではありません、ソフトな言い方だけです。 (中略) でも人の言い方によります。“よ”を加えるとソフトになるし、インフォーマルな言葉を使うと、“ああ今書いたよ”、“うん今書いた”より良いです
Xさん	suena mas suave que decir este かきますよ	“書きますよ”よりソフトですか
Aさん	かきますよ es este no かきますよ suena mas formal	“書きますよ”はていねいです。
Xさん	ah mas elegante	あ、エレガントですか
Aさん	un poquito mas elegante suave	エレガントそしてソフト
Xさん	Ya ah	はい
Aさん	porque hay varias veces que uno esta con un señor y me esta diciendo いまいそがしいのに、ああわかったよ、かきますよ (Xさん: ah ya) asi es el tono かきますよ porque a veces a la otra persona le da mas un no hay problema el lo va a hacer	何回も男の人は、“今忙しいのに。ああ分かったよ、書きますよ”と言います。“書きますよ”とはっきり言うと、相手は安心します。この人はやってくれると思います。
Xさん	Ya	ええ
Zさん	pero a un jefe responderle asi seria el se como que se pondria no	でも上司にも言えますか、怒りますか。
Aさん	claro por eso es que le dices ああいまかきますよ sea le das la suavidad a la palabra para esa persona pero no le estas faltando al respeto	“ああ今書きますよ”と言えば失礼ではないソフトです
Xさん	ah ya eso queria saber	あ、それを知りたかった

この例で、Xさんは文末に「よ」を加えても失礼ではないかと尋ね、Aさんは言い方によってソフトになると説明し、さらにZさんが上司にも言えるかと確認し、失礼ではないと答え、学習者の疑問が解消されている。

4) 日本語に関する学習者の自己認識と支援者からのアドバイス

学習者が、自分の日本語に関する現状認識を話す箇所も多く見られた。これも、母語を用いるからこそ話せることであろう。これに対し、Aさんが自らの経験を語りながら、学習方法やコミュニケーションストラテジーをアドバイスしている。

【例6: フォーマルとインフォーマルの使い分け】

Yさん	Es que a veces nos dicen, cuando uno no sabe si uno lo escucha asi lo aprende y cree que asi esta bien y eso es de verdad lo formal, es por eso que no sabe si esta hablando bien y que a uno lo entiendan.	たまに、聞いたとおりに覚えます。それは正しいと思うんですが、それはフォーマルな言い方で、だから自分が正しいかどうか、相手は私が言っていることが分かっているかどうか分かりません。
-----	---	--

Aさん	es por eso que cuando yo aprendí japonés, yo tuve muchos problemas porque yo también hablaba como todos, en la forma que el hablaba el antes es en la forma que yo aprendí porque todo el mundo hablaba así, pero cuando me llegó a tocar que yo tenía hablar por ejemplo con un せんぱい le dicen aca, una persona del mismo trabajo pero esta un año antes, por estar un año antes por más que la edad sea menor el viene a ser tu せんぱい, entonces cuando aca en japonés mucho tienen que es reverendoso, a las personas mayores a las personas que tienen más tiempo de trabajo uno tiene que bajarse.	私が日本語を学んだとき、私はみんなと同じように話していたけど、多くの問題がありました。私が学んだ方法、誰もがそのように、話をしていたんですけど、例えば、“先輩”と話す時、“先輩”と言うのは同じ仕事をしている人で、一年前に入った人、一年前に入ったら年齢は下にもかかわらず、あなたの“先輩”になるから、日本では先輩に年配の人に尊敬語を使うのです。
Xさん	Ya por la experiencia que tienen	彼らは経験があるから？
Aさん	Por la experiencia que el otro tiene, yo sin saber por hablar así de esa forma yo he tenido muchas peleas con gente que ni siquiera conocía yo decía porque	そうです、経験がある。私はそれがわかりませんでした。知らない人に普通に話したら問題がいっぱいありました。私はどうして？と思いました。
Xさん	por que ellos se han sentidos ofendidos pero con la manera de hablar	彼らにとって貴方が言ったことは失礼にあたりましたか？
Aさん	claro pero es que nadie nos enseña eso	そうですが、誰もそれを教えてくれなかった。
Zさん	si es cierto	そうですね！
Aさん	Pero por ejemplo si ahorita yo les digo cual es la diferencia ustedes mismos ya saben cual es y como pueden si escuchan esa palabra como la pueden cambiar a la forma, pero como les dije la forma de hablar a veces no es todo formal es informal todo el contenido puede ser informal pero al ultimo poniendo nada mas esas palabras です, ます y ください, todo ese contenido le cambia como magia le da un poco mas de delicadeza a la palabra	たとえば今私がどのような違いがあるかとたずねれば、あなた達は分かるでしょう。その単語がどのように変化するか分かります。しかし、私が言ったとおり正式な話をする時でも、すべては正式ではないインフォーマルなこともあります。すべての内容がインフォーマルでもこれらの言葉の最後に、“です”、“ます”、“ください”、を付けると、魔法のようにすべての内容が変わって、その言葉はもう少しいいに聞こえます。

この例でYさんは、聞いたとおりに覚えて話すと、それがフォーマルで正しい使い方がどうか分からないと話している。それに対しAさんは、自らが日本語を学んだときも、他の人と同じように話していたが、それを先輩に対して使ったために問題がおこり、それを誰も教えてくれなかったという経験を話している。その上で、いつも言葉の最後に「です」「ます」「ください」をつけることで、魔法のようにすべてが丁寧に聞こえるというストラテジーをアドバイスしている。

5) 学習者の直面する問題の吐露と支援者からのアドバイス

さらに、学習者がより具体的に経験したコミュニケーション上の問題を吐露している箇所もある。ここでAさんは、同じ経験を持つものとしてまず共感し、その後自らが行った解決策などを提示してアドバイスをしている。

【例7: 上司との関係】

Zさん	yo a lo menos cuando trato de hablar con los jefes no de mi fabrica yo trato de usar palabras para que no se sientan ofendidos yo no sabia lo de ahorita de que hay palabras que lo ofenden yo si trataba de hablar las palabras con ます o です o asi trataba de hablar pero ellos me responden asi como できたよ, ちよつとちよつと y hace como que tambien te choca no?	私は工場の上司と話す時に失礼にならないようにしていたけど、ある言葉を使うと失礼になるとは分かりませんでした。“ます”と“です”を付けていたけど、でも彼らは“出来たよ”, “ちよつとちよつと”と私に言います。それが嫌です。
Aさん	es que desgraciadamente cuando uno trabaja el japonés se siente mas alturado que uno	残念ながら働いている時に日本人は私たちを見下すからね
Zさん	si si es cierto	そうですね
Aさん	entonces como dicen ちよつと o やったよ eso es cuando uno le habla disminuyendo a la otra persona hacia abajo o sea cuando uno habla a un niño o a una persona inferior a uno pero si uno se mantiene hablando de esa forma bonita va a llegar un momento de que esa persona cambia	“ちよつと”とか“やったよ”と言うのは自分のレベルより下にいる人と話している時とか、又は子供と話している時に使います。でも自分がきれいな言葉を話し続けると、その人の話し方も変わりますよ。
Zさん	Mmmmh	ああ
Aさん	pero mientras que uno no les falte al respeto (Zさん:si) eso de poco en poco ellos les van a hablar con respeto	自分が失礼なことをしない限り少しずつ変わります。尊敬してくれます。
Zさん	mmmh eso es lo que yo trato y de hablar asi digo porque no vaya yo a meter la pata le hablo asi como si fuera mi esto y despues ya me manda al trabajo mas pesado no?(笑)	んー、私はそうします。間違ったら、礼儀正しく話さなかったら一番大変な仕事をさせられるんじゃないかしら(笑)

この例でZさんは、自分は上司に失礼にならないように「です」「ます」をつけて話しているのに、上司が自分にはインフォーマルに話すのが不快であると話している。それに対しAさんは、まず共感を示し、その上で、自分がきれいな言葉を使い続ければ、相手の話し方や態度も変わるとアドバイスをしている。

5.1.5. 考察

1) 活動のイニシアチブと学習者オートノミー

5.1.3.の活動の構成の分析で見たように、母語を使用できることにより、学習者が自ら積極的に活動のイニシアチブをとっていくこともできる。今回の活動で3人の学習者は、日頃思っていた疑問を、どんどん質問していった。このことは、学習者が自分で自分の学習についての選択をするという学習者オートノミー(青木 2001)が発揮されているという点で非常に重要である。

3, 4章で見たように、Aさんは来日してすぐに入った小学校で、教科書に書かれていた日本語が、全く役に立たなかったという経験から、「Jこども日本語クラブ」や「J日本語教室」においても、教科書にしばられるのではなく、学習者自身の自律性を尊重することを第一に考えている。それは、今回の活動についても同じであった。

だから、今日の、実際は3人の方々も、もう、そういう感じ。もう、いろんな話題をして。何を理解してる、しっかりしてないとか。あと、本当に、やっぱり自分にちょっと誤解してたものがあるとか、それをどういう、なんで誤解されるとか、そういうところ。

2) 母語の使用と「間主観性」の構築

Antón & Dicamilla(1999)は、学習者同士のペアの作文活動を分析し、母語使用の役割として、スキヤフォールディング（タスク遂行のための「足場」となる援助をおこなう）、間主観性の構築と維持（タスクについての見方を共有し、タスクの達成を促進する「社会的空間」を作り上げる）、プライベートスピーチ（認知的に難しい問題に直面したときの思考を媒介する）の3つを挙げている。

今回の学習活動においても、母語を用いて説明や質問がおこなわれることで理解が促進されているのはもちろんのこと、「J日本語教室」の中で、“スペイン語を母語として日本語を学んでいる自分たち”の空間を作り上げ、さらに直面する課題や経験、それに伴う感情を共有しあうことで、“スペイン語を母語として日本社会で日本語を使用する自分たち”をも共有していると言える。すなわち、より広い意味での「間主観性」が構築されている。このような社会的空間を持てることは、日本社会でマイノリティとして生活する人たちにとっては非常に重要な意味を持つといえるだろう。

これも4章で見たように、Aさんも自らの経験を語り、共有することに、自らが支援活動をする意義を見出している。以下に語りを再掲する。

やっぱり、みんなは、実体験を話してあげると、あーそうなんだ、そうなんだねーとか。やっぱりみんな、みんなも、同じような体験してるわけ。場所は別にして。似たような体験してるから、そうなんだ、この間こういうあったんだよーとか。で、僕はどんどんそういう話をひろいあげてくる。逆に言うと、あ、こういうとこで困ってるんだ、じゃみんな、こういうことを知りたがってるんだなと。(中略)Aは(日本に)18年いるんだけど、そういう経験あるんだっていう。で自分がまだ1年しかいないんじゃない、あーそうか、じゃまだそういう体験がこれからあるのかなーとかっていうのを向こう(話を聞いた人)がもっと、そういうなんだろう、もっと気軽に見てくれる？

5.2. Bさんの活動

5.2.1. 活動の概要

Bさんが担当するのは、K国際交流財団主催の日本語教室の初級者向けクラスで、調査当日は2008年度第2期（後期）の13回目の授業であった。参加者は、学習者8名、「パートナー」と呼ばれるボランティアが5名であった。参加者全員に了承を得て、約90分の学習活動を録音・録画した。

5.2.2. 分析方法

1) 学習活動の構成

まず、活動を、教師（Bさん）主導のものと、学習者とパートナーからなるペアまたはグループでのものに分けた。

次に、Aさんの学習活動と同様に、青木他（2004）を参考に学習目標となる言語項目または話題をもとに、学習活動を分割した。それぞれの学習目標と話題の種類は、以下のよう分類された。

学習目標：語彙，文型・文法，談話，社会言語学的知識

話題：運営・進行に関する話題，学習内容に関連した話題，学習内容に関連のない話題

「学習目標」は、Aさんの活動と異なり、「発音」「表記」「コミュニケーションストラテジー」は見られなかった。また、学習目標のない活動部分では、教師から今後のクラス予定を話すなどの「運営・進行に関する話題」と、グループワークをしている間に学習者間、あるいは学習者とパートナーの間で交わされる「学習内容に関連した話題」「学習内容に関連のない話題」の3種類の話題があった。

さらに、学習目標がある場合の、活動のタイプを以下の4種類に下位分類した。

活動のタイプ：インプット，口頭ドリル，解説，Q&A

「インプット」とは、教師やパートナーが新しい言語項目を提示しているところである。「口頭ドリル」は、教師やパートナーが絵を見せたり質問をしたりし、学習者が適切な単語や文を答えているところである。「インプット」と「口頭ドリル」が混ざっている箇所もある。「解説」は教師やパートナーが文法規則や、用法などを説明しているところである。「Q&A」は、学習者同士あるいは学習者とパートナーが、目標となる言語項目を使いながらお互いのことについて質問しあう活動である。

以上のような分類をおこなった上で、今回の学習活動の全体的な特徴を分析する。

2) 特徴の抽出

談話資料を詳細に観察し、またBさんのインタビューでの語りなどを照らし合わせ、Bさんの学習経験が生かされていると思われる点を分析した。

5.2.3. 分析1：活動の構成

教師主導／グループワークの別、内容（学習項目／話題）、それぞれの学習目標／話題の種類、学習目標がある場合の活動のタイプを時間の順に並べると、以下の表のようになる。

入れ子構造になっているものについては、点線で区切っている。

時間	教師主導/ グループワーク	内容 (学習項目/話題)	学習目標/ 話題	活動の タイプ
00:00	教師主導	今後の予定	運営・進行	—
00:40	教師主導	基本的な動詞	語彙	インプット 口頭ドリル
03:35	教師主導	動詞のグループと形の種類	文型・文法	解説 口頭ドリル
06:35	教師主導	辞書形→ない形→ます形→ません 変化のルール 使い分け	文型・文法 社言的知識	解説 口頭ドリル
19:07	グループワーク	既出の動詞とその形の変化	語彙 文型・文法	インプット 口頭ドリル
34:45	教師主導	<目的語>を+動詞	語彙 文型・文法	インプット 解説 口頭ドリル
41:45	教師主導	質問文 「～を～ますか?」「～を～る?」 使い分け	文型・文法 社言的知識	インプット 解説
43:30	グループワーク	習慣についてお互いに聞きあう 「よく～を～ますか?」	文型・文法 談話 語彙	Q&A
49:53		----- パートナーの名前について	----- 関係ない話題	----- —
51:03		----- 習慣についてお互いに聞きあう	----- 文型・文法 談話	----- Q&A
67:30	教師主導 (グループ毎)	動詞とその形の変化 (新しい動詞で)	語彙 文型・文法	インプット 口頭ドリル
71:55	グループワーク	習慣についてお互いに聞きあう (新しい動詞で)	語彙 文型・文法 談話	Q&A
78:00		----- 水泳について	----- 関係した話題	----- —
78:43		----- 動詞の形の変化	----- 文型・文法	----- 口頭ドリル
80:05		----- 同音異義語 「拭く」と「服」	----- 語彙	----- 解説
80:55		----- 動詞の形の変化	----- 文型・文法	----- 口頭ドリル
81:30	教師主導	「よく/ときどき～を～ます」 「あまり/ぜんぜん～を～ません」	文法・文型	インプット 口頭ドリル
84:18	教師主導	次回の予定	運営・進行	—

1) 教師主導の活動とグループワーク

最初に教師 (Bさん) が全体に向けて、文法・文型に関する解説や、口頭ドリルによる確認をおこなった上で、パートナーとのグループワークに入り、個別に確認・練習をしたり、学習項目を用いたやりとりをおこなうという順序で、それが3セット (動詞の形の変化、「～を～ますか?」(既習動詞)、「～を～ますか?」(新出動詞)) くり返されるという構成だった。

このような構成にすることで、日本語教育に関する特別な知識のないパートナーでも、学習目標を理解し、グループワークの際に学習者がわからない点があれば、教師がしたのと同じ説明を学習者に対してすることができていた。

【例1】 <教師主導場面における「解説」>

教師	えーじゃ。のーむの、まずは？しってるひという？
学習者	のみます。
教師	のーみーまーす、ね。はい。のみます。かいてみましょう。のーみーまーす、ね、のみます。ね、じゃこの、むーと、みーはどうしたらいいの？これ、おぼえるだけなの？ね、もうおぼえるのは、たいへんなので、じつはこれは、ルールがあるんです。rule。どういうルールかっていうと、このうしろ。このうしろ、をみるんです。ね、この‘くー’は？どこにありますか。あいうえお、かきくけこ、さしすせそ、どこにありますか？
学習者	かき
教師	か。か、き、く、け、こ。このれつにあるんですよね。で、かくは、まんなかにあります。…ね、ok。jumpして。ひとつうえにjumpすると、これがます。ok？ね。かーく。かーきーまーす。ね、じゃのむは？’む’は？’む’は？まーみーむーめーも。のむ。じゃのむのますは？one jump。はいjump,
学習者	のみ。
教師	のーみーまーす。ね？ok。はいじゃこれわかりましたよね。これ、いちグループね。
	(中略)
教師	じゃ、かくの negative は？
学習者	かきません。
教師	かきませんは、かきますの negative。かくの negative は？ん？ふたつ jump する。ね、
学習者	かかない。

<グループワーク場面におけるパートナーのフィードバック>

パートナー	のむ。
学習者	のむ。のみない？
パートナー	のみない、おいしい！む、
学習者	のーのむない。
パートナー	two jump。one and two。
学習者	のーま、
パートナー	そう、のまない。
学習者	のまない。
パートナー	そうよ、のまない。

また、グループワークの際には、教師は各グループを回って、様子を見て適宜介入をおこなっていた。教師の介入には、進行の促し、学習者の発話に対するフィードバック、解説（補足）があった。

【例2】 <進行の促し>

学習者1(子ども)	(料理を)ぜんぜんしません。
教師	ぜんぜん？ぜんぜん？
学習者2 (学習者1の母)	(学習者1は料理を)ぜんぜんしません。
教師	しません。ok。ぜんぜんしません。
パートナー	えと、あとなんかないかな。
教師	(学習者1に)ok, じゃこの、おにいちゃんにきいてみて。はい。
学習者3	うん、はい。
パートナー	(学習者1を促して)どうぞ。〇〇(学習者3)さん。
教師	(学習者1を促して)〇〇さん？
学習者1	〇〇さん？
学習者3	はい。
学習者1	よーく、ジュース

パートナー	ジュース, を?
学習者 1	を,
パートナー	のみ,
学習者 1	のみ,
パートナー	ますか。
学習者 1	ますか。
学習者 3	ぜんぜんのみません。

【例3】 <学習者の発話に対するフィードバック>

学習者 2	テレビ, テレビを, よく, みますか?
教師	ほんとは, よくをまえにもってきたほうがいいよ。よく, テレビを,
学習者 2	よく, テレビを,
教師	みますか?
学習者 2	●●(学習者 1)さーん, よく, テレビをみますか。(学習者 1 に母語で訳す)
学習者 1	はい。

【例4】 <解説(補足)>

学習者 3	よくテレビを, みますか?
学習者 2	みません。みません。
教師	みる?
学習者 2	み, み, みない。
教師	みない。ok, ともだち ok. みない。
パートナー	ともだち, みない。
教師	ね, みない。でも, せんせいは?みません。
学習者 2	みません。
パートナー	あまり, みません, ぜんぜんみません。どっちですか?ときどきみます。
学習者 2	ときどきみます。ときどき,
教師	みます。
学習者 2	みます。
教師	ていうことは, よくときどきは—ます, あんまりぜんぜんは—, ません。ね, よくは, * * *, ときどきは—often。はい, じゃ, きいてあげてください。

2) 学習目標と話題

クラス形式でかつ初級者対象であるため、動詞のグループと活用、目的語+動詞文、頻度の副詞を加えた質疑応答、と学習目標がはっきりしていた。したがって学習目標の種類としては、「語彙」「文型・文法」「談話」が多かったが、今回の学習活動では動詞の変化を扱う際に、普通体と丁寧体を同時に扱っていたので、その使い分けという「社会言語学的知識」にも触れられていた。

また、初級者対象で、さらに日本語以外の共通言語がないため、学習項目以外に関する発話は非常に少なかった。最初と最後に教師がクラスの予定(運営・進行)を話した箇所以外には、グループワークの中で、学習内容に関係した話題と学習内容に関係のない話題がそれぞれ1回ずつ出てきただけであった。

3) 活動のタイプ

1) と関連して、教師主導の活動においては「インプット」と「解説」と「口頭ドリル」が、グループワークでは「Q&A」がおこなわれることが多かった。

特徴的であったのは、新しい項目を導入する際に、「インプット」や「解説」の後に「口頭ドリル」をするのではなく、「口頭ドリル」が初めから「インプット」と共におこなわれていたことである。

これは、このクラスが地域社会で生活している人たちを対象としたものであるため、学習者が生活の中ですでに見聞きして知っているものがあることを想定しているからであると考えられる。学習者の既知情報を引き出すことによって、予想していなかった反応が返ってくることもあるが、それもBさんは受け入れていた。

【例5】

教師	(「行く」の絵カードを見せる)
学習者	むかっている。
教師	おおむずかしい(笑)。むかっている。なんでてるがでるの？いまは、たべる、きく。うん。だから、むかう。むかう。
学習者	あー。

この例でBさんは「行く」の絵カードを見せているので、学習者の反応としても「行く」を予想していたはずである。しかし学習者から「むかっている」が出てくる。そこでBさんは、今回の学習目標を考え「～てる」の形は取り入れなかったが、「むかう」という語彙の選択を認めている。

この点についてはBさんの意図を確認することができなかったが、これも、日本で生活しながら日本語を身につけたBさんが、その経験から、学習者の言語獲得状況を尊重している現われと言えるかもしれない。

5.2.4. 分析2：学習経験の応用 — 初歩段階における普通体の提示—

今回の活動で最も特徴的であったのは、初歩の学習段階において、動詞の辞書形、「～ない」、「～ます」、「～ません」を同時に扱っていることである。次の【例6】は、【例5】の動詞を提示する活動に続いて、動詞の活用を導入した箇所である。(一部、【例1】の箇所を含んでいる。)

【例6】

1	教師	きょうわたしたちが、べんきょうするのは、じしょ。ね、じしょけい。(板書)じしょ、じしょ、じょ、うーないわね。
2	パートナー	はい。
3	教師	じしょ。と、えーじしょの、じしょの、ひてい。ひてい、ね。と、ます、と、ますのひてい。ひていっていうのは、ひていっていうのは、negative, negative, ね。これのれんしゅうをします。ね。えーで、いちーにーさんは、どうゆうふうにくべつするかっていうと、いちグループは、もし、みなさんが、ます、ね、えーたべる。
4	学習者	たべます。

5	教師	たーべーます。もしまずでみるだったら、せんせいは、まず、あの、じしょけいから、いき ますけれども、いま、だいがく、にほんごがっこうは、まずけいからはいる。このまずか ら。ね、でも、まずでもいいし、こっちでもいいし、どっちでもいいし、ね。たとえばこの、た ーべーる。たべるだったら、‘る’がついてくるので、たーべーる、さいごに‘る’がきます。 ‘る’がきます。ね、あとさっきこれはなに？(絵カードを見せる)
6	学習者	ねる。
7	教師	ねーる。ね、る。‘る’がきます。ね、ていうことは‘る’がくるのは、にグループです。にグ ループですね。じゃいちグループは、なに？‘る’がきません。‘る’がきません。‘る’がこ ないのは、なに？これは？(絵カードを見せる)
8	学習者	のむ。
9	教師	のーむ。のーむ。‘る’がない。‘る’がないですよ？いちグループ。これは？(絵カード を見せる)
10	学習者	か
11	教師	かく。かく。ね、これがいちグループですね。じゃさんグループはなに？さんグループは、 ふたつしかないんです。ね、これはおぼえるしかない。これはくる、する。
12	学習者	くる、する。
13	教師	ね、これは、たくさんありますよ。これもたくさんありますよ。さんグループは、ふたつしか ないんです、ね。はい、えーじゃ。のーむの、まずは？しってるひという？
14	学習者	のみます。
15	教師	のーみーまーす、ね。はい。のみます。かいてみましょう。のーみーまーす。ね、のみま す。ね、じゃこのむーと、みーはどうしたらいいの？これ、おぼえるだけなの？ね、もうお ぼえるのは、たいへんなので、じつはこれは、ルールがあるんです。rule。どういうルー ルかっていうと、このうしろ。このうしろ、をみるんです。ね、この‘くー’は？どこにありま すか。あいうえお、かきくけこ、さしすせそ、どこにありますか？
16	学習者	かき
17	教師	か。か、き、く、け、こ。このれつにあるんですよね。で、かくは、まんなかにあります。… ね、ok。jumpして。ひとつづえにjumpすると、これがます。ok？ね。かーく。かーきーま ーす。ね、じゃのむは？‘む’は？‘む’は？まーみーむーめーも。のむ。じゃのむのます は？one jump。はい jump,
18	学習者	のみ。
19	教師	のーみーまーす。ね？ok。はいじゃこれわかりましたよね。これ、いちグループね。かー く。ね、かーく。かーきーまーす。okじゃかきますの negative は？
20	学習者	かきない？
21	教師	ううん？
22	学習者	(笑)
23	学習者	かきません。
24	教師	かーきーまーすーの negative は？
25	学習者	かきません？
26	教師	かきー？ますをー、ませんにかえるんですよね。かきません。
27	学習者	かきません。
28	教師	かきません。ね、このますをーまーせんに change するんです。ok？ね。じゃ、かくの negative は？
29	学習者	かきません。
30	教師	かきませんは、かきますの negative。かくの negative は？ん？ふたつ jump する。ね、
31	学習者	かかない。
32	教師	かーくー。ね、negative のばあいは、かかープラスうしろは‘ない’。かーかーない。ok？ ね、じゃともだちにはかく、かかない。ね、かく、かかない。しゅくだいをかく。ね、てがみ をかく。てがみをかかない。せんせい、せんせい、には？かきます、かきませーん。ね、 わたしはてがみを、かきませーん。わたしはてがみを、かきます。いいですか？はいじゃ もうひとついってみよう。のむ、ね。のーみーます。じゃのみますの negative は？
33	学習者	のみません。
34	教師	はいいっしょにどうぞ。
35	学習者	のまない。

36	教師	ますだよ。のみますの？
37	学習者	のみません。
38	教師	のみ、ませーん。のみませーん。ね、okじゃ、のむ。のむの negative は？
39	学習者	のまない。
40	教師	jumpしてー、の、ま、なーい。
41	学習者	なーぜ。
42	教師	なぜ、これはともだちとはなす。ね、あなたはだんなさん、あなたの husband。わたしはビールのみなーい。でもせんせい、わたしはビールのみないー。だめよ。せんせいはわたしはビール、のーみーまーせん。いいですか？ね、せんせいはきつと、ジュースのむ？ビールのむ？そのときは？のーみーまーせん。のみま、ともだちは？ジュースのむ？
43	学習者	のまない。
44	教師	のみなーい。のむー。ok。ね、でも、しごとのときはいけません。ね、あるいはがっこうのせんせい。ね、△△せんせいには？のみなーい。NO、のみませーん。おたちせんせいには？のみなーい。NO、のみませーん。ね、いいですか、はいじゃもうひとつ。もういち、ok？すこしわかりましたか？ねこのふたつ* *してね。はい、じゃもうちょ、もういっかいやってみましょう。

この箇所では、Bさんは発話5において、大学や日本語学校は「ます形」から入るが、ここでは辞書形からいくと話している。その上で、辞書形から動詞のグループの見分け方を説明し（発話5～11）、その後「～ます」に変えるルール（発話13～17）、その否定の「～ません」（発話19～26）、そして辞書形の否定としての「～ない」に変えるルールを説明し（発話28～32）、「～ない」と「～ません」の使い分けを説明している（発話32）。その後学習者から質問があることで（発話41）、もう一度どのように普通体と丁寧体を使い分けかを示しながら説明している（発話42～44）。

Bさんはこのように提示した意図を、調査中に筆者に語っている。

最後のグループワークの途中で、Bさんが私（筆者）に「これでいい？」と話しかけてきた。「ああ、いいと思いますよ。」と答えると、「普通体も一緒にやるのはね、自分もそうやって覚えたし、彼らも生活していてどっちも耳にするからなの。普通日本語学校とかではやらないけどね。」と言った。（調査日のフィールドノートより）

さらに、第3章でも示したとおり、Bさん自身は、日本語学校で習った丁寧体を大学で友人に使っても、親密な関係を築くことができず、さびしい思いをしたという経験を持っている。インタビューでの語りを再掲する。

（日本語学校の教科書には）辞書形なんかないから。だから、「私は疲れましたから、家に帰ります」って言うと皆が…（いぶかしむ表情）って感じで、なんか最初は、すごい、寂しかったね。うん。（中略）日本語学校で習った日本語は、あんまり、大学では私にとってはね、本当友達作りにおいては役には立たないっていう実感をしましてね。

Bさんはこのような経験から、特に「積み上げ」を重視するいわゆる「伝統的な日本語教育」からすれば「異例」とも思えるような学習活動を設計しているのであろう。

しかし実際には、学習者の多くは混乱することなく理解し、その後のグループワークの中でも使い分けをしている様子が観察された。

【例7】

学習者3	うん、よく、あー◎◎、◎◎(学習者2)さん。よくテレビを、あーみる？
パートナー	みます
学習者3	あーはい。みます。ともだちー(笑)
パートナー	あ、みる。あーそーだ。

このことは、日々日本語に触れながら生活している人たちの「言語能力」観と、その人々に対する学習支援のあり方の見直しを、支援に携わるわれわれに突きつけているのではないだろうか。

5.3. 外国人支援者が支援することの意義

以上、AさんとBさんの実際の支援活動を分析し、その特徴を考察した。

Aさんの活動からは、学習者と母語を同じくする支援者による活動の特徴として、①詳細な説明、②学習者の言語使用環境に合った説明・提示、③学習者からの「適切さ」に関する質問、④日本語に関する学習者の自己認識と支援者からのアドバイス、⑤学習者の直面する問題の吐露と支援者からのアドバイス、の5点が見出された。

活動の大部分は母語をベースにおこなわれたが、母語を使用することで、理解や活動の進行が促進されるだけでなく、経験や感情を共有しあい、日本語教室あるいは日本社会において、スペイン語を母語して日本語を学んでいる者同士の「間主観性」が構築されていることがわかった。

また、母語がベースとなることで、学習者が自ら学びたいことを積極的に発信し、活動のイニシアチブをとることができており、支援者も自らの学習経験から、そのような学習者のオートノミーを尊重していることもわかった。

一方、Bさんの活動からは、学習者と共通の母語を介さないクラス形式の活動であっても、支援者が日本で生活しながら日本語を身につけてきた経験が生かされており、学習者の既有知識や潜在的言語能力の尊重や、学習者の言語使用環境や必要性に即した学習項目の提示となって現れていることが明らかになった。

これらの中には、学習者と共通の言語を持たなければできないこともあるが、それだけではなく、生活者として暮らす学習者の言語能力観の見直し、学習者の生活世界や言語使用環境から必要な学習活動を創造すること、学習者自身が学びたいことを選択する自律性を尊重することなどは、日本語母語話者支援者も取り入れていくべきことであり、その意

味で、外国人支援者から学ぶところは大きいと言える。

引用文献

Antón, M. & Dicamilla, F. J. (1999) Socio-cognitive functions of L1 collaborative interaction in the L2 classroom. *The Modern Language Journal* 83

青木直子 (2001) 「教師の役割」 青木直子他編『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社

青木直子他 (2004) 『接触会話における在日外国人の日本語習得に影響を及ぼす心理的・社会的要因の研究—平成13年度～15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書—』

6. おわりに

本研究では、地域日本語教室等において活動している外国人支援者を対象に、聞き取り調査と実際の学習支援活動の記録・分析をおこない、かれらのライフストーリーとかれらが考える活動の意義、そして支援活動の実際を明らかにした。その上で、かれらが支援活動に参加する意義と、現在の支援活動のあり方を見直すための視点を述べた。

第3章では、8人の外国人支援者のライフストーリーを紹介し、それらを社会的関係の構築と学び、アイデンティティや将来像といった視点から考察した。その結果、それぞれのライフコースにおいて、他者との関係が構築され、「居場所」ができることや「目標」が設定されることが、「ことば」の問題を乗り越えたり、自主的な「学び」に向かっていくのに重要であることがわかった。また、かれらのアイデンティティは、そういった他者との関係や生活世界の広がりの中で形成され変化し、現在支援活動をおこなっているかれらのそれは、肯定的なものとなっている。そして、自らが渡日を経験し、また現在支援活動をおこなうことで、伝えたいことや作りたいものが生まれ、次世代を担う子どもたちと共に作る自分自身と地域社会の将来像が描かれていた。

第4章では、外国人支援者が考える支援活動の意義を、かれらの語りから明らかにした。かれらが支援活動の意義として考えているのは、参加者が「仲間」を見つけ、学びあえる「居場所」になるということ、そして、自ら学びたいものを選びとる「自律性」を尊重する場であるということである。これらは、かれら自身とそのライフコースの中で求め、得てきたものと重なっていた。また、当事者であったかれらが支援活動に関わることの意義は、同じ「経験を共有」できることと、新しく来日した人にとっての「ロールモデル」になれること、経験から得たことを多数派側や次世代を担う子どもたちに伝えていくことであると考えていた。そしてかれらは、活動を通して自らも学び、自らを開き、過去の自分自身と対峙し続けていることも明らかになった。

第5章では、2人の外国人支援者の実際の活動を分析し、その特徴と意義を明らかにした。学習者と母語を同じくする支援者による活動の特徴として、①詳細な説明、②学習者の言語使用環境に合った説明・提示、③学習者からの「適切さ」に関する質問、④日本語に関する学習者の自己認識と支援者からのアドバイス、⑤学習者の直面する問題の吐露と支援者からのアドバイス、の5点が見出された。母語を使用することで、参加者間の「間主観性」が構築され、学習者が自ら学びたいことを積極的に発信し、オートノミーを発揮できていることが明らかになった。また、学習者と共通の母語等を介さない場合であっても、支援者が日本で生活しながら日本語を身につけてきた経験が生かされており、学習者の既有知識や潜在的言語能力の尊重や、学習者の言語使用環境や必要性に即した学習項目

の提示となって現れていることが明らかになった。

以上のことから、地域日本語教室等における活動のあり方や、そこに外国人支援者が参画することの意義について、以下のように結論づけたい。

1. 生活者として地域に暮らす外国人（あるいは外国にルーツを持つ人）を支援するにあたっては、眼前の「日本語学習」（子どもの場合は「教科学習」も）だけにとらわれるのではなく、「ライフコース」の中でその人の「学び」をとらえていくことが重要である。日本語教室は、心を開くことができる仲間を見つけ、関係を築き、そこを自分の「居場所」と感じられるところとしてまず存在することが必要である。
2. いわゆる「ゼロ」の状態から教室で学ぶのではなく、生活者として日々日本語とともに生きている人たちの言語能力観を改めて見直し、その人の言語使用環境や言語獲得状況を鑑みて支援活動を展開していくこと、またその人自身が「目標」や将来像を持ち、学びたいことを選択する自律性を尊重することが重要である。
3. 地域日本語教室等において、外国人支援者はそこに存在するだけでも、新たに地域で生活する外国人にとって「モデル」としての意義を持つ。またそれだけではなく、上記2点のような視点を日本語母語話者支援者に提供できるという点でも非常に貴重である。外国人支援者がさらに増え、日本語母語話者支援者と共に活動を作っていくことが必要不可欠である。

【資料】

A. 調査依頼書および承諾書

(1) 調査協力者への依頼書および承諾書

さま
様

ちょうさ きょうりょく ねが
調査への協力のお願い

わたし にほんごきょういく せんもん で、だいがく りゅうがくせい にほんご おし
私は日本語教育が専門で、大学で留学生に日本語を教えています。

また、ちいき にほんごきょうしつ さんか ちいき ひく がいこくじん かたがた し あ
また、地域の日本語教室にも参加し、地域に暮らす外国人の方々ともたくさん知り合
いました。そして、がいこくじんじゅうみん しえん かんが
ました。そして、外国人住民への支援のあり方について、考えてきました。

にほん なが く らして、げんざい あたら 新しく来た外国人の方の支援をしたり、た がいこくじん かた
日本に長く暮らして、現在、新しく来た外国人の方の支援をしたり、他の外国人の方と
きょうりょく じぶん かつどう ひと
協力して、自分たちのための活動をしている人たちがいらっしやいます。

そのかた じぶん けいけん から、どのようなことがひつようか、とてもよく知っていらっし
やるとおもいます。他の外国人の方たちからの信頼もとても厚いとおもいます。

わたし は、そのような方たちからお話を聞いたり、じっさい かつどう み
私は、そのような方たちからお話を聞いたり、実際の活動を見させていただいたりする
ことによって、ほんとう ひつよう こうかてき しえん
ことによって、本当に必要で効果的な支援はどのようなものか、学びたいとおもっています。

そこで、ちょうさ ごきょうりょく
そこで、調査にご協力いただけませんか。具体的には、

1. インタビュー（来日の背景、来日後のこと、現在の活動などについて）
2. じっさい がいこくじんしえんかつどう かんさつ
実際の外国人支援活動の観察

いじょう おねが おも
以上の2つをお願いしたいとおもいます。1. のインタビューは日本語でおこない、ろくおん
をさせていただきます。こた えられる はんい お話 いただければ結構です。2. のじっさい かつどう
は、もし可能なら録音・録画させていただきます。録音・録画ができないときは、メモをとらせて
いただきたいです。

いただいたデータは、けんきゅういがい もくてき しよう やくそく
いただいたデータは、研究以外の目的には使用しないことを約束します。また、きょうりょくしや
のプライバシーは必ず守ります。

このけんきゅう もんぶかがくしやう けんきゅうほじょきん う ちょうさけっか ほうこくしよ
この研究は文部科学省から研究補助金を受けており、調査結果は報告書にまとめ、
きょうりょくしや かんげん
協力者のみなさまにも還元します。

けんきゅう もくてき しゆし りかい
研究の目的や趣旨をご理解いただき、ご協力いただきますよう、おねが もう あ
お願い申し上げます。

とっとりだいがくこくさいこうりゅう
鳥取大学国際交流センター
こうし おたち くりえ
講師 御館 久里恵

しょうだくしょ
承諾書

がいこくじんしえんしや けんきゆう さい けんきゆう もくてき しゆし りかい ちょうさ さんか
外国人支援者についての研究に際して、この研究の目的や趣旨を理解し、調査に参加する
ことを承諾します。

またこの ちょうさしりょう ちょうさしや けんきゆうほうこく ろんぶん しょう みと
またこの調査資料を、調査者の研究報告および論文に使用することを認めます。

年 月 日

(ちょうさきょうりやくしや しめい)
(調査協力者 氏名)

・インタビュー実施日^{じっしび} : 月 日

・活動観察日^{かつどうかんさつび} : 月 日

連絡先^{れんらくさき} : _____

承諾書

外国人支援者についての研究に際して、この研究の目的や趣旨を理解し、活動の録音および録画を認めます。

またこの調査資料を、調査者の研究報告および論文に使用することを認めます。

年 月 日

(団体名)

(代表者 または 担当者 氏名)

B. インタビューシート

_____ **さんの あゆみ**

<できごと>

<そのときの気持ち・想い>

・ 来日 (年)

・ 現在

現在の活動

活動グループ(機関)

活動場所

きっかけ

活動内容

楽しいこと・良かったこと

大変なこと・困ったこと

これから

C. 文字化の方法および用いた記号

(1) 録音した授業の文字化方法

1. 日本語の発話は、全て聞こえたとおりにひらがなまたはカタカナで表記する。
外国語の発話はアルファベットで表記し、その日本語訳を右側に記す。

2. 話者が変わったところで改行する。ただし、あいづちのみの発話は改行せず、()
内に挿入する。

例)	教師	それでははじめます。こんにちは。
	学習者	こんにちはー。
	教師	せんしゅうは、けいようしについてべんきょうしましたね？(学習者： はい。) こんしゅうはどうしのべんきょうをします。

3. 母音の引き伸ばしは、長さに応じて「ー」を連続して挿入する。

4. 文意の切れ目を「。」(スペイン語は「.」)で表し、呼気段落ごとに(息継ぎの箇所)
「,」を記入する。

例)	教師	できましたか？では {つぎは,
	学習者	{しつもんがあります。
	教師	はい。

5. 話者が重なっているところは、 { で示す。(上記4. 例)

6. 上昇調のイントネーションがあるところは「？」で表す。

7. 長めの沈黙がある場合、丸括弧内にドット(・・・)を書いて示す。おおよそドット
1つを1秒とする。

8. 笑いは、「(笑)」で表す。音を表記できるくらい大きな笑いの場合はひらがな(外国
語による発話の時はアルファベット)で表す。

例) 教師：おもしろいですねー。(笑)
教師：おもしろいですねー。はっはっは。

9. 音声聞き取れない箇所は、 *** としておく。

10. 調査者が非言語行動や状況説明を加える場合は、()で挿入する。

(2) インタビューの文字化方法

1. 漢字・かな・数字で表記する。
2. 話者が変わったところで改行する。「話者名」「:」に続けて発話を記す。一人の話者が話し続けているときは、2行以上にわたっても2行目以下の行頭は下げなくてよい。

例) 御館：今日はよろしくお願ひいたします。
A：こちらこそ。
御館：まずは日本に来られる前のことについておうかがいしたいんですが、日本に来るまえは国で何をされていたんですか？

3. 言い間違いや、相手の発話にはさまれたあいづちなど、文意に影響しないものは省略する。(同意や肯定を表す「うん」「そうですね」などは記述する。)
4. フィラー(「あー」「えっとー」など)は省略して構わないが、質問への答えにくさや戸惑い、思考中を表している場合は省略しない。(判断に迷った場合は記述しておく。)
5. 母音の引き伸ばしは、長さに応じて「ー」を連続して挿入する。
6. 文意の切れ目を「。」で表し、呼気段落ごとに(息継ぎの箇所)「,」を記入する。話者が交代するときでも、語りが途中ならば「。」でなく「,」で終わることもある。

例) A：それで私の経験を他の人にも伝えてあげたいと思ったんですよ。
御館：あー、新しく日本に来られた方もいらっしゃるから、
A：その人たちのために何か力になりたいと思ひましてね。

7. 上昇調のイントネーションがあるところは「？」で表す。
8. 長めの沈黙がある場合、丸括弧内にドット(・・・)を書いて示す。おおよそドット1つを1秒とする。
9. 笑いは、「(笑)」で表す。音を表記できるくらい大きな笑いの場合はカタカナで表す。
例) A：そのへんはいいかげんなもんで。(笑)
A：そのへんはいいかげんなもんで。ハッハッハ。
10. 音声聞き取れない箇所は、*** としておく。
11. インタビュアーが非言語行動や状況説明を加える場合は、()で挿入する。

平成 21 年度～平成 22 年度科学研究費補助金 [若手研究(B)]
研究成果報告書 (課題番号 : 20720139)

地域日本語教室における外国人支援者の存在意義と、
かれらの「語り」に関する研究

発行日 2010 年 3 月 30 日

発行 御館 久里恵

鳥取大学国際交流センター

〒680-8550 鳥取市湖山町南 4-101

電話 0857-31-5748 FAX 0857-31-6065